

Sibelius 6

ハンドブック

6.1 版
2009 年 7 月

Tom Clarke and Daniel Spreadbury 著作

ソフトウェア開発チーム全員のリストおよび謝辞については、[バージョン情報] ダイアログをご覧ください。

開発に際して Sibelius とそのマニュアルについてさまざまな貴重なご意見をいただいた多くの方々に、ここであらためてお礼を申し上げます。

この『リファレンス』をよりよいものにしていくために、皆様よりご意見を「最新情報とテクニカルヘルプ」に掲載されているテクニカルヘルプサポートまでご連絡いただければ幸いです。

Sibelius の著作権 © Avid Technology, Inc. とそのライセンス供与者 1987–2009

Sibelius ハンドブックの著作権 © Avid Technology, Inc. 1992–2009

発行：Avid Technology, Inc., The Old Toy Factory, 20–23 City North, Fonthill Road, London N4 3HF, UK

不許複製。このハンドブックは、発行者による書面での事前の許可なくして、その一部または全部を、電子的方法、記録的方法、機械的方向、写真複写的方法、あるいはその他のいかなる方法によっても、それを複製したり検索システムに保存したりあるいは転送することを禁じます。この『リファレンス』の作成に際しては十分な注意を払いましたが、誤記あるいは欠落に起因するいかなる損失または損傷に対しても、発行者および著者は責任を負わないものとします。

Sibelius、Sibelius ロゴ、Scorch、Flexi-time、Espressivo、Rubato、Rhythmic feel、Arrange、ManuScript、Virtual Manuscript Paper、House Style、SoundStage、Opus、Inkpen2、Helsinki、magnetic、multicopy、Optical、Dynamic parts、青と白の音符のロゴおよび二重螺旋のロゴ、SibeliusMusic.com、SibeliusEducation.com、「The fastest、smartest、easiest way to write music」および「99% inspiration、1% perspiration」はすべて、米国、英国、およびその他の諸国での Avid Technology 社の商標または登録商標です。その他すべての商標はそれぞれの所有者に帰属します。

目次

はじめに	5	2.4 スコアへの記号の追加	80
1.1 Sibelius の歴史	7	2.5 レイアウトとフォーマット	85
1.1 『ハンドブック』について	8	2.6 ダイナミックパート	89
1.1 インストールの前に	11	2.7 エクスポート	92
1.1 Windows でのインストール	12	プロジェクト 3	95
1.1 Mac でのインストール	17	3.1 キーボードの楽譜	97
1.1 ユーザー登録	22	3.2 ギターの楽譜	99
1.1 Windows での MIDI セットアップ	27	3.3 アイデアとドラムの楽譜	101
1.1 Mac での MIDI セットアップ	30	3.4 コード記号	107
1.1 プロジェクトについて	33	3.5 リピートとコーダ	111
プロジェクト 1	35	3.6 アレンジと再生	114
1.1 スコアを開く	37	プロジェクト 4	119
1.2 音符の編集と入力	42	4.1 ワークシートの設定	121
1.3 楽譜の選択とコピー	48	4.2 スケールとアルペジオ	126
1.4 フレキシタイム入力	52	4.3 レイアウトとフォーマット	129
1.5 アルファベット入力とステップタイム入力	56	4.4 クラスルームコントロール	133
1.6 再生	61	プロジェクト 5	137
1.7 テキストと強弱記号	64	5.1 ビデオの使用	139
プロジェクト 2	69	5.2 映像に合わせた作曲	141
2.1 新規スコアの作成	71	5.3 サウンドトラックのビデオへの追加	144
2.2 スキャニング	75	索引	147
2.3 音部記号、調号、連音符	78		

はじめに

はじめに

Sibelius の歴史

ベン・フィンとジョナサン・フィンの双子の兄弟は、学生だった 1987 年に Sibelius の開発に着手しました。それから 6 年間で費やし、かつてないほど多様で洗練された機能、見やすいユーザーインターフェース、優れた情報処理能力を有する音楽プログラムを開発しました。オックスフォード大学とケンブリッジ大学を卒業後の 1993 年、フィン兄弟は、開発したプログラムを販売する会社を設立しました。

Sibelius はまたたく間に成功を収めました。以来、フィン兄弟のソフトウェアビジネスは予想を大幅に上回る成長を見せ、現在ではアメリカ合衆国、イギリス、オーストラリアにオフィスを構え、100 カ国以上で販売されています。

2006 年、Sibelius は Avid 社（デジタルメディアプロダクションおよび作曲に使用される、Pro Tools その他の業界標準ツールを提供する製造メーカー）に合併され、さらに飛躍を遂げました。Sibelius は、販売数世界一を誇る楽譜作成ソフトです。

Sibelius の対象ユーザー

Sibelius は、あらゆるタイプのミュージシャンを対象にデザインされています。Sibelius のユーザーは、学生、教育者、各種学校や大学などの教育機関、作曲者、編曲者、演奏者、世界をリードする音楽出版社など、多岐にわたります。また、小学校からプロの音楽関係者にわたって同一のプログラムが利用されているという事実も、Sibelius の優れた操作性と機能性を実証しています。

Sibelius は、古楽からジャズ、ロックから現代音楽、合唱から交響楽にいたるまで、あらゆるジャンルの音楽に対応しています。

著名な Sibelius ユーザーには、指揮者 Michael Tilson Thomas（マイケル・ティルソン・トーマス）、作曲家 Steve Reich（スティーブ・ライヒ）、合唱曲作曲家 John Rutter（ジョン・ラター）、ロックギタリスト Andy Summers（アンディ・サマーズ）、ジャズ奏者 Jamie Cullum（ジェイミー・カラム）などがあるほか、英国王立音楽アカデミーでも使用されています。また、Hal Leonard（ハル・レオナード）、Music Sales（ミュージック・セールス）、Boosey & Hawkes（ブージー & ホークス）といった世界屈指の音楽出版社も、従来の楽譜出版およびインターネットを利用した楽譜のオンライン販売に Sibelius を使用しています。

また、Sibelius は、『Keyboard』誌の Key Buy 賞、『Electronic Musician』誌のエディターズチョイス賞（3 回）、『MacWorld』誌の 5 つ星（2 回）、『Computer Music』誌の最高 10/10 点など、並々ならぬ高い評価を得ています。Sibelius 5 は、専門誌によるエディターズチョイス賞をなんと 4 つも受賞しています。

『ハンドブック』について

『ハンドブック』の読み方

Sibelius プログラムの使用を開始する前に、必ずこの 1.1 はじめに セクションを通してお読みください。

Sibelius を使って独自の楽譜作成を始める前に、『ハンドブック』に含まれる 5 つのプロジェクトのうち少なくとも最初の 3 つに目を通すことを強くおすすめします。Sibelius は、分かりやすく、ほとんどの操作について説明を要しませんが、これらのプロジェクトに目を通さないで作業を進めると、いくつかの基本的な機能を理解することのないまま使用することになる危険があります。特に、これまで別の楽譜作成ソフトウェアを使用していた場合は、Sibelius とは動作が異なることがあるため、その可能性が高まります。プロジェクトの所要時間は数時間です。プロジェクトに目を通せば、一般的な楽譜の入力、編集、再生、印刷の操作を理解することができ、より複雑な楽譜の扱いについても学ぶことができます。

この『ハンドブック』は、コンピュータの基本操作（マウスやキーボード、メニュー、ファイルなどについて）をご理解いただいていることを前提として説明しています。

オンスクリーンリファレンス

各トピックの詳細については、Sibelius の『リファレンス』で個別に説明しています。リファレンスでは、各機能の詳細を（専門用語について説明した用語集とともに）説明しています。画面上にリファレンスを開くには、ツールバーのボタン（右図）をクリックするか、[ヘルプ] ▶ [ドキュメント] ▶ [Sibelius リファレンス]（ショートカットは **F1** または **⌘R**）を選択します。



『リファレンス』は、最初から最後まで通してお読みいただく必要はありません。多くのユーザーにとって、実際に必要となるのは記譜法のほんの一部だけである場合が多いからです。時間があるときに、『リファレンス』の関心のある部分に目を通してください。

『リファレンス』は、製本版としてもお求めいただけます（別売）。ご希望の方は、www.sibelius.jp をご確認ください。

リファレンスのコラム

『リファレンス』の随所に置かれているこのようなコラムは、さまざまな記譜ルールについて説明しています。

表記と参照について

コンピュータキーボードのキーの名称、メニュー、ダイアログなどは次のように表記されます。

メニューとサブメニューは「▶」で示されます。たとえば、[ファイル] ▶ [開く] は、[ファイル] メニューから [開く] を選択することを意味します。

 2.1 臨時記号の表記は、『リファレンス』の「臨時記号」トピックを参照してください、という意味です。[ヘルプ] ▶ [ドキュメント] ▶ [Sibelius リファレンス] を選択して画面の表示を参照するか、別売の製本版『リファレンス』をお読みください。

基本的な用語

以下のコンピュータ用語はほとんどがよく知られているものですが、一部にはあまり知られていないものもありますので、念のため説明しています。

- コンピュータのキーによっては、MacとWindowsで名称が異なるものがあります。この『ハンドブック』では、次の表記方法に従っています。

Mac の記号	Mac での名称	Windows での名称
⌘	Command	Ctrl (「Control」)
⇧	Shift	Shift
⌥	Option	Alt
↵	Return	Return (メインキーボード)
⏎	Enter	Enter (テンキー)

- Sibelius の操作方法は、Windows 上でも Mac 上でもほとんど同じですが、違いがある場合には(主にキーボードショートカット)、Windows 上での操作が先に記載されます。Windows と Mac のキーボードショートカットの違いについて、詳しくは『リファレンス』の 5.12 メニューとショートカットを参照してください。ショートカットの一覧が記載されています。キーボードショートカットは、プログラムのメニューにも表示されます。
- 「**Ctrl+A** または **⌘A**」の表記は、「**Ctrl** キー (Windows) または **⌘** キー (Mac) を押さえたまま **A** を押す」ことを意味します。**A** が大文字で書かれていても **Shift** キーは押さないでください (押す必要がある場合は明示されます)。同じように、「**Ctrl+?** または **⌘?**」といった標準的なショートカットの場合、1つのキーに **/** と **?** がありますが、**Shift** キーを使わず、**Ctrl+/ **または **⌘/?** を押します。****
- 「**Alt+ クリック** または **⌥+ クリック**」の表記は、「**Alt** (Windows) または **⌥** キー (Mac) を押したままクリックする」ことを意味します。
- Windows の場合、クリックとは、マウスポインタを対象に置き、マウスの左ボタンでクリックすることを指します。右クリックとは、マウスポインタを対象に置き、マウスの右ボタンでクリックすることを指します。
- Mac の場合、クリックとは、マウスポインタを対象に置き、左ボタンがある場合は左ボタンでクリックするか、旧型の 1 つボタンのマウスの場合はそのボタンでクリックすることを指します。**Control+ クリック**とは、キーボードの **Control** (**Ctrl** と表記されることもある) キーを押したまま、左クリック (1 つボタンではそのボタンをクリック) することを指します。ただし、マウスに右ボタンがある場合は右ボタンをクリックします。
- ドラッグとは、マウスポインタを対象に置き、マウスの左ボタン (Mac の 1 つボタンではそのボタン) でクリックし、ボタンを押したままマウスを動かすことを指します。目的の位置まで動かしたら、マウスボタンを放します。
- ダイアログとは、各種選択ボタンを含むウィンドウです。ダイアログによっては、複数のページから構成され、ダイアログのページを切り換えるためのポップアップコンボボックス (Mac)、上部のタブ、リストボックスなどがあるものもあります。
- テンキーとは、コンピュータキーボードの右端にあるキープロックで、数字や記号が割り当てられています。(通常、ノート型 (ラップトップ) コンピュータにはテンキーが付属していません。詳しくは、『リファレンス』の 5.12 メニューとショートカットを参照してください。)
- “**Return** キーは、コンピュータメインキーボード (文字キーが並んでいるブロック) の右端にある大きなキーです。キーボードによってはキーに “**Enter**” という文字や特殊な矢印記号が表記されていることもあります。Sibelius では常に **Return** キーと表記しています。
- “**Enter** キーは、テンキーの右下端にある大きなキーです。キーボードによってはキーに表記がないこともあります。その場合も **Enter** キーを意味します。

『リファレンス』の最後にある用語集では、あまり一般的でない専門用語について説明しています。

はじめに

アメリカ英語とイギリス英語

Sibelius プログラムおよびこの『ハンドブック』では、アメリカ英語の表現が使用されています。しかし、その他各国のユーザーのために、アメリカ英語以外の表現を () 内に示すこともあります。

アメリカ英語とイギリス英語の表現の違いは、日本語の翻訳には反映されません。また、アメリカ英語とイギリス英語のつづりの違いも、日本語の翻訳には反映されません。

ご意見

Sibelius は常にハンドブックおよびリファレンスの品質の向上に努めています。私共の説明書に対するご感想、ご指摘、ご意見がございましたら、**docs@sibelius.com (英語)** まで電子メールをお送りください。

Sibelius プログラムへのご意見もお待ちしております。Sibelius ウェブサイトのチャットページ (英語) へご掲示いただくか、テクニカルヘルプまでご連絡ください。

インストールの前に

同梱品

パッケージには、今お読みいただいている『ハンドブック』のほか、次のものが同梱されています。

- プラスチックケースに入ったインストール DVD-ROM。ケースの裏面にシリアル番号が記載されていますので、ケースをなくさないようご注意ください。
- 最新情報とテクニカルヘルプシート。サポートに関する詳しい情報が記載されています。
- ネットワークサイトライセンスをご購入いただきました場合は、CD-ROM（Sibelius DVD-ROM と同じケース）と Sibelius 6 ライセンスサーバーユーザーガイドも同梱されています。

シングルコピー

（5 ライセンスパックまたはアカデミックサイトライセンスではなく）Sibelius のシングルコピーをご購入いただきました場合は、1.1 Windows でのインストール（12 ページ）、または 1.1 Mac でのインストール（17 ページ）にお進みください。

5 ライセンスパックとスタンドアローンのサイトライセンス

スタンドアローンのサイトライセンスをご購入いただきました場合、ネットワークに接続されていない5台以上のコンピュータにSibeliusを同時にインストールすることができます。5ライセンスパックをご購入いただきました場合、インストール用 DVD-ROM が 1 枚提供されます。5 コピー以上をご購入いただきました場合、5 ライセンスパック（DVD-ROM1 枚）とシングルコピーの組み合わせ、または、指定数のコンピュータにインストールできる DVD-ROM1 枚のいずれかが提供されます。5 ライセンスパックを複数ご購入いただきました場合は、DVD-ROM1 枚ごとに 5 台のコンピュータに対応するシリアル番号を使用してインストールしてください。

サイトライセンスの規模にかかわらず、スタンドアローンのコンピュータに個別に Sibelius をインストールし、ユーザー登録する必要があります。1.1 Windows でのインストール（12 ページ）または 1.1 Mac でのインストール（17 ページ）を参照してください。Sibelius のスタンドアローンのコピーをネットワークや仮想ディスクにインストールすることはできません。各クライアントコンピュータのローカルハードディスクにインストールする必要があります。

サイトライセンスのコピーはすべて、同一教育機関内の単一の地理的場所でのみ使用を条件とします。Sibelius による許可なく、サイトライセンスのコピーをノート型（ラップトップ）パソコンや教師宅のコンピュータなどのその他の場所にインストールすることは禁じられています。

ネットワーク上でSibeliusを使用したいのにもかかわらずスタンドアローンのサイトライセンスをご購入いただきました場合、テクニカルヘルプまでご連絡ください。

ネットワークライセンス

ネットワークサイトライセンスをご購入いただきました場合、Sibelius のインストールと登録について、同梱の Sibelius 6 ライセンスサーバーユーザーガイドを参照してください。

Windows でのインストール

動作環境

Sibelius6 のみのシステム要件：

Windows XP 32 ビット SP2 以降、Windows Vista 32 ビット SP1 以降、または Windows 7 32 ビットまたは 64 ビット、512MB 以上の RAM、550MB のハードディスク容量、DVD-ROM ドライブ

付属の Sibelius Sounds Essentials サウンドライブラリー使用時の推奨システム要件：

Intel Core Duo または AMD Turion 以降、1GB 以上の物理 RAM (2 GB 推奨)、3.5GB のハードディスク容量、ASIO 準拠のサウンドカード

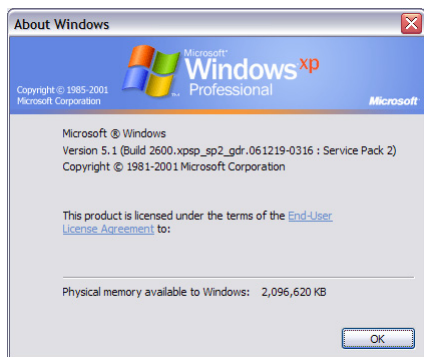
コンピュータが推奨システム要件を満たしていなくても Sibelius Sounds Essentials を使用することはできますが、同時に多くの音源を使用することはできません。

Sibelius 6 をインストールし起動するには、Windows XP Service Pack 2 以降を実行している必要があります。Windows 95、Windows 98、Windows Me、Windows 2000、Windows NT 4.x のいずれかを使用している場合、最新 Windows オペレーティングシステムにアップグレードする必要があります。

Windows XP SP2 または SP3 を実行しているかどうかを調べる方法

Windows XP を使用しており、Windows XP SP2 または SP3 を実行しているかどうか分からない場合は、次のように行います。

- [スタート] ボタンをクリックし、[ファイル名を指定して実行...] を選択します。
- 開いたボックスに「winver」と入力し、Return キー（メインキーボード）を押します。
- 次のようなウィンドウが表示されます。



テキストの 2 行目の最後に「Service Pack 2」または「Service Pack 3」と表示されます。表示されない場合、アップデートする必要があります。最も簡単なアップデート方法は、[スタート] メニューから [Windows Update] を選択して、自動的にダウンロードする方法です。Sibelius を実行したいコンピュータがインターネットに接続されていない場合は、CD-ROM の Windows XP Service Pack 2 を入手するか、他の場所でダウンロードしたものを CD に焼き、コンピュータで使用します。詳しくは、<http://www.microsoft.com/japan/windows/products/windowsxp/sp3/default.msp> を参照してください。

MIDI デバイスの接続

Sibelius をインストールする前に、Sibelius で使用する MIDI デバイスのセットアップを行いたい場合は、 Windows での MIDI セットアップ (27 ページ) を参照してください。

ただし、MIDI デバイスのセットアップは後からでもできますので、先に Sibelius をインストールしてもかまいません。

管理者権限

Sibelius のインストールには、コンピュータの管理者権限を持つユーザーアカウントを使用する必要があります。インストール後の Sibelius の登録にも、管理者ユーザーアカウントを使用するか、表示されるメッセージに管理者ユーザー名とパスワードを入力する必要があります。

Sibelius のインストール後、管理者ユーザーとして起動し、登録してください。

ソフトウェアの登録が完了したら、他のアプリケーションと同様に一般ユーザーとして Sibelius を起動し、システムのセキュリティを確保します。

コンピュータを使用する唯一のユーザーである場合、または、コンピュータのユーザーアカウントや管理者権限について知らない場合、上記の内容を無視し、通常どおりにソフトウェアをインストールしたのでかまいません。

Sibelius のインストール

多くのソフトウェアマニュアルでは、重要なインストール手順の説明が次のように簡略化されていることがあります。「画面の指示に従って操作してください」これは、マニュアル作成者が手順を把握できていないことが原因です。マニュアルの作成後、インストール手順が変わる可能性があるためです。

この『ハンドブック』では、Sibelius のインストール手順を具体的に説明しています。

- 起動しているすべてのアプリケーションを終了します。コンピュータ起動時に自動的に起動するウイルス対策ソフトまたはスパイウェア対策ソフトも終了してください。
- SibeliusDVD-ROM をケースから取り出し、コンピュータの DVD-ROM ドライブに(ラベルが印刷された側を上にして) 挿入し、ドライブスロットを閉じます。
- 数秒後、DVD-ROM ドライブが作動し、画面にダイアログが表示されます。(しばらくしても何も表示されない場合は、[スタート] メニューをクリックして [ファイル名を指定して実行...] を選択し、「D:\autorun」と入力します。この D は、DVD-ROM のドライブ名です。それから、メインキーボードの **Return** キーを押します。)
- Windows Vista または Windows 7 では、小さな [自動再生] ウィンドウが表示されます。[プログラムのインストール / 実行] の下の、[autorun.exe の実行] をクリックします。
- メインインストールウィンドウで、[Sibelius 6 をインストール] をクリックすると、Sibelius のアップグレードが開始します。
- Windows Vista または Windows 7 では、画面が暗くなることがあり、それから [ユーザーアカウント制御] ウィンドウが表示されます。インストールの作業を進める場合は、[続行] をクリックします。
- Windows XP で、Microsoft Windows Installer がコンピュータにインストールされていない場合、インストールを促すメッセージが表示されます。[インストール] をクリックし、Windows Installer キットをインストールします。これには数分かかることがあります。
- 同じように、Windows XP で、Microsoft .NET Framework 2.0 がコンピュータにインストールされていない場合、インストールを促すメッセージが表示されます。[インストール] をクリックすると、使

用許諾契約が表示されます。[同意する] をクリックして表示された使用許諾契約を承諾し、.NET Framework をインストールします。これには数分かかることがあります。

- 数秒後、[Sibelius 6 セットアップ] ウィンドウが表示されます。[次へ] をクリックします。
- Sibelius 使用許諾契約が表示されます (リファレンスの最後にも記載されています)。[ライセンス契約に同意します] をクリックし、[次へ] をクリックします。
- インストール先のパス (コンピュータ内の場所) を確認するダイアログが表示されますが、Sibelius が参照する場所を指定する特別な理由があり、設定を変更する方法を知っている場合を除き、このままにしておきます。Sibelius を [すべてのユーザー] に対して、あるいは [現在のユーザー] に対してインストールするかどうかを選択します。この選択で、コンピュータを使用するすべての人のデスクトップに Sibelius が表示されるのか、自分のデスクトップにのみ表示されるのかが決まります。[すべてのユーザー] を選択しておくことをおすすめします。[次へ] をクリックします。
- インストール準備が完了したことを示すメッセージが表示されます。[次へ] をクリックします。
- Sibelius のインストールが始まり、インストールの進行状況を示す画面が表示されます。これには数分かかることがあります。
- インストーラが終了し、[完了] をクリックすると、最初に DVD-ROM を挿入したときに表示されたウィンドウに戻ります。

Sibelius 6 を起動する前に、Sibelius 6 DVD-ROM から他のアプリケーションをインストールするかどうか決めてください。

Sibelius Sounds Essentials のインストール

Sibelius Sounds Essentials は、Sibelius で使用する高音質のサウンドライブラリーです。インストールは次のように行います。

- メインインストールウィンドウで、[Sibelius Sounds Essentials をインストール] をクリックします。
- しばらくするとインストーラが開始します。
- Windows Vista または Windows 7 では、画面が暗くなることがあり、それから [ユーザーアカウント制御] ウィンドウが表示されます。インストールの作業を進める場合は、[続行] をクリックします。
- [Sibelius Sounds Essentials for Sibelius 6 Installation Wizard へようこそ] ウィンドウが表示されます。[次へ] をクリックします。
- 使用許諾契約の画面が表示されます。 [ライセンス契約に同意します] をクリックし、[次へ] をクリックします。
- インストール先のパス (コンピュータ内の場所) を確認するダイアログが表示されますが、参照する場所を指定する特別な理由があり、設定を変更する方法を知っている場合を除き、このままにしておきます。[次へ] をクリックします。
- Sibelius Sounds Essentials のインストール準備が完了したことを示すメッセージが表示されます。 [インストール] をクリックします。
- インストールが始まり、インストールの進行状況を示す画面が表示されます。これには数分かかることがあります。
- インストールが完了したら、[完了] をクリックします。

PhotoScore Lite のインストール

PhotoScore Lite は、Neuratron によるアプリケーションで、印刷済み楽譜やインターネットからダウンロードした PDF ファイルをスキャンし、独自に入力した楽譜のように Sibelius 上で編集、移調、印刷を行うことができます。

PhotoScore Ultimate を購入していなければ、PhotoScore Lite を Sibelius 6 DVD-ROM からインストールする必要があります。

- メインインストールウィンドウで、**[PhotoScore Lite をインストール]** をクリックします。
- Windows Vista または Windows 7 では、画面が暗くなることがあり、それから **[ユーザーアカウント制御]** ウィンドウが表示されます。インストールの作業を進める場合は、**[続行]** をクリックします。
- **[次へ]** をクリックすると、PhotoScore Lite の使用許諾契約が表示されます。目を通し、**[次へ]** をクリックします。
- 次の情報を入力します。**[名前]** を入力します。**[製品 ID]** は、自動入力されています。入力が入ったら、**[次へ]** をクリックします。
- PhotoScore Lite のプログラムファイルの格納場所についてのメッセージが表示されます。必要があれば場所を変更してもかまいません。変更しない場合は、**[次へ]** をクリックします。
- もう一度 **[次へ]** をクリックすると、PhotoScore Lite がインストールされます。それから **[完了]** をクリックします。

AudioScore Lite のインストール

AudioScore Lite は、マイクに向かってアコースティック楽器を演奏する音楽を楽譜へと自動的に書き換えるアプリケーションです。入力された楽譜を Sibelius へと送信し、さらに編集することができます。

AudioScore Ultimate を購入していなければ、AudioScore Lite を Sibelius 6 DVD-ROM からインストールする必要があります。

- メインインストールウィンドウで、**[AudioScore Lite をインストール]** をクリックします。
- Windows Vista または Windows 7 では、画面が暗くなることがあり、それから **[ユーザーアカウント制御]** ウィンドウが表示されます。インストールの作業を進める場合は、**[続ける]** をクリックします。
- **[次へ]** をクリックすると、AudioScore Lite の使用許諾契約が表示されます。目を通し、**[次へ]** をクリックします。
- 次の情報を入力します。**[名前]** を入力します。**[製品 ID]** は、自動入力されています。入力が入ったら、**[次へ]** をクリックします。
- AudioScore Lite のプログラムファイルの格納場所についてのメッセージが表示されます。必要があれば場所を変更してもかまいません。変更しない場合は、**[次へ]** をクリックします。
- もう一度 **[次へ]** をクリックすると、AudioScore Lite がインストールされます。それから **[完了]** をクリックします。

Sibelius Scorch のインストール

ここで、Scorch をインストールする必要があります。Scorch とは、無料ウェブブラウザのプラグインで、インターネットで Sibelius のスコアの表示、再生、移調、印刷などが行えます。

- まず、動作中のウェブブラウザをすべて終了します。

はじめに

- メインインストールウィンドウで、**[Install Scorch]** をクリックします。
- インストーラが開始するまで、数分かかることがあります。そのまましばらく待ちます。**[Welcome to Sibelius Scorch (all browsers) Setup Wizard]** ウィンドウが表示されます。**[Next]** をクリックします。
- Scorch 使用許諾契約が表示されます。目を通し、**[I Agree]** ラジオボタンをクリックして **[Next]** をクリックします。
- Scorch のインストールフォルダを選択します。再び、**[Next]** をクリックします。
- Scorch のインストール準備が完了したことを示すメッセージが表示されます。**[Next]** をクリックします。
- Windows Vista または Windows 7 では、画面が暗くなることがあり、それから **[ユーザーアカウント制御]** ウィンドウが表示されます。インストールの作業を進める場合は、**[続行]** をクリックします。
- Scorch のインストール中に画面の物が光り飛び交います。それほど時間はかかりません。
- インストーラが完了したら、**[Close]** をクリックします。

Sibelius の再インストール

Sibelius プログラムの再インストールが必要になった場合は、DVD-ROM をコンピュータのドライブに挿入し、最初のインストールと同じ手順に従ってください。インストーラは、Sibelius がコンピュータにすでにインストールされていることを検出し、ダイアログで以下の 3 つのオプションを示します。**[修理]** を選択し、**[次へ]** をクリックし、再び **[次へ]** をクリックして選択を確認します。アプリケーションがインストールされるまで待ち、**[完了]** をクリックします。

Sibelius のアンインストール

アンインストールとは、Sibelius プログラムのコピーをコンピュータから削除することです。何らかの原因で Sibelius が正常に作動しなくなった場合、まずは、アンインストールせず同じ場所に再インストールしてみましょう（上記の 1.1 **Sibelius の再インストール** を参照）。

Sibelius のプログラムフォルダや他のプログラムフォルダを、別の場所に移動したり、フォルダ名を変更したりしないでください。オペレーティングシステムが正しく認識しなくなる可能性があります。

- [スタート]メニューから[コントロールパネル]を開きます。**[プログラムの変更と削除]** (Windows XP) または **[プログラムと機能]** (Windows Vista または Windows 7) をダブルクリックします。
- PhotoScore Lite をインストールしている場合は、まずそちらをアンインストールします。**[Neuratron PhotoScore Lite]** を選択し、**[変更と削除]** (Windows XP) または **[アンインストール]** (Windows Vista または Windows 7) をクリックして、画面の指示に従います。
- AudioScore Lite をインストールしている場合は、次にそちらをアンインストールします。**[Neuratron AudioScore Lite]** を選択し、**[変更と削除]** (Windows XP) または **[アンインストール]** (Windows Vista または Windows 7) をクリックして、画面の指示に従います。
- Sibelius Sounds Essentials をインストールしている場合は、次にそちらをアンインストールします。**[Sibelius Sounds Essentials for Sibelius 6]** を選択し、**[変更と削除]** (Windows XP) または **[アンインストール]** (Windows Vista または Windows 7) をクリックして、画面の指示に従います。
- Scorch をアンインストールする必要はありません。
- Sibelius 自体をアンインストールするには、リストから **[Sibelius 6]** を選択し、**[変更と削除]** (Windows XP) または **[アンインストール]** (Windows Vista または Windows 7) をクリックします。その後、画面の指示に従います。

Mac でのインストール

動作環境

Sibelius6 のみのシステム要件：

Mac OS X 10.4.11 以降、Mac OS X 10.5.7 以降、Mac OS X 10.6、512MB 以上の RAM、550MB のハードディスク容量、DVD-ROM ドライブ

付属の Sibelius Sounds Essentials サンプルライブラリー使用時の推奨システム要件：

Intel Core Duo 以降、1GB 以上の物理 RAM（2 GB 推奨）、3.5GB のハードディスク容量

コンピュータが推奨システム要件を満たしていても Sibelius Sounds Essentials を使用することはできませんが、同時に多くの音源を使用することはできません。

Mac OS X 10.4 より前のバージョンの Mac OS X を実行している場合は、Sibelius をインストールすることはできません。有料となりますが、Mac OS X をアップグレードする必要があります。詳しくは、www.apple.com/jp を参照してください。

Sibelius を使用する際は、Mac OS X の最新バージョンを実行することをおすすめします。[システム環境設定] の [ソフトウェアアップデート] パネルで最新バージョンを使用中であることを確認してください。

Mac OS X 10.4 Tiger 以降を実行しているかどうかを調べる方法

Apple メニューから [この Mac について] を選択します。次のようなウィンドウが表示されます。



「Mac OS X」の大きなテキストの下に、「バージョン 10.4.10」のようなテキストが表示されます。この数字が「10.4」以上で始まっている場合は、Mac OS X 10.4 Tiger 以降の Mac OS X が実行されており、Sibelius 5 をインストールして起動できます。

MIDI デバイスの接続

Sibelius をインストールする前に、Sibelius で使用する MIDI デバイスをセットアップしたい場合は、「Mac での MIDI セットアップ (30 ページ)」を参照してください。

ただし、MIDI デバイスのセットアップは後からでもできますので、先に Sibelius をインストールしてもかまいません。

管理者権限

Sibelius を正しくインストールし登録するには、管理者パスワードの入力が必要となります。

ソフトウェアの登録後、他のアプリケーションと同様に一般ユーザーとして Sibelius を起動し、システムのセキュリティを確保します。

自分がコンピュータを使用する唯一のユーザーであるか、コンピュータのユーザーアカウントや管理者権限について何も知らない場合は、上記の内容を無視し、通常どおりにソフトウェアをインストールしてかまいません。

Sibelius のインストール

- Sibelius DVD-ROM をケースから取り出し、コンピュータの DVD-ROM ドライブに（ラベルが印刷された側を上にして）挿入し、ドライブスロットを閉じます。
- 数秒後、**[Sibelius 6]** のラベルの DVD アイコンがデスクトップに表示されたら、ウィンドウが自動的に開きます。開かない場合は **[Sibelius 6]** アイコンをダブルクリックします。
- アップグレードをインストールするには、**[Sibelius 6 をインストール]** アイコンをダブルクリックしてインストールを開始します。
- **[ようこそ Sibelius 6 インストーラへ]** ウィンドウが開きます。**[続ける]** をクリックします。
- Sibelius 使用許諾契約が表示されます（リファレンスの最後にも記載されています）。目を通し、**[続ける]** をクリックしてから **[同意する]** をクリックします。
- Sibelius 6 のインストールにより使用されるコンピュータ容量が表示されます。（Sibelius 6 を再インストールする場合、インストールにより使用されるコンピュータ容量がほとんどゼロと表示されることがあります。）Sibelius はご使用の Mac の起動ディスクにインストールする必要がありますので、**[インストール先を変更]** をクリックしないでください。**[インストール]** をクリックします。
- 管理者パスワードを入力するメッセージが表示されます。入力し、**[OK]** をクリックします。
- ソフトウェアのインストール中、進行状況を示すバーが表示されます。これには数分かかることがあります。
- しばらくすると、インストール完了のメッセージが表示されます。**[閉じる]** をクリックします。

Sibelius 6 を起動する前に、Sibelius 6 DVD-ROM から他のアプリケーションをインストールするかどうか決めてください。

Sibelius Sounds Essentials のインストール

Sibelius Sounds Essentials は、Sibelius で使用する高音質のサウンドライブラリーです。インストールは次のように行います。

- **[Install Sibelius Sounds Essentials]** をダブルクリックして、インストールを開始します。
- **[ようこそ Sibelius Sounds Essentials for Sibelius 6 インストーラへ]** ウィンドウが表示されます。**[続ける]** をクリックします。
- 使用許諾契約の画面が表示されます。目を通し、**[続ける]** をクリックしてから **[同意する]** をクリックします。
- Sibelius Sounds Essentials はご使用の Mac の起動ディスクにインストールする必要があります（必要に応じて後で移動することができます。下記の「Sibelius Sounds Essentials を移動する」参照）ので、**[インストール先の変更]** をクリックしないでください。**[インストール]** をクリックします。
- 管理者パスワードを入力するメッセージが表示されます。入力し、**[OK]** をクリックします。

Mac でのインストール

- ソフトウェアのインストール中、進行状況を示すバーが表示されます。これには数分かかることがあります。
- 数分後、インストール完了のメッセージが表示されたら、**【閉じる】**をクリックします。

Scorch のインストール

Sibelius Scorch をインストールする必要があります。Scorch を使うと、Sibelius のスコアをインターネット上で閲覧、再生、印刷することができます。

- まず、動作中のウェブブラウザをすべて終了します。
- **【Install Sibelius Scorch】** をダブルクリックして、インストールを開始します。
- **【Welcome to Sibelius Scorch Installer】** ウィンドウが表示されます。**【Continue】** をクリックします。
- 使用許諾契約の画面が表示されます。目を通し、**【Continue】** をクリックしてから **【Agree】** をクリックします。
- Scorch はご使用の Mac の起動ディスクにインストールする必要がありますので、**【Change Install Location:】** をクリックしないでください。**【Install】** をクリックします。
- コンピュータの管理者のパスワードを入力するよう求められます。入力し、**【OK】** をクリックします。
- 表示された Scorch の使用許諾契約に目を通し、**【Accept】** をクリックします。
- 次の画面で、**【Install】** をクリックします。
- 進行状況を示すバーが画面に表示され、インストールの完了を示すメッセージが表示されます。**【Close】** をクリックします。

PhotoScore Lite のインストール

PhotoScore Lite は、Neuratron によるアプリケーションで、印刷済み楽譜やインターネットからダウンロードした PDF ファイルをスキャンし、独自に入力した楽譜のように Sibelius 上で編集、移調、印刷を行うことができます。

PhotoScore Ultimate を購入したのでない場合、PhotoScore Lite を Sibelius 6 DVD-ROM からインストールする必要があります。

- **【PhotoScore Lite をインストール】** をダブルクリックして、インストールを開始します。
- **【ようこそ PhotoScore Lite インストーラへ】** ウィンドウが表示されます。**【続ける】** をクリックします。
- PhotoScore Lite の使用許諾が表示されます。目を通し、**【続ける】** をクリックしてから **【同意する】** をクリックします。
- 次の画面で、**【インストール】** をクリックします。
- コンピュータの管理者のパスワードを入力するよう求められます。入力し、**【OK】** をクリックします。
- 進行状況を示すバーが画面に表示され、インストールの完了を示すメッセージが表示されます。**【閉じる】** をクリックします。

AudioScore Lite のインストール

AudioScore Lite は、マイクに向かってアコースティック楽器を演奏すると、その音楽を楽譜へと自動的に書き換えてくれるアプリケーションです。入力された楽譜を Sibelius へと送信し、さらに編集することができます。

AudioScore Ultimate を購入したのでない場合、AudioScore Lite を Sibelius 6 DVD-ROM からインストールする必要があります。

- **[Install AudioScore Lite]** をダブルクリックして、インストールを開始します。
- **[Welcome to AudioScore Lite Installer]** ウィンドウが表示されます。**[Continue]** をクリックします。
- AudioScore Lite の使用許諾が表示されます。目を通し、**[Continue]** をクリックしてから **[Agree]** をクリックします。
- 次の画面で、ご使用の Mac の起動ディスクを選択してから **[Continue]** をクリックします。
- インストールで使用するディスク容量が表示されます。**[Install]** をクリックします。
- コンピュータの管理者のパスワードを入力するよう求められます。入力し、**[OK]** をクリックします。
- 進行状況を示すバーが画面に表示され、インストールの完了を示すメッセージが表示されます。**[Close]** をクリックします。

Sibelius の再インストール

Sibelius を再インストールする必要がある場合、次のように行います。

- まず、既存の **Sibelius 6** アプリケーションを **[アプリケーション]** フォルダからゴミ箱へドラッグします。
- また、必要に応じて Sibelius 6 環境設定ファイル (**com.sibelius.Sibelius6.plist**) も削除します。このファイルは、**ユーザ / ユーザ名 / ライブラリ / Preferences**、および、**/ ライブラリ / Preferences** の両方にあります。
- Sibelius 6 DVD-ROM をドライブに挿入し、前述「Sibelius のインストール」の説明に従ってインストールし直します。

Sibelius のアンインストール

アンインストールとは、Sibelius プログラムのコピーをコンピュータから削除することです。何らかの原因で Sibelius が正常に作動しなくなった場合、まずは、アンインストールせず同じ場所に再インストールしてみましょう（上記の「Sibelius の再インストール」を参照）。

Sibelius を Mac からアンインストールするには、**[アプリケーション]** フォルダから **[Sibelius 6]** アイコンをゴミ箱にドラッグして削除します。同じように、PhotoScore Lite または AudioScore Lite をアンインストールするには、**[PhotoScore Lite]** または **[AudioScore Lite]** アイコンをゴミ箱にドラッグして削除します。

次のステップ

このあとは、「ユーザー登録 (22 ページ)」にお進みください。

Sibelius Sounds Essentials を移動する

インストールの後で、Sibelius Sounds Essentials を別のボリューム（外付けハードディスクなど）へ移動するには：

- 実行している場合は Sibelius を終了します。
- Finder で、**/ライブラリ /Application Support/Sibelius Software/Sibelius Sounds** へ移動します。
- 少なくとも以下の 2 つのフォルダが表示されます。**Essentials for Sibelius 6** と **Libraries** です。
- **Essentials for Sibelius 6** フォルダを任意の場所へドラッグします。**Libraries** フォルダは移動しないでください。
- Sibelius を再び起動します。Essentials サウンドライブラリが見つからないというメッセージが表示されます。**[はい]** をクリックし、新しい場所を選択して **[選択]** をクリックします。管理者のパスワードが求められますので、**[OK]** をクリックします。

ユーザー登録

Sibelius のインストール後、15 日以内にユーザー登録を行ってください。ユーザー登録は簡単です。ユーザー登録を行うと、テクニカルサポート、アップグレード情報、Sibelius ウェブサイト (www.sibelius.com) のオンラインサポートを利用することができます。

著作権侵害や盗用を防止するため、ユーザー登録がされていない Sibelius プログラムコピーでは、保存機能を使用することはできません。ただし、Sibelius をインストールしてから 15 日間は、ユーザー登録までの猶予期間として、保存機能も含めてご使用いただけます。

使用開始後 15 日たっても登録されない場合は、一時的に保存機能が無効になります。登録すると機能が再び有効になります。(この 15 日間を延長するためにコンピュータの日付を変えたり、Sibelius をインストールし直したりなどはしないでください。このような作業は効力がなく、その時点で保存機能が無効になり、ユーザー登録するまで使用できなくなります)。

複数のコンピュータでの Sibelius の使用について

Sibelius のシングルコピーをご使用の場合に限り、ご自身の個人専用として、2 台のコンピュータに Sibelius をインストールし、ユーザー登録することができます。2 台ともご自身でご使用いただくことが条件となり、2 台のコンピュータを同時に使用することはできません。2 台目のコンピュータの Sibelius を登録する場合は、下の 1.1 インターネットでの登録の指示に従ってください。

2 台にインストールした後、さらに新しいコンピュータに Sibelius をインストールする必要が出てきた場合は、同時に 2 つ以上の Sibelius コピーを使用しない限り、すでにインストールしているどちらかのコンピュータの Sibelius 登録情報を新しいコンピュータに移動することができます。移動方法については、下の 1.1 Sibelius の別コンピュータへの移動を参照してください。

5 ライセンスパックとサイトライセンスの登録

教育用 5 ライセンスパックとサイトライセンスの場合も、上記と同じ方法で登録できます。下の 1.1 インターネットでの登録を参照してください。詳細項目は、最初のコピー登録時にご記入いただくだけで済みます (ただし、複数のインストール DVD-ROM とシリアル番号がある場合は除きます)。

ネットワークライセンスの登録

Sibelius のネットワークコピーをインターネットで登録することはできません。電話、ファックス、E メール のいずれかで登録する必要があります。詳しくは、別冊の「Sibelius 6 ライセンスサーバーユーザーガイド」を参照してください。

インターネットでの登録

Sibelius を起動するたび、登録を促すメッセージが表示されます。デスクトップ (Windows) または [アプリケーション] フォルダ (Mac) の [Sibelius 6] アイコンをダブルクリックし、Sibelius 6 を起動します。その後、次のように行います。

- Sibelius 6 を初めて起動する際、管理者アカウントを使用する必要があることを示すメッセージが表示されます。[OK] をクリックします。
 - Windows Vista では、画面が暗くなることがあり、それから [ユーザーアカウント制御] ウィンドウが表示されます。[続ける] をクリックして進むか、管理者パスワードを入力するメッセージが表示された場合は入力します。
 - Windows XP では、管理者パスワードを入力するメッセージが表示されることがあり、その場合は入力します。

ユーザー登録

- Mac では、管理者パスワードを入力するメッセージが表示されます。入力し、**[OK]** をクリックします。
 - Sibelius シリアル番号を入力します。シリアル番号は、Sibelius の CD ケースに印字されており、**S** から始まります。入力したら、**[OK]** をクリックします。
 - 次に、Sibelius を登録するメッセージが表示されます。 Sibelius がインストールされているコンピュータのインターネット接続を使用する（最も簡単で手軽な方法です）か、別のコンピュータのインターネット接続を使用する（下の 1.1 別のコンピュータのインターネット接続を使った登録を参照）ことができます。
 - **[このコンピュータのインターネット接続を使用]** ラジオボタンを選択し、**[次へ]** をクリックします。
 - コンピュータがインターネットに接続されていない場合、接続画面が表示されます。**[接続]** をクリックしてください。
 - ファイアウォールを使用している場合は、Sibelius がインターネットにアクセスできるように設定してください。さもないと登録はできません。ファイアウォールのほとんどは、プログラムが初めてインターネットにアクセスしようとするときに警告を発します。具体的な警告表示内容は、使用するファイアウォールにより異なります。警告が表示されたら、Sibelius のインターネットへのアクセスを許可するよう選択します。
 - 接続が確立されると、Sibelius は、Sibelius プログラムコピーのユーザー登録履歴（たとえば、今ユーザー登録しようとしている Sibelius プログラムコピーが、複数プログラムライセンスのうちの 1 つなのか、あるいは個人使用のための 2 つめのコピーなのか、インストール済みのコンピュータへの再インストールなのか、といったこと）をチェックします。**[はい]** をクリックして進みます。
 - 名前や連絡先などを記入する画面が表示されます。 Sibelius は、この情報に基づきテクニカルサポートやアップグレードの情報などを提供します。Sibelius は、個人情報の保護に万全を期しています（下の 1.1 プライバシーに関する方針を参照）。
 - Sibelius を個人で所有している場合、ご自宅の住所を記入し、**[会社名]** の欄は空のままにしておいてください。Sibelius を各種学校、大学、教会、企業、その他の機関で所有している場合、**[会社名]** 欄にその住所を記入してください。その他の必須欄もすべて記入したら、**[次へ]** をクリックします。
 - 次に、興味のある音楽に関することや、Sibelius をお知りになった経緯などをご記入いただく画面に移ります。**[音楽活動]** のリストから選択する際は、指導者、あるいは学校、各種学校、大学などの組織である場合は**[教師]** の選択肢の 1 つを選択してください。学生である場合は**[生徒]** の選択肢の 1 つを選択してください。
 - また、コンピュータ環境についての基本情報を記入し、Sibelius に送信するオプションも表示されます。ご記入いただいた基本情報は、テクニカルサポートをご利用いただく際、より迅速で的確なサポートの提供に活用させていただきます。基本情報の入力には必須ではありませんが、ご記入いただけますと、お問い合わせの際、回答までの時間をいくらも短縮できます。
- 記入が完了したら、**[完了]** をクリックします。
- 北/中央/南米でご購入いただいた教育用パッケージ版を登録する場合、ご登録資格の確認画面が表示される場合があります。資格要件については、以下の 1.1 アカデミック版（北 / 中央 / 南米）を参照してください。
 - **[完了]** をクリックします。Sibelius のユーザー登録完了のメッセージが表示されます。

別のコンピュータのインターネット接続を使った登録

Sibelius がインストールされているコンピュータにインターネット接続がない場合、**[ヘルプ] ▶ [Sibelius の登録]** を選択し、**[別のコンピュータのインターネット接続を使用]** ラジオボタンを選択して **[次へ]** をクリックします。

はじめに

Sibelius のウェブサイトを開くと、登録情報を入力するよう促すメッセージが表示されます。最後に登録番号が表示されます。この登録番号を **【Sibelius の登録】** ダイアログに入力し、登録を完了させます。

インターネット接続がない場合、電話を使って登録することができます。

電話による登録

できる限りインターネットによるユーザー登録をおすすめします。しかし、電話による登録も可能です。

- **【ヘルプ】** ▶ **【Sibelius の登録】** を選択します。
- **【別のコンピュータのインターネット接続を使用】** を選択し、**【次へ】** をクリックします。
- 下の番号に電話します。電話中、コンピュータ画面が確認できるようにしておきます。
- 電話で提供される登録番号 (**R** から始まる番号) を画面のボックスに入力します。登録番号を入力し、**【完了】** をクリックすると、プログラムの登録は完了です (引き続き保存できます)。

登録後、コンピュータ番号や登録番号を控えておく必要はありません。

北 / 中央 / 南米にてご購入いただきました場合：

月曜から金曜、午前 7 時から午後 4 時 30 分 (太平洋標準時、祝祭日を除く) フリーダイヤル：**1-888-280-9995** (アメリカ合衆国内。国外からは 1-650-731-6106)。アカデミックコピーの資格要件については、次を参照してください。

オーストラリアにてご購入いただきました場合：

登録または再登録：**1300 652 172**、月曜から金曜 (祝祭日を除く)、午前 9 時から午後 5 時。

イギリスおよびその他の国にてご購入いただきました場合：

登録または再登録 (カスタマーサービス)：**020 7561 7995** (+44 20 7561 7995)、月曜から金曜 (祝祭日を除く)、午前 10 時から午後 6 時。

日本でご購入いただきました場合：

登録または再登録：03-3505-7907、月曜から金曜 (祝祭日を除く)、午前 10 時から午後 5 時。

アカデミック版（北 / 中央 / 南米）

北 / 中央 / 南米でご購入いただきましたアカデミック版は、次の資格要件を満たす場合にのみご使用いただけます。Sibelius をユーザー登録する際、資格要件の確認画面が表示されます。必要に応じて、証明書類をご提出いただく場合もあります。

資格要件は、北 / 中央 / 南米に居住していること、さらに、次のいずれかに該当することです。

- 現在、正式な認可を受けた非営利の教育機関の指導者または正規の学生であること
- 正式な認可を受けた非営利の教育機関が、スタッフまたは学生用に Sibelius をインストールする場合
- 現在、教会またはその他の宗教機関の正式な音楽統括責任者であること
- 個人の音楽指導者の方で、現在、MTNA、MENC、または MTNA/MENC 提携機関の会員であること

以上の資格要件を満たしていない方は、アカデミック版をご使用いただくことはできません。ご購入後に資格要件を満たしていないことが判明した場合、ご購入から 14 日以内に、ご購入いただきました販売店までご返品いただき、返金を受けてください。その場合、通常版の Sibelius をお求めいただくことができます。また、北 / 中央 / 南米以外にお住まいの場合、その国のアカデミック版をお求めいただける場合もあります。

Sibelius の再インストールと再登録

何らかの原因で Sibelius を再インストールする必要性が生じ、ユーザー登録されていない状態になった場合、以前 Sibelius がインストールされていたものと同じコンピュータに再インストールするのであれば、インターネットで自動的に再登録できます。

最初にユーザー登録をしたときと同じように、[ヘルプ] ▶ [Sibelius の登録] ダイアログで再登録してください。以前登録されたことのあるコピーであることが判別されます。

Sibelius のシングルコピーをお持ちで、別のコンピュータに再インストールする場合は、2 回目のインストールと見なされます（上記の 1.1 複数のコンピュータでの Sibelius の使用についてを参照）。

Sibelius の別コンピュータへの移動

ユーザー登録済みの Sibelius を別コンピュータに移したい場合は、移動元のコンピュータと移動先のコンピュータが共にインターネットに接続できる状態であれば、[ヘルプ] ▶ [Sibelius の登録を解除] を使用できます。

このオプションを選択すると、Sibelius サーバーにその情報が送信され、そのコンピュータのユーザー登録が解除され、保存機能が使用できなくなります。その後、移動先のコンピュータに Sibelius をインストールし、同じ要領で、[ヘルプ] ▶ [Sibelius の登録] を使用してインターネットで登録します。

この方法では、Sibelius の登録を解除したいコンピュータと新たに登録したいコンピュータの両方がインターネットに接続可能であることが必要です。どちらかあるいは両方ともインターネットに接続できない場合は、テクニカルヘルプまでご連絡ください。

ユーザー登録上のトラブルについて

ユーザー登録の際にトラブルが発生した場合は、テクニカルヘルプまでご連絡ください（別紙『最新情報とテクニカルヘルプ』シートを参照）。

はじめに

プライバシーに関する方針

Sibelius は、ユーザーの皆様の個人情報の保護に万全を期しており、Data Protection Act（データ保護法）を遵守いたしております。

Sibelius を登録またはアップグレードすることにより、利用者は弊社のプライバシーに関する方針に同意します。方針の完全な内容については、www.sibelius.com/privacy をご覧いただくか、弊社までお問い合わせください。以下はその要約です。

Sibelius は、ユーザー登録時などにユーザーからご提供いただいた個人情報を、ユーザーの情報確認または Sibelius からの情報（テクニカルサポートやアップグレード、特別販売、他の製品などに関する情報）送付のために使用することがあります。Sibelius は、ユーザーの個人情報を、ユーザーの許可を得ずに、以下に特定する者を除く第三者に開示することはありません。特定する者とは、Sibelius グループ会社、各国における Sibelius 販売代理店、Sibelius が提供する他の製品（PhotoScore など）の製造会社です。これらから、Sibelius に代わって、テクニカルサポートやアップグレード、各種情報をご提供させていただく場合があります。

弊社からの E メールによる情報の受け取りを希望しない場合は、www.sibelius.com にあるリンクを使用して、Eメールのメーリングリスト登録を解除してください。Eメールや郵送で Sibelius のアップグレードを含む情報を受け取りたくない場合、または上記の関連会社による個人情報を共有を希望しない場合は、弊社までご連絡ください。

違法コピーについて

Sibelius を正規にご購入いただき、まことにありがとうございました。弊社の Sibelius プログラムの開発努力を尊重し、違法コピーを作成しないようお願いいたします。

違法コピーは、ソフトウェア会社の製品開発や品質向上を阻害し、皆様への製品提供を困難なものにします。違法コピーの摘発に皆様のご協力をお願いいたします。

Sibelius の違法コピーを発見した場合は、詳しい情報を添えて piracy@sibelius.com まで Eメール（英語）にてご連絡ください。

Windows での MIDI セットアップ

再生に Sibelius Sounds Essentials を使用している場合、その設定方法については『リファレンス』の  **4.4 Sibelius Sounds Essentials** を参照してください。

MIDI デバイスの設定は、3 つの手順で行います。ハードウェアの接続、必要なソフトウェアのインストール、Sibelius での MIDI 設定です。ここでは、最初の 2 つの手順について説明します。詳しくは、『リファレンス』の  **1.10 Input Devices** を参照してください。

MIDI デバイスのコンピュータへの接続

MIDI とは、「Musical Instrument Digital Interface」の略です。これは、電子楽器同士を接続して使用するための世界共通の規格です。MIDI キーボードやシンセサイザー、音源モジュール、サンプラー、またその他の MIDI デバイスを、互いに MIDI ケーブルで接続したり、コンピュータに接続したりすることができます。サウンドカードとソフトウェアシンセサイザーも MIDI に互換しています。これらはコンピュータ内部に格納されているため、楽譜を再生するためにケーブルを接続する必要はありません。

MIDI デバイスのコンピュータへの接続方法は、コンピュータの機種、MIDI デバイスの機種、すでに接続している他のハードウェアの種類などのさまざまな要素によって異なりますが、一般的に、次の 3 種類の接続があります。

- キーボードなどの MIDI デバイスの多くは USB で接続します。1 本の USB ケーブルで、MIDI キーボードを直接コンピュータに接続できます。
- 別個の MIDI インターフェースをコンピュータの別の USB ポートに接続し、MIDI ケーブルを使用して MIDI コントローラーを MIDI インターフェースに接続できます。
- 専用のケーブルを使って、外部 MIDI デバイスをコンピュータのサウンドカードにあるゲームポート（ジョイスティックポート）に直接接続できます。

ほとんどの Windows コンピュータにはサウンドカードが付属しています。このカードにより、General MIDI の再生と、ゲームポート経由による外部 MIDI デバイスの接続が可能になります。多くのコンピュータには、ゲームポートと USB ポートの両方が装備されています。どちらのポートを使用しても違いはありませんが、今後、ご使用のシステムをアップグレードする場合、USB 接続対応の MIDI デバイスを選択する方がよいでしょう。

USB を使用した MIDI デバイスの直接接続

近年、MIDI キーボードやデバイスは、USB を経由して直接コンピュータと接続できるようになり、外付けの MIDI インターフェースを必要としなくなってきました。このようなデバイスをインストールする場合、USB ケーブルでデバイスとコンピュータを接続してから、画面の指示に従って必要なドライバソフトをインストールします。

ドライバのインストールが完了したら、Sibelius で入力や再生を設定できます。『リファレンス』の  **1.10 入力デバイスを参照してください。**

Sibelius が起動時に MIDI デバイスを認識できるよう、あらかじめデバイスの電源を入れておく必要があります。さもないと、Sibelius が MIDI デバイスを検出できないことがあります。

MIDI インターフェースを使用した MIDI デバイスの接続

MIDI インターフェースは、コンピュータと外部 MIDI デバイスの間に設置する小さな箱で、MIDI データを送受信する装置です。通常、MIDI インターフェースはコンピュータの USB ポートに接続されます。次の状況では、MIDI インターフェースが必要になる場合があります。

- 外部 MIDI デバイスが USB に対応していない。
- ご使用のサウンドカードが「フルデュプレックス（全二重）」動作に対応していない（Sibelius が外部 MIDI デバイスへ再生できても、外部デバイスから Sibelius へ再生できない場合）。
- ご使用のコンピュータがノートブック型（ラップトップ）のためゲームポートがない。

通常、MIDI インターフェースを使用するには、製造元が供給するドライバソフトウェアをインストールする必要があります。

ここでは、MIDI インターフェースが USB 経由で接続されていることを前提に、一般的な MIDI のセットアップについて説明します。MIDI デバイス間の接続はすべて、標準 MIDI ケーブル（右図）を使って行います。

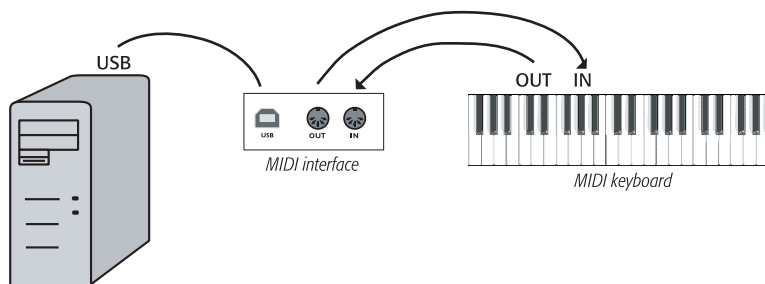


MIDI キーボードを接続するには、キーボードの「Out」端子を MIDI インターフェースの「In」端子に接続します。つまり、キーボードで演奏される音楽（演奏データ）はキーボードから出て、ケーブルを伝わってコンピュータへ入ります。

コンピュータからキーボード（内蔵音源がある場合）に楽譜を再生させるには、MIDI インターフェースの「Out（アウト）」もキーボードの「In（イン）」に接続します。

キーボードに 2 組の「In（イン）」と「Out（アウト）」の端子がある場合は、通常どちらを使用してもかまいません。

キーボードだけを接続する場合は、次の図のようになります。



たとえば、キーボードの代わりにサウンドモジュールだけを接続する場合は、MIDI インターフェースの「Out（アウト）」をサウンドモジュールの「In（イン）」に接続します。

MIDI デバイスのコンピュータへの接続が完了したら、Sibelius で入力を設定できます。『リファレンス』の 1.7 入力デバイスを参照してください。

ゲームポートを使用した MIDI デバイスの接続

一般的に、サウンドカードが「フルデュプレックス（全二重）」動作に対応している場合（製造元にご確認ください）、または直接 USB 接続を使用できる場合は、別途に MIDI インターフェースを用意する必要はありません。

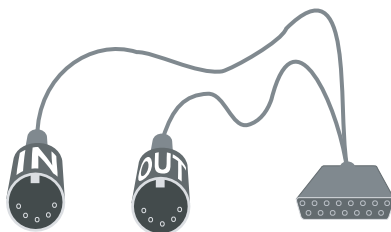
Windows での MIDI セットアップ

サウンドカードのゲームポートを使用する場合は、追加のドライバソフトウェアは必要ありません。MIDI デバイスを接続するだけで準備が完了します。

通常、ゲームポートは、コンピュータのスピーカーとマイクの端子の隣にあります。一般的に、サウンドカードのゲームポートは次の図のような形をしています。



長方形の端子（左端）がゲームポートです。ここに外部 MIDI デバイスを接続するには、次図のような Y 形の MIDI- ゲームポート接続ケーブルが必要です。



MIDI の 2 つのプラグには、「In (イン)」と「Out (アウト)」と書かれています。このケーブルを MIDI キーボードに接続するには、「In (イン)」のプラグをキーボードの背面の「Out (アウト)」端子に接続し、「Out (アウト)」のプラグをキーボードの「In (イン)」端子に接続します。

これで準備完了です。「In (イン)」と「Out (アウト)」のプラグを MIDI キーボード（またはサウンドモジュール）の正しい端子に差し込めば、設定が完了します。『リファレンス』の 1.10 入力デバイスを参照してください。

Mac での MIDI セットアップ

再生に Sibelius Sounds Essentials を使用している場合、『リファレンス』の  4.4 Sibelius Sounds Essentials を参照してください。

Mac で MIDI を設定するには、以下の説明に従って MIDI デバイスを接続し、Mac OS X の Audio MIDI 設定ユーティリティを使用します。Sibelius の MIDI 入力のセットアップ方法については、『リファレンス』の  1.10 入力デバイスを参照してください。

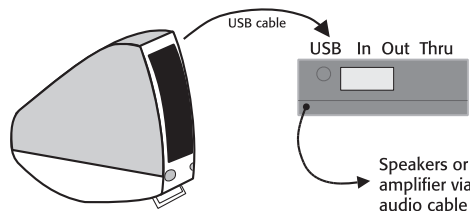
MIDI デバイスの接続

MIDI とは、「Musical Instrument Digital Interface」の略です。これは、電子楽器同士を接続して使用するための世界共通の規格です。MIDI キーボードやシンセサイザー、音源モジュール、サンプラー、またその他の MIDI デバイスを、互いに MIDI ケーブルで接続したり、コンピュータに接続したりすることができます。サウンドカードとソフトウェアシンセサイザーも MIDI に互換しています。これらはコンピュータ内部に格納されているため、楽譜を再生するためにケーブルを接続する必要はありません。

Mac では、MIDI デバイスは USB か Firewire ポートに接続します。いずれの場合も、サウンドモジュールのような MIDI デバイスを直接（USB かシリアルポートに）接続するか、MIDI インターフェース経由で接続します。

たとえば、Roland SC-88 Pro サウンドモジュールを USB ポートのある iMac や G4 に接続する場合、このモジュールはかなり旧式であるため、外部 MIDI インターフェースを使用する必要があります。しかし、より新型の Roland SC-8820 は直接 USB で接続できるため、MIDI インターフェースは必要ありません。

MIDI デバイスの直接接続



この図は、サウンドモジュールまたは MIDI キーボードを直接接続する方法を説明しています。

通常キーボードやサウンドモジュールの背面にスイッチがあり、どの接続方法でデータを送受信するかを決定します。このスイッチが正しく設定されているかを確認します（この例では、USB に設定する必要があります）。設定の変更を認識させるため、サ

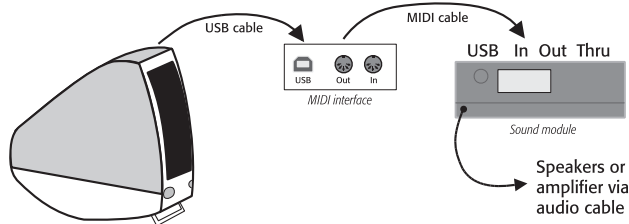
ウンドモジュールやキーボードをオフにしてから再びオンしなければならない場合があります。

接続方法の詳細については、モジュールやキーボードに付属のマニュアルを参照してください。直接接続の場合は、デバイスに付属のドライバソフトウェアをインストールしなければならない場合があります。

MIDI インターフェースを使用した MIDI デバイスの接続

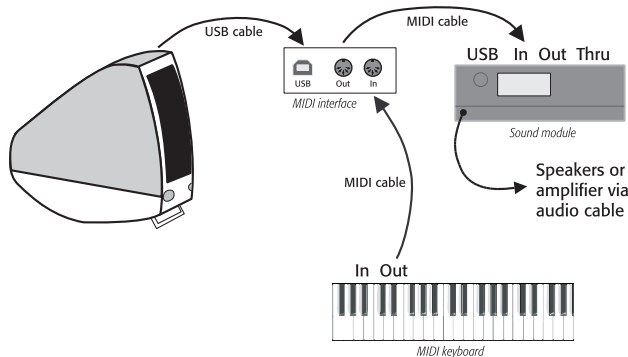
MIDI インターフェースは、MIDI デバイスを USB ポート経由で Mac に接続する小さな箱です。

次の図のように、MIDI インターフェースを使用してサウンドモジュールを接続します。



MIDI ケーブルは、MIDI インターフェースの「Out (アウト)」端子からサウンドモジュールの「In (イン)」端子へ接続します。

MIDI キーボードや他の入力デバイスを追加するには、デバイスを次図のように接続します。



2 番目の MIDI ケーブルは、キーボードの「Out (アウト)」端子から MIDI インターフェースの「In (イン)」端子へ接続します。

MIDI インターフェースを使用する際、製造元が供給するドライバソフトウェアをインストールしなければならない場合があります。

Audio MIDI 設定

外部 MIDI 装置を接続した場合は、それぞれのデバイスの詳細をオペレーティングシステムに認識させるために、Mac OS X ユーティリティの [Audio MIDI 設定] で設定する必要があります。

- [アプリケーション] フォルダにある [ユーティリティ] フォルダの [Audio MIDI 設定] アイコンをダブルクリックして起動します。
- [MIDI 装置] タブをクリックします。
- MIDI デバイスが正しくインストールされていれば、大きな白いウィンドウ内に表示されます。
- MIDI デバイスがサウンドモジュールの場合、その他の設定は必要ありません。[Audio MIDI 設定] を終了し、そのあとの設定については『リファレンス』の [4.11 再生デバイス](#) を参照してください。
- MIDI デバイスが MIDI インターフェースの場合、[装置を追加] ボタンをクリックして新しい外部デバイスを追加します。

はじめに

- **新しい外部装置** アイコンをダブルクリックします。[新しい外部装置のプロパティ] ダイアログで **装置名** を変更 (**Roland JV-1080** など、デバイス名に合わせて変更) してから、**製造元**、**機種** リストから最も適切なものを選択します。(複雑な MIDI セットアップを使用する上級者は、**詳細表示** 内の **プロパティ** ボタンをクリックし、どの MIDI チャンネルでデータを送受信するかなどの追加パラメータをコントロールできます。)
- ご使用の MIDI インターフェースに新しいデバイスが接続されたことを Mac に認識させる必要があります。MIDI デバイスアイコンの矢印をドラッグして、入力と出力を「線」で接続します。
- 完了したら、Audio MIDI 設定ユーティリティを終了します。そのあとの設定については『リファレンス』の  **1.10 入力デバイス** を参照してください。

Audio MIDI 設定ユーティリティの使用方法について、詳しくは次のウェブサイトをご覧ください。

<http://www.sonosphere.com/MusicSoftware/MacOSX/AudioMIDISetup/>

プロジェクトについて

この『ハンドブック』は、5つのプロジェクトから構成されています。最初から最後まで通して取りかかった場合の所要時間は約8時間です。少なくとも、最初の3つのプロジェクトだけでも目を通すことをおすすめします。これらのプロジェクトでは、Sibeliusの基本コンセプトと重要な機能について説明しています。4番目と5番目のプロジェクトでは、特定の機能に焦点を当てて説明しています。時間のあるときに目を通してください。

プロジェクト1 (2時間)

このプロジェクトでは、スコアを開く方法について説明しています。また、ナビゲーターウィンドウとキーボードショートカットおよびマウスショートカットの組み合わせ、選択、コピー & ペーストを使った操作方法についても説明しています。英国のバラード「Scarborough Fair」のアレンジを使って、マウス、コンピュータキーボード、MIDI キーボードで音符を入力または編集する方法、および、歌詞を入力する方法について説明しています。再生方法、テキストと強弱記号をスコアに記入する方法についても説明しています。

プロジェクト2 (2時間)

このプロジェクトでは、PhotoScore Lite を使って4つのパート譜をスキャンし、スキャン内容を新規スコアへとコピー & ペーストして、エルガーの「弦楽四重奏曲ホ短調、作品83」の抜粋を再構築する方法について説明しています。音部記号と調号の変更、連音符などのより高度な音符入力、アーティキュレーション、ライン、タイ、スラー、テキストなどのスコアに記入されるさまざまなオブジェクトについても説明しています。ダイナミックパートについて、Sibelius からのグラフィックのエクスポートについても説明しています。

プロジェクト3 (2時間)

このプロジェクトでは、キーボード、ギター、ドラム用の記譜の基本について説明しています。また、コード記号とリピータ構造（1 番括弧、2 番括弧、D.S. al Coda など）の作成方法についても説明しています。[ミキサー] ウィンドウを使って再生を調整する方法、Sibelius の [アイデア] ウィンドウを使って楽譜の一部分を保存し再利用する方法についても説明しています。

プロジェクト4 (1時間)

このプロジェクトは、Sibelius を使って授業を行ったり、生徒用の教材を作成する場合に特に役立ちます。また、楽譜のレイアウトやフォーマットに関するより高度なテクニックを身につけたい場合にも有益です。このプロジェクトでは、音階のワークシートを作成し、譜表のインデント方法、空の譜表を非表示にする方法、テキストフォントの変更方法などについて説明しています。

プロジェクト5 (1時間)

このプロジェクトでは、[ビデオ] ウィンドウについて説明しています。また、タイムコード、ヒットポイント、楽譜の一部分の長さを調整するプラグインなどを操作して、映像の画に合わせて作曲するテクニックについても説明しています。アニメシリーズ「Mr. ビーン」のビデオを使って、Pinnacle Studio などの動画編集ソフトウェアでサウンドトラックとして使用できるオーディオトラックを Sibelius からエクスポートする方法についても説明しています。

はじめに

プロジェクト 1

1.1 スコアを開く

このプロジェクトの最初のセクションでは、Sibelius でスコアを開き操作する方法について説明します。また、これ以降のセクションで作成するアレンジのコピーを印刷する方法についても説明します。

ファイルを開く

Sibelius には、プログラムのさまざまな機能を示すサンプルスコアが多数含まれています。これらのサンプルスコアのオリジナルファイルは、Sibelius のインストール DVD-ROM にも収録されていますので、自由に変更してかまいません。それでは、スコアをひとつ開いてみましょう。

【クイックスタート】ダイアログの【最近使ったファイルを開く】を選択し、ドロップダウンリストで【プロジェクト 1】が選択されていることを確認してから【OK】をクリックします。



または、従来の方法でファイルを開きます。ツールバーボタン（左図）をクリックするか、【ファイル】▶【開く】（ショートカットは **Ctrl+O** または **⌘O**）を選択します。【開く】ダイアログが表示されます。

Windows の場合、【スコア】というフォルダが表示されます。このフォルダ内に【サンプルスコア】へのショートカットが含まれています。Mac の場合、【Sibelius サンプルスコア】というエイリアスが表示されます。これをダブルクリックして【プロジェクトファイル】フォルダへ進み、【プロジェクト 1】というスコアを選択してから【開く】をクリックします。これは、「スカボロー・フェア (Scarborough Fair)」という伝統的バラッドのアレンジです。

また、Sibelius が起動していない状態でも、パソコン内にあるスコアファイルを直接ダブルクリックしてファイルを開くことができます（その場合、Sibelius が自動的に起動します）。Sibelius のスコアファイルのアイコンは、右図のように表示されます。



【Scarborough Fair】スコアを開くと、楽譜が表示され、次のような画面が表示されます。

スコア内の移動

スコア内を移動する方法にはいくつかありますが、最も簡単な方法は、マウスを使って画面上の用紙をドラッグすることです。用紙の空の部分をクリックしてドラッグします。その際、左下隅にある灰色の四角形内の表示も同時に移動します。この四角形は「ナビゲーター」と呼ばれ、複数のページが縮小されて表示されます。ナビゲーター内の白いボックスの部分には、現在画面に表示されているスコア部分が表示されます。

[ナビゲーター] ウィンドウが表示されていない場合、[ウィンドウ] ▶ [ナビゲーター] (ショートカットは **Ctrl+Alt+N** または **⌘+N**) を選択してオンにします (下のツールウィンドウの表示と非表示を参照)。

ナビゲーターをクリックすると、クリックした部分にスコア表示が移動します。

または、ナビゲーターの白いボックスをドラッグすると、ウィンドウに表示されるスコアがスムーズに移動します。この動作は、まるでビデオカメラを使ってスコアを写しているような感覚を与えます。

数ページにわたる長いスコアの場合、ナビゲーターの白いボックスをナビゲーターの左方向や右方向にドラッグすると、スコア表示が左方向や右方向に移動していきます。速くドラッグすればスコアも速く移動します。こうして、ページを順に移動することができます。

ナビゲーターを使ってスコア内を移動すると、青色いデスクの上に各スコアのページが横並びに置かれているのがわかります。長いスコアでは、ページはスコアを広げた見開きの形になっているので、ページがどこで切り替わるかが分かります。スコアのページのレイアウトを変更し、縦方向または横方向に、および、単一ページまたは見開きに表示させることができます (『リファレンス』の  5.23 表示メニューを参照)。

白いボックスは、ナビゲーターの上端または下端、あるいは、最初のページの左端または最後のページの右端を越えてドラッグすることはできません。しかし、用紙の端をクリックして、画面端を超えてスコアをドラッグすることができます。この操作を行った場合は、ナビゲーターをクリックして、スコアをもう一度表示します。

画面のスコアの動きが遅いときには、フルスコアとパート譜の紙質や模様を無地に変えてみてください。Sibelius の画面表示を変更する際のヒントについては、『リファレンス』の  5.6 表示設定を参照してください。

ホイールボタン付のマウスをお持ちの場合、ホイールを使ってスコアをスクロールすることもできます。

- ホイールを上下にスクロールすると、ページを上下に移動できます。一度に画面全体を左右へ移動するには、**Alt** または **⌘** キーを押しながら操作します。
- **Shift** キーを押しながらマウスのホイールを上へ動かすとページが左に、下に動かすと右に移動します。また、一度に画面全体を左右へ移動するには **Alt** または **⌘** を同時に押しながら左右へ動かします。
- 画面を拡大 / 縮小するには、**Ctrl** または **⌘** キーを押しながらホイールを操作します。下のズームを参照してください。

キーボードショートカットを使用してスコア内を移動することもできます。Sibelius にはたくさんのキーボードショートカットが用意されていますので、マウスを使用するよりもキーを押す方が便利です。最も一般的な操作に使用されるショートカットだけでも覚えておくとよいでしょう。これらのショートカットはこの『ハンドブック』の裏表紙にも記載されています。詳しくは、『リファレンス』の  5.12 メニューとショートカットを参照してください。

1.1 スコアを開く

スコア内の移動に使用する次のショートカットを試してみましょう。

- **Page Up** (Mac では **⇧**) と **Page Down** (Mac では **⇩**) は、画面全体を上または下に移動します。
- **Home** (Mac では **⌘**) と **End** (Mac では **⇧+⌘**) は、画面全体（ページ幅全体が表示されている場合はページ全体）を左または右に移動します。
- **Ctrl+Home** で最初のページに、**Ctrl+End** で最後のページに移動します。

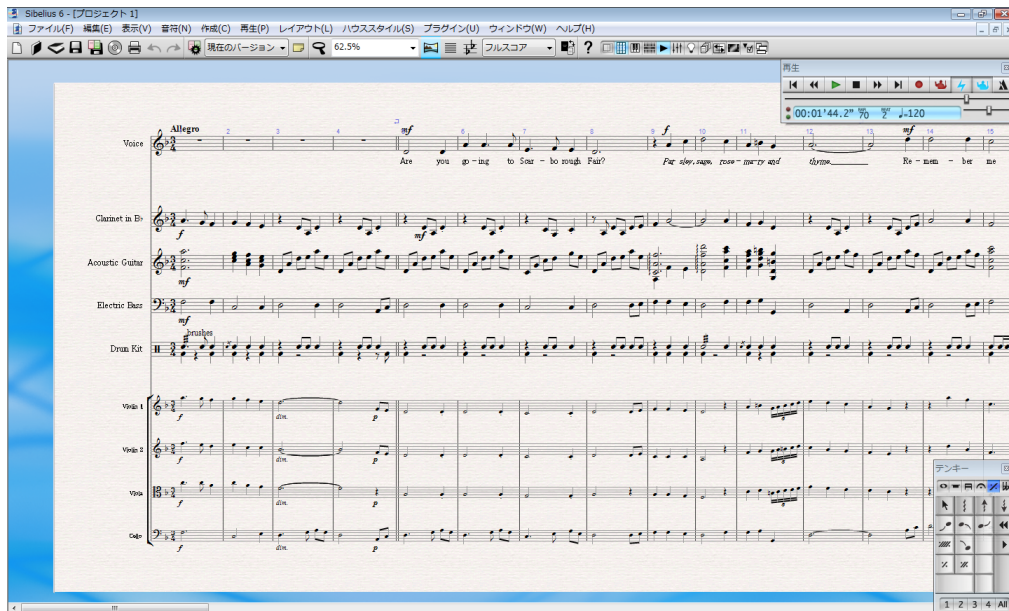
Sibelius では、**Ctrl** または **⌘** キーを別のキーと使用する場合、通常「操作を大きなステップで実行」することを意味しています。つまり、**Ctrl** または **⌘** を押さないで別のキーを押すと、通常の操作が実行できます。**Ctrl** または **⌘** キーを押したまま別のキーを押すと、大きなステップで操作が実行できます。Sibelius では、さまざまな操作（テキストなどのオブジェクトの移動や音符間隔の増減など）を大きなステップで実行する場合に **Ctrl** または **⌘** キーが使用されます。

Sibelius で使用されるキーで最も重要となるのは、**Esc** キーです。**Esc** キーを押すと、現在選択されている対象の選択が解除されます。誤って音符（またはスコア内のその他のオブジェクト）をクリックして選択してしまった場合、**Esc** キーを押して選択を解除することができます。Sibelius の操作をキャンセルまたは停止したい場合、**Esc** キーを押します。

パノラマ

Sibelius には、スコアの操作をより簡単にするさまざまなツールが内蔵されています。スコアを使って作業を行う際、より作業しやすい状態で表示するには、パノラマを使用します。

パノラマへ切り替えるには、**[表示] ▶ [パノラマ]**（ショートカットは **Shift+P**）を選択するか、ツールバーボタン（右図）をクリックします。スコアが無限長の単一の大譜表として表示されます。



パノラマを使用すると、スコアは左から右にのみスクロールするため、Sibelius 内でページを上下に移動する面倒なく楽譜入力ができます。これまでに説明した操作方法は、標準の表示でもパノラマ表示でも同じように動作します。ただし、ナビゲーターはパノラマでは表示されません（パノラマではスコアがページ単位で表示されないため）。

プロジェクト 1

このような表示方法は、他社のプログラムでは「スクロールビュー」や「ギャラリービュー」と呼ばれることもあります。パノラマを再びオフにするには、**[表示] ▶ [パノラマ]** を選択するか、ツールバーボタンをもう一度クリックします。パノラマ表示の左マージンに重ねて表示される青色のマジックマージンには、各譜表の音部記号、調号、楽器名が常に表示されます。

詳しくは、『リファレンス』の  **5.13 パノラマ** を参照してください。

ズーム

スコアの拡大率を調整する方法はいくつかありますが、最も簡単な方法は、キーボードショートカットを使用することです。**Ctrl++** または **⌘+** キーで拡大し、**Ctrl+-**、**⌘-** キーで縮小します。音符または他のオブジェクトが選択されている場合、選択されているものが拡大表示されます。**[Scarborough Fair]** スコアのボーカル譜表の最初の音符をクリックし、拡大表示してみましょう。ツールバーのドロップダウンリストに表示される倍率が操作に合わせて変化します。リストから特定の倍率を選択したり、タイプ入力して指定することもできます。

ホイールボタン付のマウスをお持ちの場合、**Ctrl** または **⌘** を押しながらホイールを上下させることで、スムーズに拡大 / 縮小が行えます。

画面に 1 ページ全体が表示されるように縮小してみてください。次に、拡大率を 100% に戻してみしましょう。これが Sibelius の作業で一番使いやすい大きさです。

ツールウィンドウの表示と非表示

画面が乱雑になってきたら、ツールバーのボタンをクリックして、ナビゲーターなどのツールウィンドウを非表示に切り替えることができます。

画面右下隅のテンキーは、音符、臨時記号、アーティキュレーション、タイ、その他の記号の入力に欠かせないツールです。テンキーは、**[ウィンドウ] ▶ [テンキー]** のオンとオフを切り替えるか、ツールバーボタン (右図) をクリックすることで表示と非表示を切り替えることができます。



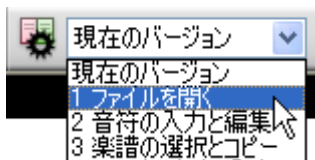
ツールバーの **[ツールウィンドウを非表示]** ボタン (左図) をクリックして、Sibelius のすべてのツールウィンドウを非表示にすることもできます。ボタンをもう一度クリックすると、開いていたウィンドウが表示されます。

バージョン

音楽を作成する際、同一のスコアの異なるバージョンを保存しておく、非常に便利です。特に、実験的な試みを行う場合や、ある作品のアレンジを作成したい場合などに役立ちます。Sibelius では、同一のファイル内に異なるバージョンすべてを保存することができますので、スコアのバージョンをさかのぼる (または先へと進む) ことができます。

この『ハンドブック』で扱うすべてのプロジェクトファイルには、それぞれ異なるバージョンがいくつか含まれています。各バージョンは見出し番号に対応していますので、どこでどのバージョンを使用するのかがすぐに分かります。

現在表示されているバージョンを確認する (または、ファイル内の別のバージョンを表示する) には、ツールバーのドロップダウンリスト (右図) を使用します。



[現在のバージョン] を除くすべてのバージョンは編集不可となっており、スコアに変更を加えることはできませんが、再生、印刷、音符その他のオブジェクトの選択、スコアからの楽譜のコピーは

1.1 スコアを開く

可能です。別のバージョンを表示するには、ドロップダウンリストのバージョン名をクリックします。

このプロジェクトを完了するには、[Scarborough Fair] の完成アレンジのプリントアウトが必要となりますので、1部印刷しましょう。[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択するか、ツールバー（バージョンのドロップダウンメニューの左）の [バージョンを編集] ボタンをクリックして [バージョンを編集] ダイアログを開きます。バージョンのリストから、[1 ファイルを開く] を選択し、[現在のバージョンにする] をクリックします。このバージョンを現在のバージョンにするかを尋ねるメッセージが表示され、新しい編集不可のバージョンが作成されます。[はい] をクリックします。弦楽器譜表が非表示の状態で、[Scarborough Fair] の完成アレンジが表示されます。

（この『ハンドブック』のプロジェクトに対応するすべてのスコアには、各バージョンについての説明コメントが添付されています。各コメントは、[バージョンを編集] ダイアログで確認することができます。）

詳しくは、 5.22 バージョンを参照してください。

譜表にフォーカス

先ほど現在のバージョンにしたスコアでは、Sibelius の [譜表にフォーカス] 機能を使って、現在作業を行っていない譜表を非表示にしています。このプロジェクトでは弦楽器のパート譜で作業を行う必要はありませんので、非表示にして、プリントアウトに使用される用紙を節約しましょう。

ツールバーボタン（右図）をクリックするか、[表示] ▶ [譜表にフォーカス]（ショートカットは **Ctrl+Alt+F** または **⌘F**）を選択して、[譜表にフォーカス] をオフにします。



非表示になっていた弦楽器のパート譜が表示されます。これらの譜表で作業を行う必要はありませんので、ツールバーボタンをもう一度クリックするか、[表示] ▶ [譜表にフォーカス] を選択して、[譜表にフォーカス] 機能をオンにします。

詳しくは、『リファレンス』の  5.8 譜表にフォーカスを参照してください。

スコアの印刷

[ファイル] ▶ [印刷]（ショートカットは **Ctrl+P** または **⌘P**）を選択し、[印刷] ダイアログを開きます。さまざまなオプションがありますが、気にする必要はありません。[OK]（Windows）または [プリント]（Mac）をクリックして、スコアを印刷します。

しばらくすると、高画質の [Scarborough Fair] スコアが印刷されます。このプリントアウトは、以降の音符入力で使用しますので、そのままお手元に置いておいてください。

問題が発生した場合には、『リファレンス』の  5.16 印刷を参照してください。

このプロジェクトの次のセクションでは、別のバージョンを編集する必要があります。もう一度、[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択します。バージョンのリストから、[2 音符の編集と入力] を選択し、[現在のバージョンにする] をクリックします。このバージョンを現在のバージョンにするかを尋ねるメッセージが表示され、新しい編集不可のバージョンが作成されます。[はい] をクリックします。[Scarborough Fair] の不完全アレンジが表示されます。

1.2 音符の編集と入力

プロジェクトのこのセクションを完了するためには、[2 音符の編集と入力] バージョンを [現在のバージョン] にしておく必要があります (前項参照)。まだ行っていない場合は、[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択し、リストからこのバージョンを選択して [現在のバージョン] をクリックします。

Sibelius での操作のほとんどは、音符の入力と編集に関連しています。Sibelius では、印刷された楽譜をスキャンしたり、MIDI キーボードやギターを演奏したり、マウスを使って音符を配置したり、他のプログラムで作成したファイルを開いたり、さまざまな方法で記譜することができますが、最も簡単な方法は、コンピュータのキーボードを使ってタイプ入力し、適宜編集していくことです。

Esc キーの使用

スコアに音符を入力し編集する方法を説明する前に、**Esc** キーについてももう一度説明しておきましょう。Sibelius で記譜を行う際、最も重要となるのが **Esc** キーです。次のような状況で 사용할 ことができます。

- マウスを使って音符を追加した場合、これ以降音符を追加しない場合は **Esc** キーを押します。
- コンピュータキーボードを使って音符を入力した場合、これ以降音符を追加せず、最後に入力した音符が選択された状態にする場合には **Esc** キーを押します。
- テキストを編集した場合、これ以降テキストを入力または削除せず、オブジェクトが選択された状態にするには **Esc** キーを押します。
- 何かが選択されている場合、その選択を解除するには **Esc** キーを押します。
- Sibelius がスコアを再生している場合、再生を停止するには **Esc** キーを押します。

テンキーレイアウトの左上のボタン (マウスポインタの画が描かれたもの) をクリックすることもできます (下のテンキーを参照)。

音符間の移動

Sibelius では、音符をクリックして選択することができます (選択すると青色に変化し、編集や変更が行えるようになります)。音符間を移動する最も簡単な方法は、コンピュータキーボードを使用することです。← と → キーを使用して、ある音符または休符から別の音符または休符へと前後に移動することができます。ある小節内の最初の音符または休符へ移動するには、**Ctrl+←** または **Ctrl+→** を押します。もうお気づきでしょうか。これもまた、「操作を大きなステップで実行」する一例です。

Tab キー (コンピュータキーボードの **Caps Lock** キーの上) を使用して、ある特定の譜表に添付されているオブジェクトを順に移動することもできます。**Tab** キーを押すと、ページの最初のオブジェクトが選択されますので、マウスを使用する必要はありません。[Scarborough Fair] スコアで試してみましょう。(Esc キーを押して) 何も選択されていないことを確認してから、**Tab** キーを押します。ボーカル譜表の最初の音符が青色に変わります。**Tab** を続けて押すと、音符、休符、強弱記号、歌詞などを順に移動していきます。同じ要領で逆方向に進むには、**Shift+Tab** キーを押します。

テンキー

画面右下のテンキーウィンドウでは、作成または編集する音符の音価、臨時記号、アーティキュレーション、タイ、その他の記号を選択することができます。(アーティキュレーションとは、音符の上または下に付加される、スタッカート、テヌート、アクセントなどの記号をいいます。音価とは、音符の長さです。これらの用語を含む専門用語については、『リファレンス』の用語集で説明しています。)

コンピュータキーボードの右端にあるテンキーは、テンキーウィンドウに対応しています。これらのキーを使用すれば、マウスクリックと同じ操作が素早く簡単に行えます。ノートブック型（ラップトップ）コンピュータをご使用の場合、下のノートブック（ラップトップ）のショートカットを参照してください。



「テンキー」と書かれたバーの下に配置された 6 つの小さなタブでは、6 つの異なる音楽記号のレイアウトを選択することができます。レイアウトは、それぞれ第 1 レイアウト、第 2 レイアウトなどと呼ばれます。レイアウトを変更するには、マウスでタブをクリックするか、**F7**–**F12** を押すか、 ボタン（ショートカットは **+**）をクリックしてレイアウトを順に選択します。 ボタン（ショートカットは **F7** (Windows) またはテンキーの **-** (Mac)）をクリックすると第 1 レイアウトに戻ります。

他のレイアウトがどのようなものか確認してみましょう。見慣れない記号も含まれています。使用頻度が最も高いのは第 1 レイアウトです。

テンキーウィンドウの一番下の数字列は、入力や編集を行う音符の「声部」の設定に使用します。こうして、1 つの譜表に複数のリズムを加えることができます。これについては、後で説明します。

Sibelius ではテンキーが特別な機能に対して使用されているため、Sibelius 使用中は、**Num Lock** 機能をオフにしてテンキーを数字キーや矢印キーとして使用することはできません。



テンキーの各レイアウトの左上隅のボタン（左図）は、**Esc** キーの代用として使用できます。授業で Sibelius を使用する場合、ホワイトボードを使って説明する際、このキーを使用すれば、キーボードを操作する必要がないので便利です。

ノートブック（ラップトップ）のショートカット

それでは、テンキーが付いていないノートブック型（ラップトップ）コンピュータをご使用の場合、どのように音符を入力するのでしょうか。マウスを使って音符をひとつひとつ入力する必要も、入力中に誰かに **Fn** キーを押してもらう必要もありません。

Sibelius には、代用できるワンキーショートカットが用意されています。ワンキーショートカットを使用すれば、同じように素早く簡単に音符が入力できます。使用するには、**[ファイル] ▶ [環境設定]** (Mac では **[Sibelius]** メニュー、ショートカットは **Ctrl+,** または **⌘,**) を選択してから、**[メニューとショートカット]** ページを選択します。ダイアログ最上部のメニューから **[ノートブック（ラップトップ）ショートカット]** を選択してから、**[OK]** をクリックします。

テンキーの数字を使用する代わりに、テンキーと同じ数字に対応するメインキーボード上の数字キーを使うことができます。この機能を使用する場合、**Shift+1** から **Shift+9** キーを使用して、音符の上に音程を入力することができます（『リファレンス』の **5.12 メニューとショートカット** を参照）。

外付けの USB テンキーを購入すれば、Sibelius の標準ショートカットを使用することができます。

作業内容の保存

音符の入力と編集の方法について詳しく説明する前に、まずはスコアを保存しましょう。作業内容は、定期的に保存するようにしましょう。また、CD-R や USB フラッシュメモリスティック（「ペンドライブ」とも呼ばれる）などのリムーバブルメディアにバックアップを保存するよう心がけましょう。

スコアを初めて保存する場合は、**[ファイル] ▶ [保存]**（ショートカットは **Ctrl+S** または **⌘S**）を選択またはツールバーボタン（右図）をクリックしてから、適切な保存場所（**[スコア]** フォルダなど）を選択し、スコアに名前を付けてから **[保存]** をクリックします。Windows では、**[スコア]** フォルダは **[マイ ドキュメント]** フォルダの中にあります。Mac では、**[スコア]** フォルダはログオンしているユーザーアカウントの **[書類]** フォルダにあります。



しかし、ここではすでに名前の付いた既存のスコアを使って作業をしていますので、**[ファイル] ▶ [名前を付けて保存]**（ショートカットは **Ctrl+Shift+S** または **⇧⌘S**）を選択し、新しい名前を付けてスコアを保存します。**[Scarborough]** などの名前を付けて、デスクトップに保存しましょう。

Sibelius は、数分ごとにスコアのコピーを特殊なフォルダに自動保存します。停電やクラッシュが生じた場合でも、次の Sibelius 起動時に失われた作業内容を復元することができます。

スコアのバージョンはいつでも保存できます。保存したバージョンは、下書き、アレンジの確認、大きな変更を行う前の念のための保存、作業の進行状況を示すログのエクスポートなどに使用できます。**[ファイル] ▶ [バージョンを保存]** を選択するか、ツールバーボタン（右図）をクリックします。



また、**[ファイル] ▶ [保存]** でスコアを保存するたびに番号が振られたバックアップが作成され、**[スコア]** フォルダ内の **[スコアのバックアップ]** フォルダに保存されます。たとえば、スコアを誤って削除してしまった場合や、スコアに大幅な変更を行ったがそれが気に入らない場合、**[スコアのバックアップ]** フォルダから最近のバージョンを取り出すことができます。

これらの便利な機能について、詳しくは『リファレンス』の **5.22 バージョン** と **9. ファイル** を参照してください。

テンキーを使用した音符の編集

テンキーのすべてのキーでは、現在選択されている音符をすぐさま変更することができます。音符の長さを変更したり、音符に臨時記号を追加するには、音符をクリックして選択してから、対応するテンキーのボタンを選択します。テンキーと矢印キーの使用方法を学べば、マウスでボタンをクリックするよりもずっと素早く簡単に操作することができます。

それでは試してみましょう。

- **[Scarborough Fair]** スコアで、小節 11 のボーカルパートの 2 番目の音符（B ナチュラルの 4 分音符）を選択します。
- **3**（テンキー）を押し、これを 8 分音符に変更しましょう。小節の長さが変更前と同じになるよう、8 分音符の後に 8 分休符が Sibelius によって自動追加されます。
- 4 分音符の長さに戻し、**9**（テンキー）を押してナチュラルをフラットに変更しましょう。もう一度 **9** を押すと、Sibelius により余分な臨時記号が削除されますが、音符は B_b で再生されます（調号に B_b があるため）。確認するには、**Esc** キーを押して音符の選択を解除してから、もう一度音符をクリックして選択します。すると、B_b が再生されます。もう一度 **7** キーを押し、音符をナチュラルに戻しましょう。

1.2 音符の編集と入力

以上の操作が正しく動作しない場合は、テンキーウィンドウのレイアウトが第 1 レイアウトになっていないことが考えられます。第 1 レイアウトを選択して（または **F7** キーを押して）から、もう一度試してみてください。

キーボードの矢印キーを使って、選択されている音符の音高を変更することもできます。B ナチュラルが選択されている状態で、**↓** を押してみましょう。音高が D に変わるまで押し続けます。**Ctrl+↑/↓** または **⌘+↑/↓** を押すと、選択されている音符の音高がオクターブ単位で移動します。**Ctrl+↑** or **⌘+↑** を押して、D を 1 オクターブ上に移動してみましょう。

最後にはこのようになります。



元に戻す / 繰り返し

誤って入力した場合や、入力結果に不満がある場合、元に戻ってスコアを手動で修正する必要はありません。たとえば、D の 4 分音符を選択し、テンキーの **5** を押して 2 分音符へと変更します。小節内の次の音符が上書きされます。ツールバーボタン（左図）をクリックするか、**【ファイル】** ▶ **【元に戻す】**（ショートカットは **Ctrl+Z** または **⌘Z**）を選択します。こうして、最後に行った操作を元に戻すことができ、削除した音符を再表示させることができます。Sibelius では、複数回にわたって元に戻す作業が行えます。**Ctrl+Z** または **⌘Z** を繰り返し押して、編集を始める前の状態にスコアを戻してみましょう。音符が再び B ナチュラルになるまで戻します。



直前の操作を繰り返すには、ツールバーの右矢印ボタンをクリックするか、**【編集】** ▶ **【繰り返し】**（ショートカットは **Ctrl+Y** または **⌘Y**）を選択します。

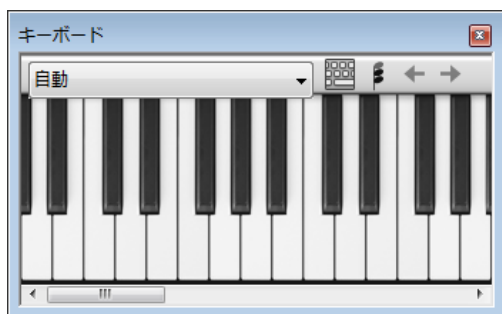
Sibelius には、最近行った操作を一覧表示する「元に戻すの履歴」があり、いくつかの前の操作まで一気に戻ることができます。詳しくは、『リファレンス』の **5.21 元に戻す / 繰り返し** を参照してください。

この機能は、Sibelius で実行した操作のみに適用されます。コンピュータキーボードにコーヒークーキーをこぼしてしまった場合には、この機能は役に立ちません。

マウス入力とキーボードウィンドウ

Sibelius でのマウスを使った音符の入力は簡単ですが、かなり時間がかかります。先ほど説明したショートカットを使用すると、作業時間を短縮することができます。

音符の入力を始める前に、**【ウィンドウ】** ▶ **【キーボード】** を選択するか、ツールバーのキーボードボタンをクリックして、キーボードウィンドウを開きます。これは、画面上に表示される仮想ピアノキーボードで、7 オクターブにわたって 3 つの異なるサイズで表示されます（ウィンドウ右下隅をドラッグしてサイズを変更することができます）。再生される音を聞くには、マウスで鍵盤をクリックします。



クラリネット譜表の先頭から、ボーカル旋律を引き立たせる対旋律の部分を入力していきます。まず、テンキーで最初の音を選択します。**Esc** キーを押し（またはテンキーの左上のボタンをクリックし）、スコア内で何も選択されていないことを確認します。**4**（テンキー）を押し、4 分音符を選択します。マウスポインタが青色に変化し、音符を入力できる状態であることが示されます。**.**（テンキー）を押し、4 分音符に付点を追加します。マウスポインタをスコア上に移動すると音符がグレーの影になり、クリックした場所に付点 4 分音符が入力されます。五線の上下に移動すると、それに応じて加線が現れるので、高音と低音を正確に入力することができます。

次に、クラリネット譜表の先頭近くで A の位置にマウスポイントを置いてクリックします。



間違った場所をクリックしてしまった場合には、**↑** または **↓** キーを使用して、入力後に音高を調整できます。

入力した音符は濃い青色で表示され、この音符が選択されていることを示しています。音符の右には、濃い青色の縦線（カーソル）が表示されます。



カーソルは、続けて音符を入力する準備ができています。このカーソルは、ワープロソフトなどで見かけるカーソルと同じものと考えると分かりやすいでしょう。カーソルは、後で説明するアルファベット入力に特に便利です。カーソルについて、詳しくはそこで説明します。

テンキーの **3** を押して 8 分音符を選択し、第 2 線をマウスでクリックして G を追加してから、**4** を押して 4 分音符をもう一度選択し、第 1 間をクリックして F を追加します。

テンキーウィンドウでは 4 分音符が選択された状態になっているので、マウスをクリックすることで、さらに音符を追加できます。4 分音符ボタンを再び選択する必要はありません。次の小節に 4 分音符を 3 つ追加しましょう。マウスポインタをクリックして、G、F、E を追加します。



次の小節は 4 分休符から始まりますので、テンキーの **0** を押し、休符を作成します（4 分音符がまだ選択された状態である必要があります）。

キーボードウィンドウを使って、対旋律の入力を続けましょう。鍵盤とテンキーをクリックして音価を変更します。**3** を押して 8 分音符を選択し、キーボードウィンドウを使ってその下に旋律を入力

1.2 音符の編集と入力

します。4分音符を追加する必要がある場合は、キーボードウィンドウの鍵盤をクリックする（またはスコア内をクリックする）前にテンキーの4を押して音符を追加します。最後にはこのようになります。



コンピュータキーボードを使用してキーボードウィンドウを「演奏」することもできます（『リファレンス』の  1.3 キーボードウィンドウを参照）。

テンキーを使用したアーティキュレーションとタイの追加

演奏者のためのアーティキュレーションを追加して、対旋律を完成させましょう。Sibelius でスコアを再生する際も、これらのアーティキュレーションに従って再生されます。

選択されている音符の長さや臨時記号を変更する方法と同じく、テンキーボタンを使えば、アーティキュレーションやタイを簡単に追加または削除することができます。いずれかの音符をクリックしてからテンキーボタンを選択すると、音符にオブジェクトが追加され、同じキーをもう一度押すと削除されます。

それでは試してみましょう。

- クラリネット譜表の小節3のDの4分音符を選択します。
- テンキーの最上列の「,」（スタッカート）に対応するキーを押します。音符にスタッカートが追加されます。
- 次の小節のDの4分音符にもこれを繰り返します。



次の大譜表の先頭へと移動し、タイを追加しましょう。

- クラリネット譜表の小節9のAの2分音符を選択します。
- **Enter**（テンキー）を押し、タイを音符の後に追加します。
- 矢印キーとテンキーを使って、アーティキュレーションとタイをクラリネットの対旋律の残りの部分に追加しましょう。

1.3 楽譜の選択とコピー

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア [プロジェクト 1] を開き、[3 楽譜の選択とコピー] バージョンを [現在のバージョン] にする必要があります。これを行うには、[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択し、このバージョンをリストから選択してから [現在のバージョンにする] をクリックします。

既存の音符を編集する方法と、キーボードショートカットを使ってより素早く編集を行う方法についてはすでに説明しましたが、ここでは、パッセージを選択して音符やその他のオブジェクトをまとめて操作、コピー、削除する方法について説明します。

選択とパッセージ

スコア内のオブジェクトを選択すると、オブジェクトがカラー表示され、マウスとキーボードでオブジェクトを操作できることが示されます。Sibelius のスコアの変更するための操作のほとんどは、選択して実行します。

選択には次の 3 種類があります。

- 単一選択：1 つのオブジェクトだけを選択。
- 複数選択：いくつかの個別のオブジェクトを選択。
- パッセージの選択：連続した楽譜の一部を選択。選択したパッセージは、薄い青色のボックス（譜表パッセージの場合）または紫色の二重線ボックス（大譜表パッセージの場合）で囲われます。

3 種類の選択には、ほぼ同じ操作が行えます。主な違いは、オブジェクトの選択方法です。

それぞれどのように選択するか、またどのように使用するか、[Scarborough Fair] スコアで見ましょう。1 つのオブジェクトを選択する方法は、音符を選択する方法と同じです。マウスでクリックするか、**Tab** キーを押して選択します。

複数のオブジェクトを選択するには、あるオブジェクトを選択してから、別の 1 つまたは複数のオブジェクトを **Ctrl**+ クリックまたは **⌘**+ クリック（**Ctrl** または **⌘** キーを押したままマウスの左ボタンをクリック）し、これらのオブジェクトを選択に追加します。[Scarborough Fair] スコアのクラリネット譜表の最初の音符を選択して試してみましょう。次の音符を **Ctrl**+ クリックまたは **⌘**+ クリックします。テキストや他のオブジェクトもこの方法で選択できます。タイトルを **Ctrl**+ クリックまたは **⌘**+ クリックしてみましょう。この方法であるオブジェクトを誤って選択に加えてしまった場合、そのオブジェクトを **Ctrl**+ クリックまたは **⌘**+ クリックすれば削除できます。タイトルを選択から削除してみましょう。

複数選択では、特定のオブジェクトに編集を加えることができます。**↑** と **↓** キーを使って、選択されている音符を上下に移動してみましょう。複数選択は、音符、コード、休符ではない複数のオブジェクト（アーティキュレーションやテキスト）をまとめて選択する場合などに便利です。

パッセージを選択する方法について説明する前に、**Esc** キーを押す（またはテンキーの左上のボタンをクリックし）、現在選択されているオブジェクトの選択を解除しましょう。

パッセージとは、楽譜の連続的なまとまりのことで、数ページにまたがることもあります。1 つの譜表または複数の譜表にまたがることもあります。パッセージの選択は、ある楽器のパート譜を別の楽器のパート譜へとコピーする場合にしばしば使用されます。パッセージでは、複数の音符をまとめて編集、コピー、削除することができます。

1.3 楽譜の選択とコピー

譜表パッセージを選択するには、まず、クラリネット譜表の最初の小節にある最初の音符をクリックします。アコースティックギター譜表の小節4の空の部分を **Shift+** クリックします。すると、選択されている範囲内を囲む青色のボックスが表示されます。



この譜表に添付されているオブジェクトは、すべてパッセージ範囲内で選択されています。こうすれば、この譜表に添付されているアーティキュレーション、強弱記号、テキスト、その他のオブジェクトすべてでもコピーすることができるため、楽譜のコピーに非常に便利です。もう一度、**↑**と**↓**キーを使って、選択されている音符を上下に移動してみましょう。ナビゲーターにも、選択範囲が縮小表示されます。

特定の種類の譜表パッセージを素早く選択するには、さまざまな方法があります。

- 小節内の空白の部分をクリックすると、譜表上のその小節が選択されます（小節をコピーする場合など）。
- 小節内の空白の部分をダブルクリックすると、大譜表の長さ分だけその譜表が選択されます。
- 小節内の空白の部分をトリプルクリックすると、スコア全体にわたってその譜表が選択されます。
- クリック、ダブルクリック、トリプルクリックしてから別の譜表を **Shift+** クリックすると、その間にある譜表がすべて選択に追加されます。また、**Ctrl+** クリックまたは **⌘+** クリックすると、譜表を個別に追加または削除できます。

大譜表パッセージを選択するには、ボーカル譜表の小節1の空白の部分を **Ctrl+** クリックまたは **⌘+** クリックします。すべての譜表のこの小節を囲む紫色の二重線ボックスが表示されます。

- **Ctrl** または **⌘** を押したままクリック、ダブルクリック、トリプルクリックすると、それぞれ1小節分、その大譜表の長さ分、スコア全体にわたって大譜表パッセージを選択することができます。
- **[編集] ▶ [選択] ▶ [すべて選択]**（ショートカットは **Ctrl+A** または **⌘A**）を選択し、スコア全体を一度に選択することもできます。これは、スコア全体を移調する場合、スコア全体のフォーマットを変更する場合、スコア内である特定の種類のオブジェクトだけを選択する場合などに特に便利です。

選択について、詳しくは『リファレンス』の **1.9 選択とパッセージ**を参照してください。

音符とその他のオブジェクトの削除

さまざまなオブジェクトを選択してから、**Delete** キーで削除してみましょう。

- テキスト（最初のページの一番上にある編曲者テキストなど）を削除してみましょう。
- 音符を削除してみましょう。拍数が保たれるよう、音符が休符に変化します。

休符を削除することもできます。削除すると休符は非表示となり、リズムが保たれます。休符を削除すると、灰色表示に変化し、休符が非表示であることが示されます。休符の選択を解除すると、全く表示されなくなります。通常、休符を非表示にすることは避けるべきですが、特殊な記譜の場合には非表示にした方が便利なこともあります。同じように、他のオブジェクトも非表示にすることができます。非表示オブジェクトは、**[表示] ▶ [非表示オブジェクト]**（ショートカットは **Ctrl+Alt+H** または **⌘+H**）をオンにすると灰色表示されます。

オブジェクトを削除するには、**Backspace** キーを使うか、**[編集] ▶ [削除]** を選択します。

【編集】▶【切り取り】（ショートカットは **Ctrl+X** または **⌘X**）は、**Delete** キーに似ていますが、オブジェクトを切り取ってクリップボードへと保存し、【編集】▶【貼り付け】（ショートカットは **Ctrl+V** または **⌘V**）で別の場所に貼り付けることができます。Sibelius ではあまり使用されることのない操作ですので、ここで試す必要はありません。

削除してしまったものを復元したい場合は、【元に戻す】や【繰り返す】が使えることを覚えておきましょう。

小節の削除

スコアから 1 つまたは複数の小節（空または記譜済み）を削除する方法について説明します。重要な操作ですので覚えておきましょう。Sibelius では、2 種類の方法で小節を削除することができます。

最も簡単な方法は、削除したい小節が含まれるようにパッセージを選択（上の選択とパッセージ参照）してから、【編集】▶【小節の削除】（ショートカットは **Ctrl+Backspace** または **⌘Backspace**）を選択する方法です。続けるかどうかを確認するメッセージが表示されます。【はい】をクリックします。次回以降、確認メッセージを表示させたくない場合は【次回から表示しない】のチェックボックスをオンにします。【次回から表示しない】を選択した警告メッセージを再び表示させるには、【ファイル】▶【環境設定】（Mac では【Sibelius】メニュー）の【その他】ページで【すべてのメッセージを表示】をクリックします。

小節を削除するもうひとつの方法は、大譜表パッセージを選択してから **Delete** キーを押す方法です。

【Scarborough Fair】スコアの最後の 3 小節を削除してから、【元に戻す】を使って小節を復元させてみましょう。

コピー

Sibelius では、小節、譜表、その他さまざまなファイルを簡単にコピーすることができます。それでは試してみましょう。クラリネット譜表の小節 5 にあるスタッカートの 4 分音符をクリックしてから、アコースティックギター譜表の空の小節 6 を **Alt+** クリックまたは **⌘+** クリックします。音符はそのままコピーされますが、コピー先の五線上のどの線または間にマウスポインタを合わせてクリックするかによって、音符の音高は変更されます。スタッカートもコピーされます。音符に追加されているアーティキュレーションはすべてこのようにコピーされます。

この操作は、楽譜の一部分を比較的大きめに選択してまとめてコピーするのに適しています。まず、アコースティックギター譜表の小節 5 を選択します。



先ほど小節 6 に置いた音符の前の空白部分を **Alt+** クリックまたは **⌘+** クリックすると、次のようになります。



先ほど置いた音符が上書きされます。**Alt+** クリックまたは **⌘+** クリックを使えば、単一選択、複数選択、パッセージ選択してスコア内の複数のオブジェクトをコピーすることができます。

Windows では、ご使用のマウスに 3 つ目（中央）のボタンまたはクリック可能なスクロールホイールがある場合、**Alt+** クリックの代わりにこのボタンを使ってコピー＆ペーストすることができます。ご使用のマウスに 2 つしかボタンがない場合でも、右と左のマウスボタンを同時に押す複合クリックで、3 つ目の中央ボタンをクリックするのと同じ操作が行えます。

1.3 楽譜の選択とコピー

Sibelius では、[編集] ▶ [リピート] (ショートカットは **R**) を選択し、スコア内の音符またはその他のオブジェクトを複製してオリジナルのすぐ後に追加することができます。**Alt**+ クリックまたは **⌘**+ クリックを使って先ほど入力した低音の 4 小節を選択し、**R** を押すと、選択した小節のすぐ後に小節が追加されます。こうして、音符、和音、テキスト、パッセージ、その他のオブジェクトを後に追加していくことができます。

クリップボードを利用してコピー & ペーストするには、[編集] ▶ [コピー] (ショートカットは **Ctrl**+**C** または **⌘**+**C**) を選択してから、[編集] ▶ [貼り付け] (ショートカットは **Ctrl**+**V** または **⌘**+**V**) を選択します。この方法は、異なるスコア間でのコピーに使用すると便利です (**Alt**+ クリックまたは **⌘**+ クリックでは、同じスコア内でしかコピーができません)。

[編集] ▶ [コピー] および [編集] ▶ [貼り付け] 機能は、どちらもコンテキストメニューで使用できます。コンテキストメニューは、1 つまたは複数のオブジェクトが選択されている際に右クリック (Windows) または **Control**+ クリック (Mac) して選択します。

ここまでで説明したさまざまなコピー方法を使って、先行する小節 (1 つまたは複数) をアコースティックギター譜表の空の小節へとコピーし、ギターのパート譜の足りない小節を完成させましょう。

1.4 フレキシタイム入力

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア【プロジェクト 1】を開き、【4 フレキシタイム入力】バージョンを【現在のバージョン】にする必要があります。これを行うには、【ファイル】▶【バージョン】▶【バージョンを編集】を選択し、このバージョンをリストから選択してから【現在のバージョンにする】をクリックします。

ここまでで、マウスを使って譜表をクリックしたり、キーボードウィンドウを使って行う音符入力について説明しました。他にも、より素早く音符を入力する方法があります。すべてを試してみて、一番自分に合った方法で入力するとよいでしょう。さまざまな入力方法を組み合わせて使用してもかまいません。このセクションでは、Sibelius 独自のリアルタイム音符入力システム「フレキシタイム」(Flex-time™) について説明します。

「リアルタイム」入力とは、演奏内容をコンピュータプログラムに取り込み、その音高とリズムをプログラムに読み取らせる入力方法です。理論上ではこのように機能します。しかし実際には、どのプログラムを使用しても、演奏したリズムを正確に認識することは非常に難しく、演奏後に音楽を分析したり、さまざまな機能を使用する必要があります。一般的に、メトロノームのクリック音に合わせてできるだけ正確に演奏し、演奏後に「クオンタイズ (タイミング修正)」してリズムを修正することが必要となります。

しかし、Sibelius は独自のアプローチを採用しているため、比較的自由に演奏しても、優れた結果が得られます。

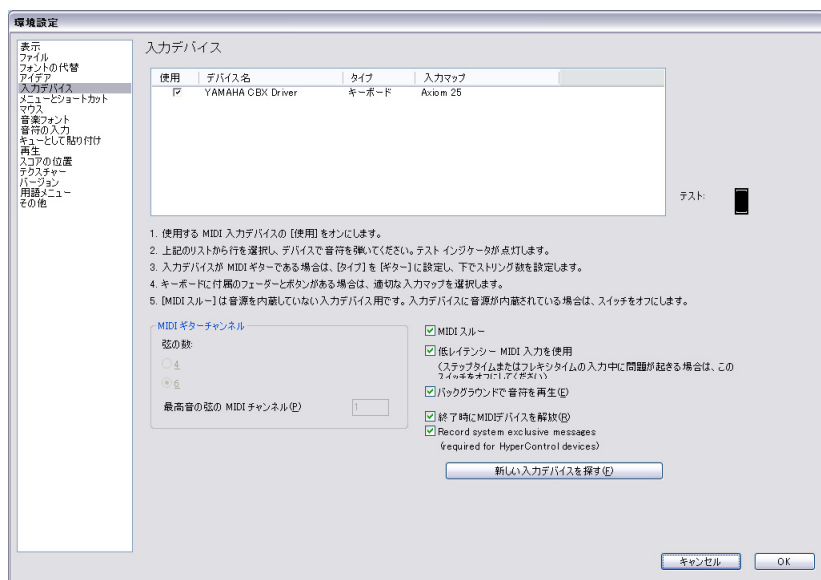
MIDI キーボードまたは MIDI ギターをお持ちでない場合、56 ページの  1.5 アルファベット入力とステップタイム入力に進んでください。

MIDI デバイスの使用

フレキシタイムを使用するには、ご使用のコンピュータに接続されている MIDI キーボードまたは MIDI ギターが必要です (1.1 Mac での MIDI セットアップ (30 ページ) の 1.1 Windows での MIDI セットアップ (27 ページ) を参照)。

1.4 フレキシタイム入力

ご使用の MIDI デバイスが正しくインストールされていれば、Sibelius での入力と再生を設定することができます。これを行うには、[ファイル] ▶ [環境設定] (Mac では [Sibelius] メニュー) を選択し、[入力デバイス] ページに進みます。



ページ最上部の表からご使用のデバイスの名前 (**M-Audio Oxygen 8** など) を探し、[使用] チェックボックスがオンになっていることを確認します。MIDI ギターをご使用の場合、ドロップダウンメニューをクリックして ([キーボード] ではなく) [ギター] を選択し、[タイプ] を変更する必要があります。

このセクションでは、MIDI キーボードを使用します。MIDI デバイスの入力と再生の設定方法について、詳しくは『リファレンス』の 1.10 入力デバイスを参照してください。

フレキシタイムのオプション

単音のメロディを弾いてみるのが一番簡単です。まずは試してみましょう。画面には、これまで作業を行ってきた [Scarborough Fair] スコアが表示されているはずです。

クラリネットパートの 1 番を録音していきます。最良の結果が得られるよう、[音符] ▶ [フレキシタイムのオプション] (ショートカットは **Ctrl+Shift+O** または **⌘⇧O**) を選択します。

別の楽器に合わせて、1 つのメロディラインのみを録音しますので、[テンポの柔軟性] ドロップダウンリストから [なし (ルバートなし)] を選択し、[複数の声部に入力] チェックボックスをオフにします。

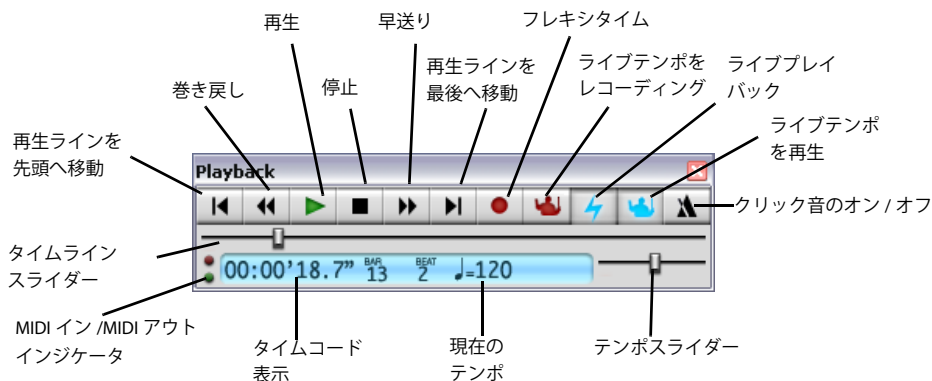
[OK] をクリックしてスコアに戻ります。

試してみましょう

このプロジェクトの最初に印刷したスコアのプリントアウトを参照しながら進めていきます。

プロジェクト 1

[再生] ウィンドウでは、Sibelius の再生表示とコントロールが行えます。[再生] ウィンドウが表示されていない場合、[ウィンドウ] ▶ [再生] (ショートカットは **Ctrl+Alt+Y** または **⌘+Y**) を選択してオンにします。



フレキシタイルを使って、小節 43 から小節 61 (1 番の終わり) までの音符を入力していきます。クラリネット譜表の小節 43 を選択する (またはこの小節の小節休符を選択する) と、この小節が薄い青色のボックスで囲まれ、録音を開始する小節が設定されます。

準備が整ったら、[音符] ▶ [フレキシタイル入力] (ショートカットは **Ctrl+Shift+F** または **⌘+F**) を選択するか、[再生] ウィンドウの録音ボタン (赤い丸ボタン) をクリックします。1 小節のカウントインの後、録音が始まります。それでは試してみましょう。



- 標準設定では、フレキシタイルのカウントインは 1 小節です。この場合、カウントインのクリック音が 3 回聞こえます。(メトロノームのクリック音が聞こえない場合、再生デバイスがオンであることを確認してから、『リファレンス』の 1.4 フレキシタイルまたは 4.1 再生を参照してください。)
- カウントインの後、クリック音に合わせて、続く 2、3 小節をスムーズに演奏してみましょう。
- 演奏を続けましょう。演奏から少し遅れて、画面に音符が表示されていきます。演奏中は画面を見ないほうが演奏しやすいかもしれません。
- 録音を停止するには、再生ウィンドウの停止ボタン (四角ボタン) を押すか、**スペース**キーを押します。

入力結果を確認しましょう。結果に満足できない場合は、入力した小節を選択してから **Delete** キーを押し、もう一度小節 43 を選択します。満足できる結果が得られるまで、録音を繰り返します。録音中の Sibelius のスコア再生スピードを落としたい場合は、下の録音テンポの調整を参照してください。

この『ハンドブック』のプロジェクト 3 では、2 つの譜表に同時に入力する方法について説明しています。ルバート (テンポの柔軟性)、メトロノームクリック音のスピードや音色、カウントイン、3 連符やその他の連音符の認識方法など、さまざまなオプションを変更することもできます (『リファレンス』の 1.4 フレキシタイルを参照)。

録音テンポの調整

キーボードの操作に慣れていなくても、心配する必要はありません。Sibelius を使えば、名演奏家である必要はありません。まず、フレキシタイルでの録音をより簡単に行う方法について説明し、その後、入力内容の修正方法について説明します。

1.4 フレキシタイム入力

〔再生〕ウィンドウのテンポスライダーでは、スコアの再生スピードを調整することができます。この操作は、フレキシタイム入力の録音にも適用されます。スライダーを右に動かすとクリック音がゆっくりになり、慎重に演奏したい場合に便利です。

テンポスライダーは、スコア全体の再生スピードを変更する場合にのみ使用してください。テンポの変更には、テンポテキストとメトロノーム記号を使用してください（64 ページの  1.7 テキストと強弱記号を参照）。

パフォーマンスの再表記

不要な休符、重複する音符、正確でない長さの音符がある場合、パワフルな Sibelius のプラグインを使ってこれらを修正することができます。パッセージを選択し、**〔プラグイン〕** ▶ **〔記譜の簡略化〕** ▶ **〔パフォーマンスの再表記〕** を選択すると、ダイアログが開きます。録音した音楽には 8 分音符（クエーヴァー）より小さな音価は使用されていないので、**〔クオンタイズの単位（最小音価）〕** ドロップダウンリストから **〔長い：8 分音符〕** を選択します。**〔選択したパッセージを上書き〕** チェックボックスがオンになっていることを確認してから **〔OK〕** をクリックします。フレキシタイムの入力内容が再計算され、リズムと表記が単純化されます。

間違いがあれば、これまでに学んできた編集テクニックを使って、音価や音高を修正しましょう。また、**〔プラグイン〕** ▶ **〔記譜の簡略化〕** メニューから他のプラグインを試してみることもできます。

プラグインについて、詳しくは『リファレンス』の  6.1 プラグインを使った作業を参照してください。

1.5 アルファベット入力とステップタイム入力

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア [プロジェクト 1] を開き、[5 アルファベット入力とステップタイム入力] バージョンを [現在のバージョン] にする必要があります。これを行うには、[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択し、このバージョンをリストから選択してから [現在のバージョンにする] をクリックします。

クラリネット譜表への音符入力を完成させましょう。Sibelius で音譜を作成する方法をさらに 2 つ説明します。このプロジェクトの最初に印刷したスコアのプリントアウトを参照しながら進めていきます。

アルファベット入力

コンピュータ キーボードの **A** から **G** の英字を使って音高を、(テンキーではなく) メインキーボードの **1** から **9** の数字を使って和音を Sibelius に入力することができます。この方法に慣れると、マウスで入力するよりずっと素早く簡単に音符が入力できます。

クラリネットパートの小節 66 から小節 68 に音符を追加してみましょう。

- クラリネット譜表の小節 66 の小節休符をクリックすると濃い青色に変化します。こうして開始小節を設定します。ここから先は、マウスを使わないで操作してみましょう。
- **N** ([音符] ▶ [音符の入力] のショートカット) を押し、カーソルを表示させます。
- **F7** キーを押してテンキーの第 1 レイアウトを表示し、テンキーの **3** キーを押して 8 分音符を選択します。こうして、入力される音符の音価をあらかじめ指定しておきます。
- **FCA** とタイプ入力します。**A** が 1 オクターブ低く入力されていますので、**Ctrl+↑** または **⇧↑** を押し、この音符を 1 オクターブ上に移動させます。音符が追加されるたびにカーソルが移動し、次の音符が追加される位置が示されます。
- **FC** とタイプ入力してから **Ctrl+↑** または **⇧↑** を押し、**C** を 1 オクターブ上に移動させます。
- **A** とタイプ入力し、8 分音符をもう 1 つ入力します。
- テンキーの **5** キーを押して、2 分音符を選択します。
- **D4** (4 はテンキー) **CA** とタイプ入力します。**D** の 2 分音符、**C** と **A** の 4 分音符が入力されます。
- **B** ナチュラルを入力するために、テンキーの **7** を押してナチュラルを選択します。
- **BG** とタイプ入力し、**B** ナチュラルと **G** の 4 分音符を入力します。
- これ以降はしばらく入力作業は行わないので、**Esc** キーを 2 回押し、音符入力を停止し、最後に入力した音符の選択を解除します。

最後にはこのようになります。



マウス入力の場合、マウスでスコアをクリックしてはじめて音符が入力されるのと同じように、アルファベット入力の場合、**A** から **G** の文字をタイプ入力してはじめて音符がスコアに入力されます。テンキーで音符を選択しても、**A** から **G** のキーをタイプ入力またはマウスをクリックしなければ音符は入力されません。また、マウス入力の場合と同じように、アルファベット入力の場合も、**A** から **G** のキーをタイプ入力する前に、臨時記号、アーティキュレーション、その他の記号をテンキーで

1.5 アルファベット入力とステップタイム入力

選択しておく必要があります。(この操作を忘れて入力してしまった場合も、後で音符を編集することができます。)唯一の例外は、(**Enter** キーを使った) タイの入力です。タイは音符を入力した後に追加します(その方が自然だからです)。

一方の手でテンキーを使って長さを変更し、もう一方の手で **A** から **G** と **R** を使って音高を入力する方法に慣れれば、非常に素早く簡単に音符を作成することができるようになります。

既存の音符のアーティキュレーション、臨時記号、その他の属性は、音符を選択してからテンキーの対応するボタンを選択するだけで編集できることを覚えておきましょう。音符の音高を変更するのも同じように簡単です。音符を選択し、**A** から **G** のキーを使って新しい音高を入力します。音符の長さを変更する方法についてはすでに説明しました。音符を選択し、テンキーで音価を選択します。

アルファベット入力を使って、クラリネットパートから小節 69 以降のスコアへと足りない部分を入力しましょう。

詳しくは、『リファレンス』の  1.1 音符の入力を参照してください。

アルファベット入力による和音の作成

アルファベット入力で和音を作成する方法には2つあります。通常の入力方法で和音内の音符を1つ入力してから、次のように行います。

- 通常のキーボードでは、(テンキーではなく)メインキーボードの **1-9** を押して、入力した音符の上に音符を追加するか、**Shift+1-9** を押して、入力した音符の下に音符を追加します。たとえば、**1** を押すとユニゾンで、**3** を押すと3度上に、**Shift+6** を押すと6度下に音符が追加されます。
- ノートブック型(ラップトップ)コンピュータのキーボード(1.2 ノートブック(ラップトップ)のショートカット(43 ページ)を参照)では、**Shift+1-9** を押して、入力した音符上に音符を追加します。たとえば、**Shift+4** を押すと3度上に音符が追加されます。
- どちらのキーボードでも、**Shift+A-G** を押して、入力した音符の上に音符を追加します。(入力した音符の下に音符を追加するショートカットはありません。)

このように、音符を和音に追加していきます。

パッセージを選択してから **1-9** または **Shift+1-9** を押すと、パッセージに含まれるすべての音符の上または下に一度に音符を追加することができ、便利です。

ステップタイム入力

MIDI デバイスを使ってリアルタイム録音で Sibelius に音符を入力する方法については、すでに説明しました。アルファベット入力に似た方法で、MIDI キーボード(または MIDI ギター)を使って音符を入力することもできます。

コンピュータに接続されている MIDI デバイスをお持ちでない場合、先ほど説明したアルファベット入力を使ってこのセクションを進めてください。また、キーボードウィンドウを仮想 MIDI キーボードとして使用することもできます(『リファレンス』の  1.3 キーボードウィンドウを参照)。

ステップタイム入力は、MIDI 入力デバイスを使ったアルファベット入力のようなもので、すばやく簡単な入力ができます。次のように行います。

- 音符の作成を開始する小節内の休符を選択してから **N** を押すと、カーソルが表示されます。
- テンキーで音価を選択します(この手順を忘れないようにしましょう)。

プロジェクト 1

- MIDI キーボードで音符を演奏します。アルファベット入力の場合と同じように、音符を作成する前にアーティキュレーションやその他の記号を選択します。選択されたテンキーのキーは、別のキーが選択されるまで、選択されたままの状態となります。
- 音価を変更するには、音符を作成する前にテンキーで新しい音価を選択します。
- 休符を入力するには、テンキーの **0** を押します。テンキーで選択されている音価の休符が入力されます。

アルファベット入力との違いは次の点です。

- 黒鍵を演奏すると、それが黒鍵であることが認識されるため、臨時記号を入力する必要はありません。黒鍵音符の表記 (F# となるのか、Gb となるのかなど) は、調号と内容に基づいて判断されます。また、音符の作成後、メインキーボードの **Return** キーを押して異名同音に変更することができます。
- 同じように、音符のオクターブも正しく認識されます。
- 和音は、演奏するだけで入力することができます (アルファベット入力のように、1 つの音符を入力してから次の音符を入力していく必要はありません)。

これらの違いにより、ステップタイム入力を行う方が、アルファベット入力を行うよりも少し時間を短縮できます。ステップタイム入力を使って、アコースティックギター譜表の小節 69 以降に足りない部分を入力していきましょう。

- まず、アコースティックギター譜表の小節 69 の小節休符を選択します (濃い青色に変化します)。
- 次に、テンキーで 8 分音符を選択します。
- 音符を演奏します。テンキーで音符の長さを変更しながら演奏していきます。

間違えた場合や、変更したい場合は、いつでも矢印キーで戻ることができます。アルファベット入力の場合と同じように、音符または和音の音高を修正するには、音符を選択してから MIDI キーボードで演奏します。間違えても、**[元に戻す]** で修正できます。

コードを作成するには、マウスで音符をクリックしたり、コンピュータキーボードを使って入力するよりも、MIDI キーボード (または MIDI ギター) を使うとすばやく簡単に入力できます。詳しくは、『リファレンス』の  **1.1 音符の入力** を参照してください。

音楽をコピーするには **Alt+** クリックまたは **⌘+** クリック、音符または小節を繰り返すには **R** を使用できることを覚えておきましょう。

スコアの移調



標準設定では、実音 (コンサートピッチ) で表示されます。演奏者に分かりやすいよう、移調譜へ切り替えてクラリネット譜表を正確な音高で表示させるには、**[音符] ▶ [スコアを移調する]** (ショートカットは **Ctrl+Shift+T** または **⌘⇧T**) を選択するか、ツールバーボタン (上左図) をクリックします。それでは試してみましょう。クラリネット譜表の音符と調号すべてが、クラリネットのコンサートピッチにすぐさま変更されます。Sibelius では、移調楽器によって生じる複雑な問題すべてが自動処理されます。

移調スコアを再生すると、Sibelius は移調楽器を正しく読み取り、正しい音高に置き換えて再生します。移調楽器の間でコピーすると、同じ音程になるよう移調されます。(実音スコアからパート譜表示に切り換える場合も、移調楽器が自動移調されます。下を参照してください。)

Sibelius の音符入力方法では、**[音符] ▶ [スコアを移調する]** がオンの場合にもスコアに音符を入力することができます。**A-G** の文字を使って音符を入力する場合、対応する記譜音が譜表に表示されます。

1.5 アルファベット入力とステップタイム入力

- [音符] ▶ [スコアを移調する] を選択するか、ツールバーボタンをクリックして、移調スコアへ切り替えます。
- クラリネット譜表の最初の2小節を選択し、**Delete** キーを押して音符をクリアします。
- **N** を押してカーソルを表示させ、テンキーで音価を選択します。
- **A B C D** とタイプ入力し、譜表に音高 A、B、C、D を入力します。
- [音符] ▶ [スコアを移調する] を選択するか、ツールバーボタンをクリックして、実音へと切り替えます。音高がそれぞれ G、A、B $\flat$ 、C へと移調されます。

しかし、MIDI デバイスを使って実音で音高を演奏する場合は、実音が譜表に表示されます。

- [音符] ▶ [スコアを移調する] を選択するか、ツールバーボタンをクリックして、移調スコアへ切り替えます。
- クラリネット譜表の最初の2小節を選択し、**Delete** キーを押して音符をクリアします。
- **N** を押してカーソルを表示させ、テンキーで音価を選択します。
- ご使用の MIDI デバイスで、**A、B、C、D** を演奏します。

音高 B、C $\sharp$ 、D、E が譜表に入力されます。詳しくは、『リファレンス』の  **2.18 楽器** を参照してください。

[編集] ▶ [元に戻す] を選択し、変更を取り消してクラリネットの対旋律を復元させましょう。

パート譜での作業

スコア内の楽器の自動移調に加え、Sibelius では、各楽器のパート譜を作成することができます。パート譜には、その楽器に関連する記譜のみが表示されます。フォーマット、移調、レイアウトは、Sibelius により自動処理されます。

Sibelius では画期的なアプローチが導入されており、スコアに変更を加えると変更内容がパート譜に反映され、逆に、パート譜に変更を加えると変更内容がスコアに反映されます。この機能をダイナミックパート (Dynamic parts™) と呼んでいます。

ダイナミックパートは、スコアを編集するのとまったく同じ方法で編集することができます。音符の移動、追加、削除、スラーや発想記号の追加など、すべて通常どおりに行えます。スコア (またはパート譜) に加えた変更は、パート譜 (またはスコア) にすぐさま反映されます。ダイナミックパートを別ファイルに書き出す必要はありません。ダイナミックパート譜はフルスコアと同じファイルに保存されるため、管理も簡単です。

パート譜は、スコアを開始すると自動的に作成されるため、特別な操作は必要ありません。[Scarborough Fair] スコア内の楽器のパート譜を確認してみましょう。

- [パート] メニューの [フルスコア] と書かれたツールバーのドロップダウンメニューをクリックします。
- リストから [クラリネット B $\flat$] を選択します。パート譜のみ表示されるよう画面表示が変更されます。スコアとパート譜の違いがひと目で分かるよう、クリーム色の用紙上にレイアウトされます。

このパート譜は、このまま演奏者に提供することができます。タイトルと音符はスコアと同じです (ただし、正しい記譜音で表示されます)。パート譜には、演奏者がこのパートを演奏するために必要なすべての情報が含まれている一方、必要でない情報はすべて省かれています。



Ctrl+↑ または **⇧↑** を押して小節を 1 オクターブ上へ移調してから、[ウィンドウ] ▶ [フルスコアに切り替え]（ショートカットは **W**）を選択するか、ツールバーボタン（左図）をクリックします。

フルスコアの同じパッセージが、1 オクターブ上へ移調されます。**Ctrl+↓** または **⇧↓** を押し、パッセージを元のオクターブへ戻します。

この『ハンドブック』では、ダイナミックパートを使った作業についてももう少し説明していきます。詳しくは、『リファレンス』の  **7.1 パート譜での作業** を参照してください。

1.6 再生

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア [プロジェクト 1] を開き、[6 再生] バージョンを [現在のバージョン] にする必要があります。これを行うには、[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択し、このバージョンをリストから選択してから [現在のバージョンにする] をクリックします。

Sibelius の最もパワフルな機能のひとつに、スコアを再生する機能があります。

再生コントロール

[再生] ウィンドウの再生ボタンをクリックするか、**スペース**キーを押すと、楽譜の再生が始まります（始まらない場合は下を参照してください）。[再生] メニューを使っても再生できますが、再生ボタンを使った方が簡単です。

Sibelius では、再生時にはテンキー（プロパティウィンドウが開いている場合はこのウィンドウも）が非表示に切り替えられ、楽譜のページ全体が表示されます。緑色の縦線（再生ライン）が表示され、再生位置が示されます。スコアは、進行に合わせて移動します。

[Scarborough Fair] のアレンジを通して聴いてみましょう。再生を停止するには、[再生] ウィンドウの停止ボタン（四角ボタン）を押すか、もう一度**スペース**キーを押します。

スコアを巻き戻したり早送りするには、[再生] ウィンドウのボタンを使うか、キーボードショートカット [（巻き戻し）と]（早送り）を使います。

再生ボタンをクリックするか、**スペース**キーを押すと、再生を停止した位置から再生が再開されます。再び最初から再生するには、スコアの見出しまで巻き戻す必要があります。スコアの最初または最後まですばやく巻き戻しまたは早送りするには、**Ctrl+[]** または **⌘+[]** を押します。

特定の位置から再生させるには、再生を開始させたい位置の音符をクリックして選択し、**P** キーをクリックします。スコアを最初から再生するには、**Esc** キーを押してすべての選択を解除してから **P** を押すのが最も簡単です。

再生に問題がある場合は、下の再生に問題がある場合を参照してください。

ミキサーウィンドウ

[Scarborough Fair] を再生すると、それぞれの楽器がそれぞれのステレオ位置で演奏されているように聞こえます。これは、Sibelius のサウンドステージ™ 機能によるものです。サウンドステージ機能は、コンサートステージで演奏されているかのような立体的な音響効果を生み出します。

各楽器の位置とボリューム（および、リバーブやその他のエフェクトの適用）は、Sibelius のパワフルな [ミキサー] ウィンドウを使って手動で調整することができます。ミキサーを表示するには、ツールバーボタン（右図）をクリックし、[ウィンドウ] ▶ [ミキサー] を選択するか、ショートカット **Ctrl+Alt+M** または **M** を押します。



ミキサーは、色付けされたストリップに分類されています。スコア内の各譜表は、それぞれ薄い青色の譜表ストリップで表示されます。アコースティックギター譜表ストリップを探して、ボリュームフェーダーを右へドラッグして再生中のギターのサウンドを大きくしてみましょう。ボリュームフェーダーを **118** までドラッグします。



それでは、ドラムのステレオ位置を変更してみましょう。ドラムセットの譜表ストリップを探し、楽器名の左の矢印をクリックすると、譜表ストリップが拡張表示されます。



さまざまなコントロールが表示されます。[リバーブ] と [コーラス] ノブの上にスライダーが表示されます。スコア再生中にスペースキーを押し、このスライダーを左端へドラッグしてみましょう。ドラムサウンドが左へと移動したように聞こえます。

ミキサーを使って、リバーブやコーラスなどのエフェクトをスコア内の楽器へと加える方法を見ましょう。

- ギター譜表ストリップを探し、矢印をクリックし拡張表示させます。
- [Reverb] ノブをクリックします。
- マウスでノブをドラッグし、ギターに加えられるエフェクトの量を調整します。サウンドがどのように変化するのかに耳を傾けましょう。[Scarborough Fair] スコアには、驚くほどリアルなサウンドを生み出す、パワフルな内蔵 Sibelius Player と Sibelius Sounds Essentials サウンドライブラリが使用されています。ギターサウンドにリバーブをミックスしていくと、大きなコンサートホールでギターを演奏しているように聞こえてきます。

ミキサーで操作したボリューム、エフェクト、ステレオ位置（パン）の変更は、スコアを保存する際（またはスコアのバージョンを保存する際）に保存され、次にスコアを開いたときに再現されます。

Sibelius の再生とミキサーについて、詳しくは『リファレンス』の 4. 再生とビデオを参照してください。

1.6 再生

再生に問題がある場合

再生ボタンを押しても何も聞こえない場合、次の点を確認してください。

まず、コンピュータのスピーカー、MIDI キーボード、その他の再生機器をチェックし、接続されていること、オンになっていること、ボリュームが正しく設定されていることを確認します。次に、コンピュータのオペレーティングシステムがSibeliusのオーディオを再生するよう設定されているかどうか確認します。次のオペレーティングシステム別の手順を参照してください。

Windows XP:

- [スタート] メニューから [コントロール パネル] を選択してから、[サウンドとオーディオ デバイス] をダブルクリックします。
- 一番上の [オーディオ] タブをクリックしてから、[音量] ボタンをクリックします。
- メインの [ボリューム コントロール] と [MIDI シンセサイザ] / [SW シンセサイザ] の音量が正しく設定されており、[ミュート] が選択されていないことを確認します。

Windows Vista:

- [スタート] メニューから [コントロール パネル] を選択してから、[ハードウェアとサウンド] を選択します。
- [サウンド] 内の [システム音量の調整] を選択します。
- [アプリケーション] 内の [Sibelius] 音量と、メインの [デバイス] 音量が正しく設定されており、[ミュート] が選択されていないことを確認します。

Mac OS X:

- Apple メニューから [システム環境設定] を選択します。
- [サウンド] を選択してから、[出力] タブをクリックします。
- [主音量] が正しく設定されており、[消音] が選択されていないことを確認します。

それでもまだ再生が聞こえない場合、Sibelius が正しく設定されているかどうかを確認します。

- [再生] ▶ [再生デバイス] を選択します。
- [設定] ドロップダウンメニューから [Sibelius Sounds] を選択します。
- 右列の [Sibelius Player] を選択してから、[テスト] ボタンをクリックします。
- 何も聞こえない場合、ダイアログの一番下の [オーディオエンジンのオプション] をクリックします。
- ご使用のインターフェースが選択されている (Windows では、[ASIO] が選択可能な場合はこれを、選択可能でない場合は [主要 サウンドドライバ] を選択します) ことを確認してから、[閉じる] をクリックします。
- 右列の [Sibelius Player] を選択してから、[テスト] ボタンをクリックします。

それでもまだ Sibelius の再生内容が聞こえない場合、テクニカルヘルプまでご連絡ください。

詳しくは、『リファレンス』の  4.12 再生デバイスを参照してください。

1.7 テキストと強弱記号

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア【プロジェクト 1】を開き、【7 テキストと強弱記号】バージョンを【現在のバージョン】にする必要があります。これを行うには、【ファイル】▶【バージョン】▶【バージョンを編集】を選択し、このバージョンをリストから選択してから【現在のバージョンにする】をクリックします。

スコアに記載される音符以外の演奏者への指示は、多くがテキスト形式で記入されています。Sibelius のスコアでは、多くのテキスト（ページ番号、小節番号、楽器名など）が自動的に表示されます。しかし、強弱記号、歌詞、メトロノーム記号、テンポテキストなどのさまざまな記号を自由に追加することができます。テキストによる指示は、そのほとんどが再生に反映されます。Sibelius でスコアを再生すると、作成された強弱記号やテンポ記号などの指示に従って再生されます。

テキストについて

Sibelius で作成されるテキストには、それぞれ独自の「テキストスタイル」があります。テキストスタイルとは、フォント、サイズ、位置、その他の特性を指定するものです。テキストスタイルには、タイトル、歌詞、テンポなど、その内容を示す名前が付けられています。テキストのフォントやサイズを変更する場合、テキストに直接変更を適用することもできますが、テキストスタイルを編集するのが一番です。テキストスタイルを編集すると、スコア内の同じ種類のテキストをまとめて変更することができます（『リファレンス』の [3.9 テキストスタイルの編集](#)を参照）。

テキストを編集する際は、次の点に注意しましょう。

- ごく一部のテキストの属性を変更したい場合は、[プロパティ] ウィンドウの [テキスト] パネルのオプションを使用します。標準設定では、[プロパティ] ウィンドウは表示されていません。これは、このウィンドウを使って設定を行う必要があまりないためです。オンにするには、[ウィンドウ] ▶ [プロパティ]（ショートカットは **Ctrl+Alt+P** または **⌘+P**）を選択します。『リファレンス』の [5.17 プロパティ](#)を参照してください。
- スコア内の特定のテキストのフォントをすべて変更したい場合（タイトル、楽器名、歌詞、テクニックテキストなどのフォントを 1 回の操作で変更したい場合）、[ハウススタイル] ▶ [すべてのフォントを編集] を選択し、新しい [主なテキストフォント] を選択します。
- ある特定のテキストスタイルで入力されたテキストをすべて変更したい場合、テキストスタイルそのものを変更します（[3.9 テキストスタイルの編集](#)）。テキストスタイルを変更すると、既存のテキストも、変更後にそのテキストスタイルで入力した新しいテキストも、すべて自動的に変更されるからです。たとえば、歌詞のフォントを変更したい場合、既存の歌詞を手作業で変更していくのではなく、テキストスタイルを編集します。

歌詞の追加

[Scarborough Fair] スコアのボーカル譜表には歌詞がありません。

それでは、歌詞を追加していきましょう。

- ボーカル譜表の小節 5 をクリックして選択します。
- [作成] ▶ [テキスト] ▶ [歌詞] ▶ [歌詞ライン 1]（ショートカットは **Ctrl+L** または **⌘+L**）を選択します。
- 最初の音符の下に点滅カーソルが表示されます。
- 最初の歌詞ラインをタイプ入力します。

音節の分割位置を指定するには、-（ハイフン）をタイプ入力します。音節が分割され、カーソルが次の音符の位置に移動します。1 つの音節が 2 つ以上の音符にまたがる場合、カーソルが次の音節の

1.7 テキストと強弱記号

入力位置に来るまで、ハイフンを繰り返し入力します（1 音符につき 1 つ）。語と語の間を空けるには、**スペースキー**を押します。入力した単語の最後の音符が 2 つ以上の音符にまたがる場合、カーソルが次の語の入力位置に来るまで、**スペースキー**を繰り返し入力します。メリスマとなる場合、その音符が終了する位置までラインが自動的に追加されます。

次のようになります。



テキストファイルからの歌詞のインポート

歌詞を手動でタイプ入力するのは大変です。特に、音符の分割を行うにはかなりの手間がかかります。Sibelius では、歌詞をテキストファイルとしてインポートし、曲に合わせて音符を自動分割させることができます。[Scarborough Fair] の歌詞を含むテキストファイルは、[プロジェクト ファイル] フォルダにあります。

それでは、歌詞をインポートしてみましょう。

- ボーカル譜表をトリプルクリックし、譜表全体が含まれるようパッセージを選択します。
- [作成] ▶ [テキスト] ▶ [歌詞] ▶ [テキストファイルから] を選択します。
- [参照] をクリックし、[開く] ダイアログを表示させます。Windows の場合、[スコア] というフォルダが表示されます。このフォルダ内に [サンプルスコア] へのショートカットが含まれています。Mac の場合、[Sibelius サンプルスコア] というエイリアスが表示されます。これをダブルクリックして [プロジェクトファイル] フォルダへ進み、[プロジェクト 1 歌詞] というテキストファイルを選択してから [開く] をクリックします。
- [OK] をクリックして歌詞をインポートします（先ほど手動で入力した最初のラインが上書きされます）。

他のプログラム（ワープロソフトなど）から歌詞をコピーしたり、複数番の歌詞を作成したり、外観やフォーマットをコントロールすることもできます（『リファレンス』の 3.3 歌詞を参照）。

強弱記号

「強弱記号」とは、*mp* のようなテキストによる指示と、ヘアピン（*cresc./dim.* を示す V 字のライン）の両方を意味しています。Sibelius でスコアを再生すると、これらの指示が反映されます。強弱記号は、「発想記号」と呼ばれるテキストスタイルで書き込まれます。

曲の先頭にテキストの強弱記号を作成してみましょう。

- クラリネット譜表の最初の音符を選択します。
- [作成] ▶ [テキスト] ▶ [発想記号]（ショートカットは **Ctrl+E** または **⌘E**）を選択します。
- 最初の音符の下に点滅カーソルが表示されます。
- **Ctrl** または **⌘** を押したまま、**F** を押します。**Ctrl** または **⌘** を押したまま文字をタイプ入力すると、強弱記号に使用される特殊な太字で入力されます。右クリック（Windows）または **Control+** クリック（Mac）を押すと、よく使用される記号がメニュー表示されます。このメニューは、「用語メニュー」と呼ばれます。
- **Esc** キーを押し、テキストの作成を終了します。

プロジェクト 1

次のようになります。



このプロジェクトの最初に印刷した [Scarborough Fair] のプリントアウトを参考に、ボーカル譜表、クラリネット譜表、アコースティックギター譜表に残りのテキストを追加していきましょう。このアレンジの強弱記号はすべて、特殊な太字で表示されるよう **Ctrl** または **⌘** を押したまま文字をタイプ入力するか、用語メニューを使って書き込むことができます。

テンポテキスト

テンポテキストは、スコアの先頭と、音楽のテンポが劇的に変化する位置に記入されます。Sibelius でスコアを再生すると、テンポテキストの指示が再生に反映されます。前のセクションでスコアを再生した際、再生スピードが少し遅いことに気づきましたか。気づかなかった場合は、**スペースキー**を押してもう一度聴いてみましょう。

テンポテキストをいくつか追加し、テンポを変更させましょう。

- **Ctrl+Home** または **⌘+⌵** を押してスコアの先頭に戻り、最初の小節を選択してテンポ記号を記入する場所を指定します。
- **[作成] ▶ [テキスト] ▶ [テンポ]** (ショートカットは **Ctrl+Alt+T** または **⌘+⌵+T**) を選択します。
- 音符の上に点滅カーソルが表示されます。この種類のテキストは譜表の上に自動配置されます。
- 右クリック (Windows) または **Control+** クリック (Mac) して、テンポ記号の用語メニューを表示します。
- メニューから **?Allegro?** を選択してクリックします。メニューが消え、スコアに **?Allegro?** の文字が表示されます。
- **Esc** キーを押し、テキストの作成を終了します。

次のようになります。



スコアを先頭まで巻き戻し、**スペースキー**を押してスコアを再生してみましょう。正しいスピードで再生されるよう、[再生] ウィンドウのテンポスライダーが中央に配置されていることを確認してください。

Allegro 記号を削除してから **[作成] ▶ [テキスト] ▶ [テンポ]** を選択し、他のテンポを試してみましょう。Prestissimo や Maestoso を用語メニューから選択し、サウンドがどのように変化するか聴いてみましょう。

テクニックテキスト

テクニックテキストは、楽器のサウンドを変化させるよう、または、特定の演奏テクニックや部品を使用するよう演奏者に指示を出すのに使用します。Sibelius でスコアを再生すると、ミュート、ピッチカート、トレモロ、ディストーション、その他のエフェクトなどが再生に反映されます (反映される程度はご使用の再生機器に依存します)。

1.7 テキストと強弱記号

テクニックテキストは発想記号テキストに似ていますが、譜表の上に表示され、標準設定では斜体では表示されません。テクニック記号を作成するには、**[作成] ▶ [テキスト] ▶ [テクニック]**（ショートカットは **Ctrl+T** または **⌘T**）を選択します。

発想記号、テンポ、テクニックの各テキスト、およびその他のテキストスタイルについて、詳しくは『リファレンス』の **3.2 一般的なテキストスタイル**を参照してください。

既存のテキストの編集

すでにスコア内にあるテキストを編集するには、そのテキストをダブルクリックするか、選択してからメインキーボードの **Return** キーを押します。この方法で楽器名を変更してみましょう。

- 最初の大譜表の先頭にある楽器名 **[ドラムセット]** を選択します。
- テキストをダブルクリックして編集します。
- テキストを削除し、**[ドラムキット]** とタイプ入力します。
- **Esc** キーを 2 回押し、編集を終了してテキストの選択を解除します。

この操作はスコア内のどのテキストにも行えますので、タイトル、歌詞、強弱記号、その他の指示を簡単に変更することができます。

マグネティックレイアウト

編集時、音符の移動に合わせてスコア内のテキストやその他のオブジェクトが移動しているのに気づきましたか。オブジェクトによっては、選択するとオブジェクトの下に影が表示されることもあります。

これは「マグネティックレイアウト」の効果です。マグネティックレイアウトは、Sibelius の画期的な衝突防止および検出機能です。楽譜の作成と編集に合わせて、スコアを自動的にレイアウトしてくれる楽譜作成ソフトは他にはありません。マグネティックレイアウトは、他のオブジェクトと重ならないよう、また、音符が読みにくくならないよう、譜表に置かれたオブジェクトの位置を調節します。

詳しくは、プロジェクト 2 または『リファレンス』の **8.2 マグネティックレイアウト**を参照してください。

プロジェクト 2

2.1 新規スコアの作成

このプロジェクトでは、新規のスコアを作成したり、Sibelius に音楽をスキャンしたり、演奏者に見やすくかつ美しくスコアを表示する方法について説明します。

このプロジェクトの最初のセクションでは、弦楽四重奏用スコアを作成して音符を入力する方法を説明します。楽譜を書き始めるのに必要なものすべてが含まれる「譜面用紙」をすばやく設定する方法について説明します。

印刷されたスコア

弦楽四重奏用スコアの作成を始める前に、作成する音楽の完成版スコアを印刷する必要があります。このプロジェクトでは、印刷したこのスコアを参照しながら進めていきます。[ファイル] ▶ [開く] (ショートカットは **Ctrl+O** または **⌘O**) を選択し、[サンプルスコア] フォルダ内にある [プロジェクトファイル] フォルダの [プロジェクト 2] と名前の付いたサンプルスコアを見つけます。このスコアを開き、ツールバーのバージョンドロップダウンリストから [1 新規スコアの作成] を選択します。

エドワード エルガーの「弦楽四重奏曲ホ短調、作品 83、第三楽章アレグロモルト」からの抜粋の弦楽四重奏のアレンジが表示されます。

[ファイル] ▶ [印刷] (ショートカットは **Ctrl+P** または **⌘P**) を選択し、[OK] (Windows) または [印刷] (Mac) をクリックしてスコアを印刷します。弦楽四重奏曲ホ短調のスコアが印刷されます。印刷されたスコアは、これ以降のアレンジの編集で使用するもので、そのままお手元に置いておいてください。

新規スコアの設定



新規スコアを設定するには、左側に表示されているツールバーのアイコンをクリックするか、[ファイル] ▶ [新規] (ショートカットは **Ctrl+N** または **⌘N**) を選択します。[新規スコア] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、5 つの簡単なステップでスコアを作成できます。

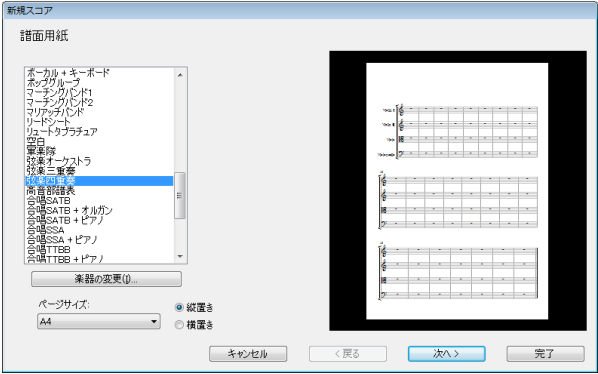
- あらかじめ用意された [譜面用紙] の一覧から楽器を選択するか、独自の楽器編成を作成してから、用紙の大きさと向きを選択します。
- スコアの外観を決定します。一般的なスタイルまたは手書き風のデザインが使用できます。
- スコアの先頭の拍子記号とテンポを設定します。
- スコアの先頭の調号を設定します。
- 最後に、スコアのタイトルや作曲者名などを入力し、必要に応じてタイトルページを作成します。

ステップの途中であっても、[完了] をクリックすれば設定を終了することができます。この段階ですべてを設定しなくてもかまいません。

ダイアログは非常にシンプルで使いやすくなっています。ここでは、各設定をひとつずつ紹介しながら、特定の種類のスコアを設定していきましょう。

譜面用紙

ダイアログの最初のページには、楽器編成の種類がアルファベット順に表示されます。楽器店で実際の譜面用紙を選ぶように、さまざまな形状やサイズ of 用紙を（ダイアログ下部で）選択したり、標準的な楽器グループがすでに印刷されている用紙を選択したりできます。



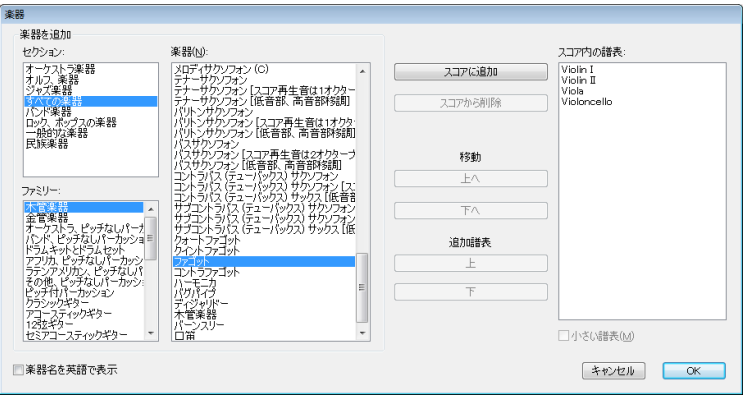
標準的なアンサンブルを書く場合、独自にスコアを定義するのではなく、Sibelius にあらかじめ用意されている譜面用紙を使うとよいでしょう。Sibelius で選択できる譜面用紙には、特殊な楽器名のフォーマットや最適な譜表サイズなどが標準設定としてあらかじめ設定されており便利です。（譜面用紙を独自に設定する方法については後ほど説明します。）

弦楽四重奏用スコアを開始するには **【弦楽四重奏】** 譜面用紙を使うのが最も簡単ですが、ここでは、どのように楽器を追加するかを学ぶために **【空白】** を選択してみましょう。その名が示すとおり、まったく何も無い空白の譜面用紙です。

【次へ】 クリックすると、スコアに楽器を追加するかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。**【はい】** をクリックしましょう。

使用する楽器の追加

新しい楽器はいつでも追加できますので、使用したい楽器をすべて最初に決めておく必要はありませんが、最低でも 1 つの楽器を選んでおかなければ楽譜を書くことができません。



Sibelius には、600 を超える楽器が登録されています。ダイアログ左上にある **【セクション】** リストには、その中から用途に適した楽器が表示されます。標準設定では、約 90 の **一般的な楽器** が表示されます。クイントファゴット、オンドマルトノ、ハーディーガーディーといった特殊な楽器の楽譜を書く場合には、**【すべての楽器】** をクリックすると、登録されているすべての楽器が表示されます。バンド、ジャズ、オーケストラなどの編成の楽譜を書く場合には、それらのアンサンブルで使

2.1 新規スコアの作成

れる標準的な楽器をリストの中から選択します。特に珍しい楽器が見つからなくても心配はありません。Sibelius では、楽器の譜表を独自にデザインすることもできます（『リファレンス』の [図 8.14 楽器の編集](#)を参照）。

楽器は標準的な順序でリストされており、スコアにもその順序で表示されますが、好みに応じてこの順序を変更することもできます。

エルガーの弦楽四重奏ホ短調の抜粋を入力していきますので、バイオリンを 2 つ、ビオラとチェロをそれぞれ 1 つずつ追加する必要があります。【ファミリー】リストから【弦楽器】を選択し、【楽器】リストから【バイオリン（ソロ）】を選択します。その後、【追加】を 2 回クリックして、2 つのソロバイオリン譜表を一番右の【スコア内の譜表】リストに追加します。同じように、【ビオラ（ソロ）】と【チェロ（ソロ）】を追加して、【OK】をクリックします。バイオリンの楽器名が正しくありませんが、これは後で修正できます。

（このダイアログは、【作成】▶【楽器】を選択するか、ワンキー ショートカットの I キーを押すことでいつでも開くことができます。楽器を追加する他にも、スコアから楽器を削除したり、楽器の順番を変更することもできます。）

ハウススタイル

【新規スコア】ダイアログの 2 ページに戻りました。ここでは、作成中のスコアのハウススタイルを設定することができます。ハウススタイルは、スコアの「見た目」や外観と考えるとよいでしょう。ハウススタイルは出版社によって異なります。Sibelius では、使用するフォント、譜表や音符の大きさ、終止線の太さの微調整など、スコアの外観のあらゆる要素を調整することができます。

ここでは詳細を調整する必要はありませんので、リストで【（変更なし）】が選択されている状態のままにしておきます。画面上に表示されている、あらかじめ定義されているハウススタイルを見てみましょう。リストのハウススタイルをクリックすると、スコアのプレビュー表示が更新されます。Opus はこのハウススタイルで使用される音楽フォント（音符とその他の記号のデザイン）を、Times は主に使用されるテキストフォントを表しています。（他のハウススタイルも試してみるとよいでしょう。Reprise と Inkpen2 音楽フォントを使用しているハウススタイルは手書き風で、特にジャズに合います。また、Helsinki 音楽フォントを使用しているハウススタイルは、クラシックな浄書スタイルとなっています。）

主に使用されるテキストフォントを標準設定の【（変更なし）】のままにして、【次へ】をクリックします。

拍子記号とテンポ

ダイアログの 3 番目のページでは、スコアの拍子記号の選択とテンポの設定を行います。



プロジェクト 2

アウフタクト小節を作成したいので、標準設定の [4/4] が選択されたままの状態にしておきます。**[開始する小節の長さ]** をオンにします。16 分音符分のアウフタクト用の小節が必要なので、メニューから 16 分音符を選択します。もちろん、スコアの作成中には、いつでもどこでも拍子やその他の設定を変更することができます。ここでは、先頭の拍子記号だけを設定します。

テンポ記号を追加する必要がありますので、テンポテキストに **[Allegro molto]** と入力し、**[メトロノーム 記号]** をオンにして特定のテンポを追加します。テンポは 1 分あたり 4 分音符で 132 拍ですので、メニューから 4 分音符を選択して **[132]** を入力します。**[次へ]** をクリックします。

調号

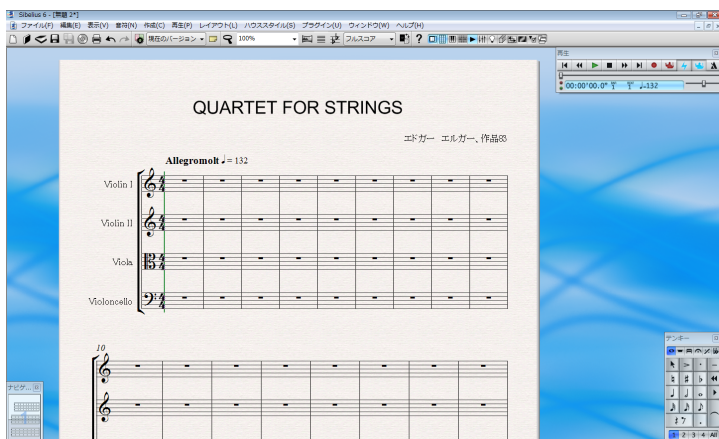
ダイアログの 4 ページ目では、調号を選択します。**[短調]** を選択してから、左側のリストで **[E マイナー]** を選択し、**[次へ]** をクリックします。

スコア情報

ダイアログの最後のページとなる 5 ページ目では、スコアのタイトル、作曲者 / 作詞者の名前、著作権に関する情報などのテキストを入力します。これらのテキストは、楽譜の 1 番目のページに追加されます。また、**[タイトルページを作成]** がオンの場合、別のタイトルページが作成され、タイトルと作曲者名がそこに追加されます。ここでは、このオプションをオフにしておきましょう。タイトルページの追加については後で説明します。

ここでは、**[タイトル]** に **[QUARTET FOR STRINGS]**、**[作曲者]** に **[Edward Elgar, 作品 83]** と入力し、**[完了]** をクリックします。(先に説明したとおり、ステップの途中で **[完了]** をクリックして、残りのステップを省略することもできます。)

すぐさまスコアが作成され、音符を入力するための準備が整いました。



最後に、1 つ目のバイオリン譜表の楽器名 **[Violin]** をダブルクリックして **[Violin I]** に、2 つ目のバイオリン譜表も同じようにダブルクリックして **[Violin II]** に書き換えます。これで完成です。

スコアの保存

ここでスコアを必ず保存しましょう。次のセクションでは、スキャンした音楽をこのスコアに入力していきます。**[ファイル] ▶ [保存]** (ショートカットは **Ctrl+S** または **⌘S**) を選択し、適切な場所 (デスクトップの **[スコア]** フォルダなど) を選択してスコアに **[エルガー]** などの名前を付けたら **[保存]** をクリックします。Windows では、**[スコア]** フォルダは **[マイドキュメント]** フォルダの中にあります。Mac では、**[スコア]** フォルダはログオンしているユーザーアカウントの **[書類]** フォルダにあります。

2.2 スキャニング

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア【プロジェクト2】を開き、【2 スキャニング】バージョンを【現在のバージョン】にする必要があります。これを行うには、【ファイル】▶【バージョン】▶【バージョンを編集】を選択し、このバージョンをリストから選択してから【現在のバージョンにする】をクリックします。

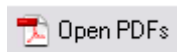
Sibelius には PhotoScore Lite という無償のスキャニングプログラムが付属しています。PhotoScore Lite を使えば、印刷された楽譜をスキャンし、Sibelius に読み込むことができます。印刷された楽譜や PDF ファイルをお持ちの場合、これらをスキャンして Sibelius に読み込ませ、独自に入力したスコアと同じように編集、移調、再生、パート譜の作成、印刷などを行うことができます。

このセクションでは、弦楽四重奏のパート譜を使って、新規スコアから指揮者用のフルスコアを作成する方法について説明します。（このセクションでは PDF ファイルをスキャンしますので、コンピュータに接続されているスキャナをお持ちでない場合も、このセクションを通してお読みいただけます。）

PhotoScore Lite でのスキャニング

先へと進む前に、Sibelius DVD-ROM から PhotoScore Lite がインストールされていることを確認してください。

Sibelius で、【ファイル】▶【PhotoScore でスキャン】を選択するか、ツールバー（右図）の【スキャン】ボタンをクリックして、PhotoScore を起動します。PhotoScore プログラムが起動したら、ツールバーの【Open PDFs】ボタンをクリックします。



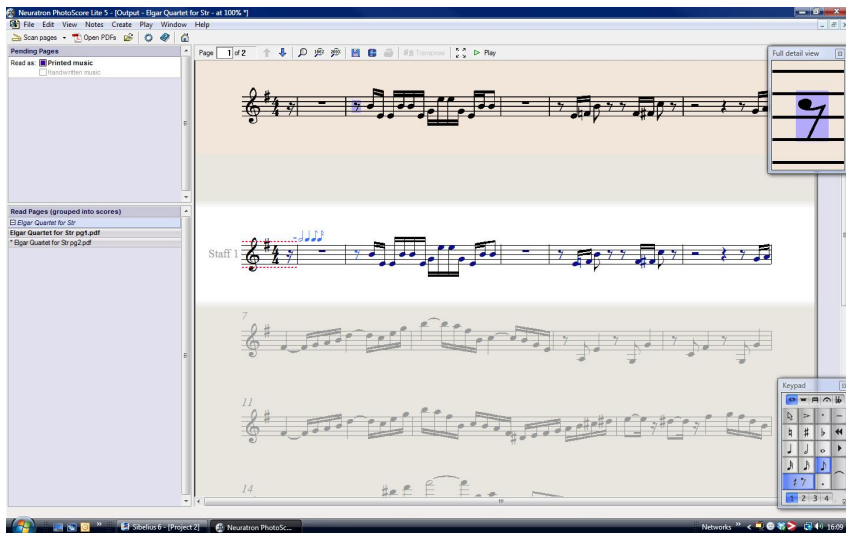
【開く】ダイアログが表示されます。【サンプルスコア】フォルダの【プロジェクトファイル】フォルダで、【弦楽四重奏 - バイオリン I.pdf】ファイルを選択し、【開く】をクリックします。

PhotoScore が PDF ファイルをスキャンし処理する前に、解像度を dpi 単位で選択できます。解像度が高いほど詳細までスキャンすることができますが、処理にはより時間がかかります。解像度のテキストフィールドに【600】を入力し、【OK】をクリックします。

PhotoScore がファイルの処理を開始します。スキャンされたページは自動的に読み込まれ、音符とその他の記号が解読されます。

スキャンした楽譜の編集

PhotoScore を使った楽譜の読み込みが完了すると、バイオリンパートの 1 ページ目の読み込み結果がメインウィンドウに表示されます。PhotoScore Lite による読み取りに間違いがあれば、ここで修正することができます。



ウィンドウ上部（背景が淡黄色の部分）に、ページのスキャン画像が表示されます。右上隅の全詳細表示画面には、マウスポインタが置かれたスキャン画像部分が拡大されて表示されます。

ウィンドウ下部の大きな部分（背景が灰色の部分）には、PhotoScore Lite によるスキャン画像の読み取り結果（楽譜の最初のページに書かれていると PhotoScore が判断したもの）が表示されます。そのため、この部分にはまだ PhotoScore Lite による読み取り間違いが含まれている可能性があります。

PhotoScore Lite の右下隅にはテンキーが、ウィンドウ上部には **【Create】** メニューがあります。どちらも、Sibelius のテンキーと **【作成】** メニューとほぼ同様に機能しますが、PhotoScore Lite に必要でない機能が省かれています。

ウィンドウ上部のスキャン画像と下部の読み取り結果を見比べて、間違いを修正していきましょう。

パート譜の先頭のアウフタクト小節には、譜表の上と下に赤色の点線が付けられています。その後には、小節線の上に青色の音符が並んでおり、足りない拍または多すぎる拍の数を示しています。これは、PhotoScore Lite は拍子記号を 4/4 として読み込んでおり、この小節が 16 分音符分の長さしかいないため、つじつまが合わないことを示しています。

出力ウィンドウの拍子記号を選択し（選択すると薄い青色に変化します）、**【Create】** ▶ **【Time Signature】**（ショートカットは **T**）を選択して、別の拍子記号を選択します。**【その他】** をクリックし、ドロップダウンリストから **【1/16】** を選択します。**【Invisible (for pick-up and irregular bars)】** がオンであることを確認します。こうすると、拍子記号が PhotoScore に表示されません。

残りの小節が赤色に変化し、小節線の上に青色の音符が表示されます。これを修正するには、最初の完全小節の先頭に 2 つ目の拍子記号を追加します。

- **T** を押して拍子記号を作成し、**【4/4】** を選択します。**【Invisible (for pick-up and irregular bars)】** がオフになっていることを確認してから、**【OK】** をクリックします。
- マウスポインタが濃い青色に変化し、オブジェクトを入力できる状態であることが示されます。

2.2 スキャンニング

- 最初の完全小節の先頭をクリックして拍子記号を配置すると、赤色の点線が消えます。

音高などは Sibelius でも修正できますが、調号と拍子記号の修正は PhotoScore Lite で行う方がはるかに簡単ですので、スコアを Sibelius に送信する前にここで修正しておくことをおすすめします。

PhotoScore の出力の編集について、詳しくは『リファレンス』の  1.5 スキャンニングを参照してください。

Sibelius への送信

スコアのすべてのページの編集が完了したら、スコアを Sibelius に送信します。[File] ▶ [Send to] ▶ [Sibelius] (ショートカットは **Ctrl+D** または **⌘D**) を選択するか、出力ウィンドウ上部の [Save score] ボタンの隣にある Sibelius アイコンをクリックします。

[PhotoScore/AudioScore ファイルを開く] ダイアログが Sibelius に表示されます。ここではオプションを操作しないで、[OK] をクリックしてファイルを開きます。バイオリンのパート譜が Sibelius の新規スコア内に表示されます。これを、このプロジェクトの先のセクションで準備したスコアに転送します。

- PhotoScore Lite からインポートしたバイオリンのパート譜の最初の小節をトリプルクリックし、この譜表のすべての音楽を選択します。
- [編集] ▶ [コピー] (ショートカットは **Ctrl+C** または **⌘C**) を選択し、楽譜をクリップボードにコピーします。
- [ウィンドウ] メニューから選択して、先に準備して置いたスコアに切り換えるか、**Ctrl+Tab** (Windows) または **⌘`** (Mac) を入力します。
- [Violin I] 譜表のアウトタクト小節の 16 分休符を選択します。
- [編集] ▶ [貼り付け] (ショートカットは **Ctrl+V** または **⌘V**) を選択し、インポートされたスコアから準備したスコアへ楽譜を貼り付けます。

適切な臨時記号、スラー、タイをすべて含む楽譜がスコアに挿入されます。小節がスコアに自動追加され、コピーした楽譜に埋められます。PhotoScore により音符の上のスラーが短縮されていますが、これは後で修正しますので、今は気にしなくてもかまいません。

残りの楽譜の追加

それでは、PhotoScore Lite を使って、残りの弦楽器パートをスキャンして読み込み、Sibelius に送信しましょう。[弦楽四重奏 - バイオリン II.pdf]、[弦楽四重奏 - ビオラ .pdf]、[弦楽四重奏 - チェロ .pdf] の3つです。これらの PDF ファイルは、先にスキャンしたパート譜と同じフォルダに保存されています。

[Violin I] 譜表での操作と同じように、Sibelius に送信したら、あらかじめ用意しておいたスコア内の適切な譜表にコピー & ペーストします。

バージョンの保存

ここで、[ファイル] ▶ [バージョンを保存] を選択するか、対応するツールバーボタンをクリックします。バージョン名を付けるかどうか、また後で見分けやすいようコメントを追加するかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。このバージョンに [バージョン 1 - スキャン済み入力] などの分かりやすい名前を付けたら、[OK] をクリックします。

このバージョンは、後でスコアやバージョンをすばやく比較する方法を説明する際に使用します。

2.3 音部記号、調号、連音符

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア [プロジェクト 2] を開き、[3 音部記号、調号、連音符] バージョンを [現在のバージョン] にする必要があります。これを行うには、[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択し、このバージョンをリストから選択してから [現在のバージョンにする] をクリックします。

先のセクションで作成したスコアをアレンジしていきましょう。[新規スコア] ダイアログを使ってスコアを設定する方法についてはすでに説明しましたが、スコアに音楽を入力した後に情報を追加し、スコアを後から変更することができます。このセクションでは、音部記号、調号、連音符（ここでは 3 連符）の変更を既存のスコアに追加する方法について説明します。

音部記号の変更

Sibelius でスコアを作成すると、大譜表の先頭に音部記号が自動的に追加されるため、音部記号について意識する必要はありません。しかし、状況によっては、音部記号の変更を譜表に追加したい場合があります。通常の音部記号で表示される譜表から上下に音符が大きく離れて記譜される場合などは、音部記号の変更を挿入すると、演奏者にとって読みやすくなります。音部記号の変更は、短いパッセージ（1 小節程度）に使用する場合や、挿入位置以降ずっとその音符記号を使用する場合もあります。

チェロのパート譜の小節 15 を見ると、小節の後半部分に非常に高い音符が 2 つ（A $\flat$ と G の 8 分音符）あります。これらの音符の前に音部記号の変更を加えて、チェロの演奏者にとって読みやすい楽譜になるようにしましょう。

- A $\flat$ の 8 分音符を選択します。
- G の 8 分音符のすぐ後を **Shift+** クリックしてパッセージを選択します。
- [作成] ▶ [音部記号]（ショートカットは **Q**）を選択します。
- 左側のリストからテノール記号（上から 4 つ目の記号）を選択し、[OK] をクリックします。
- 小さなテノール記号が追加されます。また、選択されているパッセージ以降は、元の音部記号に戻ります。音部記号のためのスペースを確保するために、音符が離れて配置されます。

小節 26 に、テノール記号への変更をもう 1 つ加えましょう。今度は、マウスを使って操作します。

- **Esc** キーを押し、何も選択されていない状態であることを確認します。
- [作成] ▶ [音部記号] を選択します。
- 左側のリストからテノール記号を選択し、[OK] をクリックします。
- マウスポインタが濃い青色に変化し、オブジェクトを入力できる状態であることが示されます。
- [Violoncello] 譜表の小節 26 の先頭の空白部分をクリックします。
- 小さなテノール記号が追加されますが、ここでは前の大譜表の小節 25 の最後に追加されます。各大譜表の先端にある標準の音部記号は、これ以降テノール記号に変わります。

同じように、小節 28 の最初の 4 分音符の後で譜表をバス記号に戻します。フルアレンジの印刷されたスコアを参考に、[Viola] 譜表と [Violoncello] 譜表の小節 43-44 に対して残りの音部記号の変更を行います。

詳しくは、『リファレンス』の  2.11 音部記号を参照してください。

2.3 音部記号、調号、連音符

調号

この抜粋の最後に近づくにつれて、調が A メジャーへと 転調しているのに気づきましたか。音符にシャープの臨時記号がたくさん付けられています。小節 53 に調号を追加し、転調を表示しましょう。

- **Esc** キーを押し、何も選択されていない状態であることを確認します。
- **[作成] ▶ [調号]** (ショートカットは **K**) を選択します。
- 左側のリストから A メジャーを選択し、**[OK]** をクリックします。
- マウスポインタが濃い青色に変化し、オブジェクトを入力できる状態であることが示されます。
- 小節 53 の先頭をクリックします。
- 複縦線と 3 つのシャープによる調号が作成されます。新しい調号によって無用となったそれ以降の小節のシャープ臨時記号は自動的に削除されます。

音部記号変更と調号は、選択、コピー、削除、移動することができます。音部記号変更または調号をドラッグすると、ドラッグ前とドラッグ後で同じ音で鳴るよう、移動に合わせて音符が上下にずれ、臨時記号が削除または追加されます。

詳しくは、『リファレンス』の  2.20 調号を参照してください。

3 連符とその他の連音符

連音符とは、音符を一定の割合で分割して演奏することで、最も一般的なのは 3 連符です。スキャンしたパート譜にない 3 連符を、[Violin II] 譜表の小節 30 に作成しましょう。

- 小節休符を選択し、**3** (テンキー) を押して 8 分音符を選択します。
- **8 G Shift-6** を入力します (テンキーではなくメインキーボードの **6** を使います)。G# の 8 分音符と、その 6 度下に音符が入力され、二和音が作成されます。(譜表の下に B を入力し、**8** (テンキー) と **G** を入力してシャープを選択し、B の上に G を追加することもできます。)
- **Ctrl+3** または **⌘3** を入力すると、3 連符の括弧と番号が表示されます。



- 残りの 2 つの音符 (第 4 間の E と別の G#) を入力して、3 連符を完成させます。

括弧が自動的に消え、この場合の標準的な記譜法で表記されます。



Sibelius では、連音符の括弧は、連音符内の音符が連桁でつながると自動的に非表示となります。また、連音符の括弧は (表示されている場合) 「マグネティック」となり、連音符の音高が変わると音符にくっつきます。

この小節の残りの音符を追加しましょう。**Ctrl** または **⌘** キーと共に連音符の任意の数字を入力できます。たとえば **5** を入力すると 5 連符、**6** を入力すると 6 連符になります。73:51 といったさらに複雑な連音譜を作成するには、**[作成] ▶ [連音符]** ダイアログを使用します。詳しくは、『リファレンス』の  2.35 3 連符とその他の連音符を参照してください。

2.4 スコアへの記号の追加

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア【プロジェクト 2】を開き、【4 スコアへの記号の追加】バージョンを【現在のバージョン】にする必要があります。これを行うには、【ファイル】▶【バージョン】▶【バージョンを編集】を選択し、このバージョンをリストから選択してから【現在のバージョンにする】をクリックします。

ここまでの過程で、空のスコアを作成し、PDF ファイルからパート譜をスキャンしスコアへとコピーして、エルガーの「弦楽四重奏曲ホ短調、作品 83、第三楽章アレグロ モルト」からの抜粋を作成しました。ここに、強弱記号、テクニクテキスト、テンポ記号、スラー、アーティキュレーションなどの記号を追加して、精彩を加えていきましょう。

このセクションでは、さまざまな記号を追加する方法と、それらの記号に Sibelius の革新的な衝突防止システム「マグネティックレイアウト™」がどのように作用するのかについて説明します。

発想記号テキスト

この『ハンドブック』の最初のプロジェクトでは、強弱記号、テクニク、テンポ記号の各テキストを追加する方法について説明しました。先に印刷したスコアを使って、強弱記号テキストを追加していきましょう。前回同様、以下のように行います。

- 【作成】▶【テキスト】▶【発想記号】（ショートカットは **Ctrl+E** または **⌘E**）を選択して強弱記号テキストを追加します。
- **Ctrl** または **⌘** キーを押したまま入力すると、*f*、*p*、*sf*、*rfz* などの強弱記号の太字テキストが作成されます。**Ctrl** または **⌘** キーを押したままにすることで、強弱記号用の特殊な太字文字が使用されます。
- 右クリック（Windows）または **Control** + クリック（Mac）すると、使用されることの多い強弱記号の用語メニューが表示されます（*espress.*、*dolce*、*poco*、*cresc.*、*dim.*などはここに表示されます）。
- 用語メニューに表示されない用語（*risoluto*、*rubato*、*brillante*、*appassionato* など）は、Sibelius 上で直接入力すると、標準の斜体テキストで表示されます。

強弱記号テキストをある譜表から別の譜表へとコピーすると、スコアのマークアップ処理が簡単になります。この『ハンドブック』の最初のプロジェクトで説明したコピー方法すべてを使用できます。最も簡単な方法は、コピーしたいテキストを選択してから、表示させたい場所を **Alt** + クリックまたは **⌘** + クリックする方法です。マウスポインタが置かれている位置ではなく、その標準設定位置（音符が選択されている状態でテキストオブジェクトを作成すると表示される場所）にテキストオブジェクトをコピーしたい場合は、**Shift+Alt** + クリックまたは **⇧⌘** + クリックを使用します。

オブジェクトの複数コピー

スコア内のすべての譜表に同じ強弱記号がある場合（小節 43 の先頭のフォルテッシモ、小節 53 のスフォルツァンドなど）、強弱記号をすべての譜表にわたって複数コピーすることで作業時間を短縮できます。

- 【Violin I】譜表に（上記同様）発想記号テキストを使って強弱記号を作成します。
- 強弱記号を選択し、【編集】▶【コピー】（ショートカットは **Ctrl+C** または **⌘C**）を選択して強弱記号をクリップボードへコピーします。
- **Esc** を押して選択を解除します。
- 残りの 3 つの譜表の同じ小節の周辺にパッセージを選択します。

2.4 スコアへの記号の追加

- **【編集】 ▶ 【貼り付け】**（ショートカットは **Ctrl+V** または **⌘V**）を選択し、パッセージの先頭へ譜表ごとに貼り付けます。

いくつかのオブジェクトを複数コピーし、いくつかの譜表にわたって同時に貼り付けることもできます。こうすることにより、スコアへの記号の追加の作業時間を大幅に短縮できます。

テクニックテキスト

強弱記号テキストをすべて追加できたら、テクニックテキストを追加していきましょう。

- **【作成】 ▶ 【テキスト】 ▶ 【テクニック】**（ショートカットは **Ctrl+T** または **⌘T**）を選択してテクニックテキストを追加します。
- 右クリック（Windows）または **Control+** クリック（Mac）すると、使用されることの多いテクニックテキストの用語メニューが表示されます（*senza sord.* などはここに表示されます）。
- 用語メニューに表示されない用語（*colla parte* や *ten.* など）は、Sibelius 上で直接入力すると、標準の斜体テキストで表示されます。

テンポテキスト

テクニックテキストをスコアにすべて追加できたら、テンポ記号を追加しましょう。その前に、譜表テキストと大譜表テキストの違いを理解しておく必要があります。

発想記号テキストとテクニックテキストのスタイルは、どちらも譜表テキストです。譜表テキストは単一の譜表にのみ適用されます。同様の効果をスコア内の他の楽器にも適用させたい場合、そのテキストを別の譜表にも複製する必要があります。

それに対して、大譜表テキストはスコア内のすべての譜表に適用されます。テンポ記号は大譜表テキストです。テンポテキストをスコアに追加すると、大譜表の上に1回だけ表記されます（楽器がたくさん含まれているスコアでは、スコア内のずっと下の別の譜表の上に表示されることもあります）が、楽器のパート譜それぞれに適用されます。

それでは、テンポ記号を追加しましょう。まず、**[A tempo]** を小節7に追加します。

- **[Violin I]** 譜表の小節7を選択します。
- **【作成】 ▶ 【テキスト】 ▶ 【テンポ】**（ショートカットは **Ctrl+Alt+T** または **⌘⇧T**）を選択してテンポ記号を追加します。
- 右クリック（Windows）または **Control+** クリック（Mac）すると、テンポ記号の用語メニューが表示されます。
- **A tempo** をクリックし、スコアに追加します。
- **Esc** キーを2回押し、編集を終了してテキストの選択を解除します。

同様に、**[A tempo]** 記号を小節20、56、60に追加します。

ヘアピンと他のライン

印刷されたスコアにある、まだスコアに追加していない強弱記号とテンポ記号があります。ヘアピン（クレッシェンドとディミヌエンド）、スラー、リタルダンドを示すさまざまなラインです。

ラインを追加するには、スコアで音符または他のオブジェクトを選択し、ラインの開始位置を指定してから **L**（または **【作成】 ▶ 【ライン】**）を入力して使用可能なラインのダイアログを開きます。

プロジェクト 2

記号の追加を行っている抜粋に、ヘアピンとスラーを作成していきましょう。それぞれショートカットを使用できます。クレッシェンドのヘアピンには **H**、ディミヌエンドのヘアピンには **Shift+H**、スラーには **S** を使用します。

[Violin I] 譜表の抜粋の 2 番目の完全小節にクレッシェンドのヘアピンを追加しましょう。

- [Violin I] 譜表の（アウフタクト小節の後の）2 番目の小節の 2 番目の音符を選択します。
- **H** キーを押して、音符の下にクレッシェンドのヘアピンを追加します。
- **スペース** キーを 4 回押し、小節の中央の E の 16 分音符までヘアピンを伸ばします（一度押すごとに 1 音符分だけヘアピンが伸びます）。伸ばしすぎた場合は、**Shift+スペース** を押すと縮みます。



- ここで、同じ小節の 9 番目の音符（と E の 16 分音符）を選択し、小節の最後の音符を **Shift+** クリックして、選択範囲を小節の最後まで伸ばします。
- **Shift+H** を押してディミヌエンドを追加します。選択範囲に合わせて作成されます。こうすることで作業時間を短縮できます。



スコアの残りの部分にもヘアピンを追加していきましょう。強弱記号で行った方法で、ヘアピンを複数の譜表へ複数コピーすることができます。

テンポラインを追加しましょう。

- [Violin I] 譜表の小節 19 を、小節の空白部分をクリックして選択します。
- **L** を押して [ライン] ダイアログを開きます。
- [大譜表ライン] の右側のリストをスクロールダウンし、[poco rit.] を表示させます。
- 2 つ目の [poco rit.] を選択します。（このラインではテキストの後に長さを示す点線が表示されません。）
- [OK] をクリックして、ラインを小節 19 に追加します。

同じように [poco rit.] を小節 59 に加えますが、今回は、小節中央あたりの 8 分音符（クエーヴァー）を選択し、**L** を押します。

最後に、rit. を抜粋の最後の小節に追加します。前回同様、テキストの後に長さを示す点線が表示されないよう [大譜表ライン] リストの 2 つ目の [rit.] を選択します。

ラインについて、詳しくは『リファレンス』の 2.21 ラインを参照してください。

スラー

スラーとフレーズマークは、ヘアピンと同じように特殊な種類のラインです。頻繁に使用されるため、覚えやすいショートカット **S** が用意されています。Sibelius では、どちらも「スラー」と呼びます。フレーズマークは、実質的に大きなスラーとして描画されるためです。

2.4 スコアへの記号の追加

弦楽四重奏のパート譜の PDF ファイルをスキャンする際、PhotoScore Lite ではパート譜のスラーが認識されません（フルバージョンの PhotoScore Ultimate を使用すると認識されます）。そのため、認識されなかったスラーを追加する必要があります。

スラーを配置するには、スラーを開始させたい音符を選択し、**S** を押します。間違った位置にスラーを作成してしまった場合は、スラーを選択して **Delete** キーを押し、スラーを開始させたい音符または休符を選択してから **S** を押します。ヘアピンを伸ばすときと同じように、**スペースキー**を押すとスラーが伸び（一度押すごとに 1 音符分だけ伸びます）、**Shift+ スペースキー**を押すと縮みます。

スラーのどちらかの端にある音符を選択して、上下に移動させてみてください。スラーは、磁石でつながっているかのように音符の片方の端にくっついています。スラーを選択すると、6 つのボックスからなる細い枠がスラーの周りに表示されます。ハンドルと呼ばれるこれらのボックスを使えば、スラーの形状を詳細にコントロールすることができます。ドラッグすると、特定の方向に向かって形状を変化させることができます。

タイとスラーを混同しないよう十分に注意しましょう。タイはスコア内の音符と音符の間に置かれ、テンキーを使って追加します（下を参照）。また、タイの操作はスラーの操作とは大きく異なります。

スラーについて、詳しくは『リファレンス』の  2.28 スラーを参照してください。

アーティキュレーション

この『ハンドブック』の最初のプロジェクトでは、スタッカート、テヌート、アクセント、タイなどのアーティキュレーションをテンキーを使って音符に追加する方法を説明しました。**F10** を押す（またはテンキーの **[アーティキュレーション]** タブをクリック）すると、テンキーの第 4 レイアウトのアーティキュレーションが表示されます。ここでは、楔、運弓マーク、マルカート、スタッカーティシモ、さまざまな長さのフェルマータを追加することができます。

複数の音符やパッセージにアーティキュレーションを追加することができます。こうすることで、記号を記入する作業時間を大幅に短縮できます。たとえば、**[Violin I]** と **[Violin II]** 譜表の小節内のすべての音符はスタッカートで演奏されます。

- **[Violin I]** 譜表の小節 3 の空白部分をクリックし、**[Violin II]** 譜表の小節 3 を **Shift+** クリックしてパッセージを選択します。
- **F7** を押し、テンキーの第 1 レイアウトが表示されていることを確認します。
- テンキーの最上列の **.**（スタッカート）に対応するキーを押します。これで、両譜表の小節内のすべての音符にスタッカートが追加されます。

残りのアーティキュレーションを追加していきましょう。追加する必要があるアーティキュレーションのほとんどはテンキーの第 1 レイアウトに表示されていますが、以下の記号はテンキーの第 4 レイアウトを使用する必要があります。

- **[Violin I]** 譜表の小節 8 および 38 のマルカート
- **[Violin II]** 譜表の小節 20、22、29、40 のマルカート
- **[Viola]** 譜表の小節 9、10、21、23、40、49-52 のマルカート
- **[Violoncello]** 譜表の小節 49-52 のマルカート
- すべての譜表の小節 48 のスタッカーティシモ
- **[Violin II]** 譜表の小節 49 のスタッカーティシモ

アーティキュレーションについて、詳しくは『リファレンス』の  2.3 アーティキュレーションを参照してください。

バージョンの比較

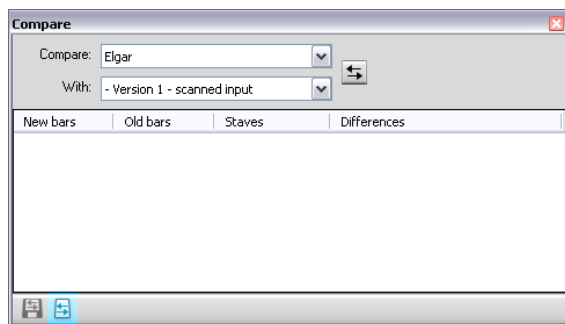
作曲者、編曲者、浄書者にとって、新たに記号を追加したバージョンと記号を追加する前のバージョンのスコアを比較することができれば非常に便利です。Sibelius の [比較] ウィンドウでは、2 つのスコア（または同じスコアの 2 つのバージョン）を比較し、相違点の概要を作成することができます。好みに応じて、すべての相違点を詳しく比較することもできます。校正や、楽譜作成の過程を記録するのに非常に便利です。

[比較] ウィンドウを表示するには、[ウィンドウ] ▶ [比較] を選択するか、ツールバーのボタン（右図）をクリックします。



[比較] ウィンドウ最上部には 2 つのドロップダウンメニューがあり、スコアとスコアに含まれるバージョンを選択できます。現在の状態と以前保存した状態とでスコアを比較してみましょう。

- 1 番目のドロップダウンメニューから、スコアのタイトル（[エルガー] など保存した際に付けた名前）を選択します（これが現在のバージョンのスコアと比較されます）。
- 2 番目のドロップダウンメニューから、[バージョン 1 - スキャン済み入力]（バージョンを保存した際に付けた名前）を選択します。



（前のセクションをとばしてプロジェクトファイルをこの時点で開いた場合、2 番目のリストに [3 音部記号、調号、連音符] バージョンを選択する必要があります。）

- ドロップダウンメニューの隣の [比較] ボタン（) をクリックします。
- バージョンが分析され、スコアの相違点を簡単にまとめたダイアログが表示されます。
- [閉じる] をクリックすると、[比較] ウィンドウに詳細な相違点が表示されます。

2 つのバージョンは、比較しやすいよう並んで表示されます。[比較] ウィンドウに表示された相違点のいずれかをダブルクリックすると、両方のウィンドウにその相違点が表示されるよう表示位置が移動します。また、オブジェクトの背景がその状態に応じて色づけされ、追加されているものは緑色、移動されているものは赤色、変更されているものはオレンジ色で表示されます。

プロジェクトスコア内の異なるバージョンを比較し、相違点がどれほど詳細に表示されるかを確認してみましょう。

このパワフルなツールを使えば、ご使用のワープロソフトで開くことのできる、スクリーンショットやスコアを用いた詳細なレポートを作成することができます。バージョンとスコアの比較について、詳しくは『リファレンス』の  5.22 バージョンを参照してください。

2.5 レイアウトとフォーマット

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア [プロジェクト 2] を開き、[5 レイアウトとフォーマット] バージョンを [現在のバージョン] にする必要があります。これを行うには、[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択し、このバージョンをリストから選択してから [現在のバージョンにする] をクリックします。

スコアに音符を入力し、記号を記入できたら、楽譜が問題なく表示されるよう調整します。Sibelius では、楽譜、楽器、テキスト、その他のオブジェクトが追加されるとスコアが自動調整されるため、スコアがほぼ完成の状態になってから行うとよいでしょう。さもないと、せっかくの調整をやり直すことになります。

Sibelius に搭載されている衝突防止および検出機能「マグネティックレイアウト」の効果については少し説明しました。楽譜の作成と編集集中にスコアを自動調整してくれる機能です。Sibelius には、楽譜のフォーマットを調整することのできるさまざまなツールと機能が搭載されています。フォーマットとは、ページに楽譜をレイアウト する処理のことをいいます。

このセクションでは、ブレイクを作成したり、ページの向き、譜表サイズ、譜表の間隔を変更したり、タイトルページを作成し、美しく洗練されたスコアを作成する方法について説明します。

マグネティックレイアウト

まず、音符の重なりや分かりにくさを解消するために、どのようにマグネティックレイアウトが機能し、譜表上のオブジェクトの位置が再計算されるのかを見てみましょう。次の手順で行います。

- [Violoncello] 譜表の最初の完全小節の最後にある F# の 16 分音符を選択します。
- ↓ キーを使って音高を下げます。
- 音高を下げると、譜表下の強弱記号が下に移動し、音符との衝突が避けられます。

強弱記号全体がまとめて大譜表の下に移動し、水平方向の相対位置が維持されます。強弱記号（ヘアピンなど）のいずれかをクリックして選択すると、強弱記号がグループにまとめられていることを示す薄い青色の点線が表示されます。これは、衝突を避けるため強弱記号のいずれかを移動させる必要がある場合、強弱記号すべてがまとめて移動されることを示しています。灰色のシャドー付の強弱記号は、その強弱記号が通常置かれる位置に大譜表全体にわたって表示されます。

これは、すべてのテキストオブジェクト、記号、ライン、その他のオブジェクト（コード記号など）でも同様です。

譜表上のオブジェクトをドラッグすると、オブジェクトが重なり合わないよう、使用可能な空きスペースが利用されます。この場合、重要なオブジェクト（音符、臨時記号、休符、アーティキュレーションなど）は、あまり重要でないオブジェクト（テキスト、ライン、記号など）に優先して配置されます。重要なオブジェクトの位置が維持され、譜表により近い部分に表示されます。

また、オブジェクトごとにマグネティックレイアウトのオンとオフを切り換えることができるため、レイアウトが完了したら、それ以降マグネティックレイアウトにより移動することがないようにオブジェクトの位置をスコア内で固定することができます。詳しくは、『リファレンス』の  8.2 マグネティックレイアウトを参照してください。

それではここで、Sibelius で使用可能なフォーマットの操作について見ていきましょう。

ブレーク

作曲、アレンジ、楽譜の複写など、いずれの作業においても、すでに書き終えた楽譜に小節を付け加えるなど、後から変更を加えたい場合があります。Sibelius では、このような場合にも、楽譜が即座に再フォーマットされます。

自動再フォーマットの利点は、大譜表やページを新たに追加する必要がないことです。変更に合わせて、自動的に再フォーマットが行われます。

しかし、場合によっては、特定の位置で大譜表やページが終わるよう調整する必要があることもあります。たとえば、エルガーの弦楽四重奏の抜粋の小節 7 にある **A tempo** は、そこに改行が追加されているため、新しい大譜表の先頭に記入されています。

改行を挿入するには、小節線を選択して **[レイアウト]** ▶ **[ブレイク]** ▶ **[改行]** を選択するか、ショートカットの **Return** キー（メインキーボード）を押します。ある大譜表が混み合っているように感じられたら、このようにして間隔を空けます。逆に、前の大譜表に比べて間隔が空きすぎているように感じられたら、前の大譜表に改行を挿入して、前の大譜表の小節の 1 つを次の大譜表に移動させます。スコアに改行を挿入してみてください。

Sibelius では改ページを挿入することもできます。通常、改ページは、セクションの最後（複数の楽章を含む楽曲など）や、次のセクションの先頭に新しいタイトルがある場合にのみ使用されます。改ページについて、および、パッセージが再フォーマットされないよう「ロック」する方法について、詳しくは『リファレンス』の  **8.1 レイアウトとフォーマット** を参照してください。パート譜では、改行や改ページを便利な位置に自動挿入させることもできます（『リファレンス』の  **8.4 自動レイアウト** を参照）。

ドキュメントセットアップ

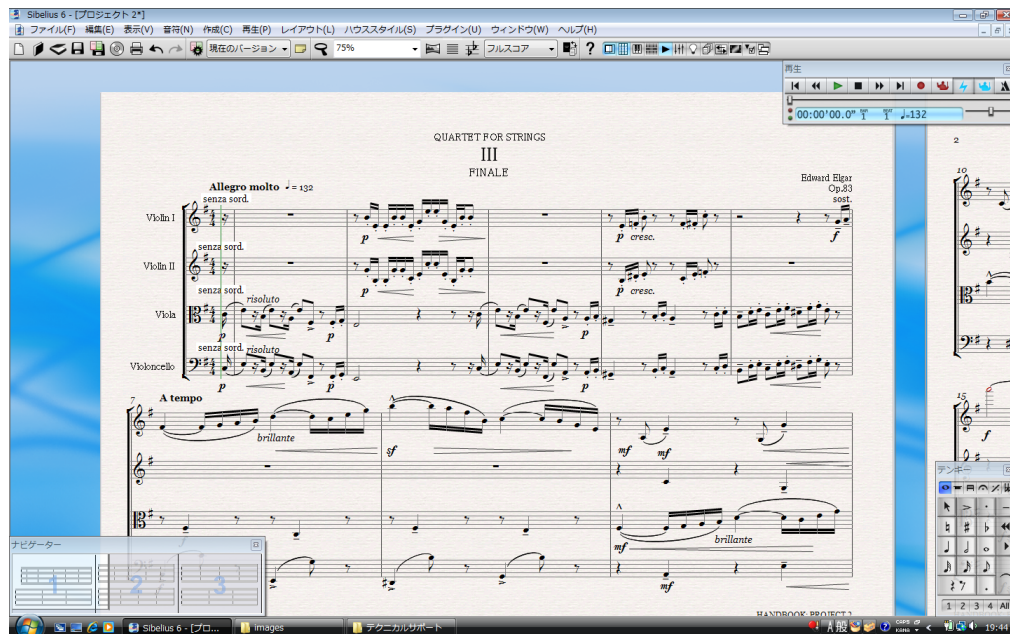
自動再フォーマットのもうひとつの利点は、すでに入力した楽譜に対して、用紙の変更などの大きな変更を加えることができることです。加えられた変更に合わせて、スコア全体のレイアウトが即時に更新されます。

この種類の再フォーマットでしばしば行われる例として、スコアの用紙の向きを縦置きから横置きに変更してみましょう。[レイアウト] ▶ [ドキュメントセットアップ] (ショートカットは **Ctrl+D** または **⌘D**) を選択します。



2.5 レイアウトとフォーマット

用紙の向きを[縦置き]から[横置き]に変更し、ダイアログの右のスコアプレビューで変更内容を確認してから[OK]をクリックします。スコアはこのように表示されます。



[譜表サイズ] オプションを [4mm] に変更してみましょう。楽譜がより少ないページ数に収まるようになります。

ここで用紙サイズと余白を調整することもできます。このダイアログについて、詳しくは『リファレンス』の 8.6 ドキュメントセットアップを参照してください。

譜表の間隔

スコアに音楽を追加していくと、ページが混み合ってきますので、音符やその他のオブジェクトがうまく配置されるよう、譜表の間隔を広げる必要があります。譜表の間隔は、いろいろな方法で広げることができます。それではスコアで試してみましょう。

譜表や大譜表の間隔の標準設定は、[ハウススタイル] ▶ [記譜ルール] ダイアログで設定できます。このダイアログでは、スコアの外観に関するほとんどの要素を変更できます。各ページに目を通し、どのようなオプションが用意されているのかを大まかに把握しておきましょう。さまざまなオプションがありますが、必ずしも操作する必要があるものばかりではありません。しかし、[譜表] ページの譜表と大譜表の間隔オプションについては、スコアに直接個別の調整を行う前に、まずこのオプションを調整するようにしましょう。

場合によっては、大譜表内の譜表の間隔を広げることで、高音と低音の音符の衝突を避けることができます。[レイアウト] ▶ [譜表の間隔を最適化] を選択すると、設定されている間隔に合わせて、譜表と大譜表の間隔が自動的に最適化されます。譜表上のオブジェクトが別の譜表のオブジェクトと衝突しない程度の最小間隔が計算され、譜表が移動されます。それでは、スコアの最初のページで試してみましょう。

- [Violin I] 譜表のアウトタクト小節をクリックして選択します。
- 最初のページ一番下の大譜表にある [Violoncello] 譜表を **Shift+** クリックします。
- [レイアウト] ▶ [譜表の間隔を最適化] を選択します。

- ある譜表のオブジェクトが他の譜表のオブジェクトと衝突しないよう、最良の方法が試みられます。

最終手段として、大譜表内の譜表をドラッグして、大譜表内の衝突を手動で解決しなければならない場合もあります。次を試してみてください。[Violin II] 譜表の空白部分をクリックして小節を選択してから上下にドラッグするか、**Alt+↑/↓** または **⇧↑/⇧↓** のショートカットを使用します（大きなステップで移動させるには **Ctrl** または **⌘** を押したまま操作します）。譜表の動きに合わせて、楽譜が再フォーマットされます。

この方法で行えば、スコア全体、ひとつの行（段）、あるいは選択されている複数行（段）に対して譜表の間隔を変更することができます。間違えた場合は、[レイアウト] ▶ [譜表上部スペースをリセット] / [譜表下部スペースをリセット] オプションを使えば標準設定の間隔にリセットできます。

譜表の間隔について、および、譜表の間隔を変更するためのその他のツールについて、詳しくは『リファレンス』の  8.10 譜表間隔を参照してください。

タイトルページの作成

[ファイル] ▶ [新規] ダイアログの最後のページにある [タイトルページを作成] をオンにすると、スコアを作成する際（このプロジェクトの最初の章で行ったように）にタイトルページを作成できます。

タイトルページはいつでも作成できます。それでは作成してみましょう。[作成] ▶ [タイトルページ] を選択すると、ダイアログが表示されます。ダイアログでは、スコアの前頭に追加される空白ページの数と、他の追加事項を選択できます。（[ファイル] ▶ [新規] ダイアログでタイトルと作曲者名を追加しているため、これらの項目は [タイトルページ] ダイアログに自動的に挿入されます。）

[パート名を含める] オプションをオンにしてページの前頭に [フルスコア] と表示されるようにしてから [OK] をクリックすると、タイトル名と作曲者名が追加されたタイトルページ（1 ページ）が作成されます。

タイトルページの削除



[作成] ▶ [タイトルページ] を選択するか、[ファイル] ▶ [新規] ダイアログから追加してタイトルページを作成すると、スコアの前頭に特殊なレイアウト記号（左図）が表示されます。表示されない場合は、[表示] ▶ [レイアウト記号] がオンになっているかどうか確認してください。

作成したタイトルページを削除するには、レイアウト記号をクリックして選択してから **Delete** キーを押します。（この操作を行うと、スコアの前頭からすべての空白ページが削除されます。空白ページを 1 ページだけ削除したい場合の操作については、『リファレンス』の  8.5 括弧を参照してください。）

Sibelius の他の編集機能と同じく、タイトルページになされた変更はすべて元に戻すことができます。[元に戻す] をクリックしてみましょう。たった今削除したタイトルページが復元されます。

2.6 ダイナミックパート

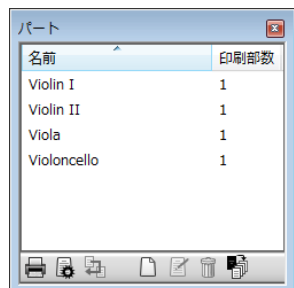
プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア【プロジェクト2】を開き、[6 ダイナミックパート] バージョンを【現在のバージョン】にする必要があります。これを行うには、[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択し、このバージョンをリストから選択してから【現在のバージョンにする】をクリックします。

最初のプロジェクトでは、ダイナミックパートについて説明しました。ダイナミックパートとは、各スコアに対して作成される楽器のパート譜のことで、1つの楽器に関連する記譜が表示され、フルスコアと一致するよう自動更新されます。フルスコアになされた編集や移動はすべてパート譜に反映されます。しかし、パート譜で音符やコード以外のものを移動しても、スコアには反映されません。移動した部分はオレンジ色に変化し、パート譜とスコアで異なることを示します。このため、スコアのレイアウトに影響を与えずに、パート譜の中で記号の位置を微調整することができます。

このセクションでは、キューを作成したり、パート譜のレイアウトを編集したり、新しい楽器のパート譜を作成したり、弦楽四重奏アレンジのピアノリダクションを作成する方法について説明します。

パートウィンドウ

[パート] ウィンドウ ([ウィンドウ] ▶ [パート]) を選択、ショートカットは **Ctrl+Alt+R** または **⌘+R** では、個別のパート譜、すべてのパート譜、または指定の複数のパート譜に対してさまざまな変更を行うことができます。[パート] ウィンドウでは、複数のパート譜の印刷、パート譜の自動レイアウトの調整、新しいパート譜の作成、パート譜中の譜表の削除や追加などが行えます。[パート] ウィンドウ内のパート譜をダブルクリックしてパート譜を表示することもできます。



通常の作業では、[パート] ウィンドウの存在をあまり意識する必要はなく、[パート] ウィンドウを表示しないままで問題ありません。しかし、パート譜の自動レイアウトの調整や、またはパート譜に2つ以上の楽器を含ませる必要がある場合（楽器のダブリングや合唱曲など）の処理に使用すると非常に便利です。詳しくは、『リファレンス』の **7. パート** を参照してください。

キュー

キュー音符は、演奏者が音符の位置を把握できるように記入される小さい音符で、実際には演奏されません。また、キューのパスセージは代用の楽器を示すためにも使用されます。たとえば、ハーモニカのソロをキューサイズでクラリネットのパート譜に含め、「ハーモニカのない場合は演奏」と指示することができます。

Sibelius では、パート譜にキューを簡単に加えることができます。それではやってみましょう。

- フルスコアが表示されていることを確認します。
- [Violin I] 譜表の小節 8 を、譜表の空の部分をクリックして選択します。

- **[編集] ▶ [コピー]** (ショートカットは **Ctrl+C** または **⌘C**) を選択し、楽譜をクリップボードにコピーします。
- **[Violin II]** 譜表の対応する空の小節を選択します。
- **[編集] ▶ [キューとして貼り付け]** (ショートカットは **Ctrl+Shift+Alt+V** または **⌘⇧⌘V**) を選択し、キューを作成します。

W キーを押すと、**[Violin II]** のパート譜が表示されます。**Esc** キーを押すと、キューの選択が解除され、小さなキューサイズの音符とその他の記号が作成されます。また、別個の声部に小節休符が追加され (フルスコアではキューは非表示となります)、譜表の上にキューが付けられた楽器が示されます。必要に応じて、自動音部記号の変更やオクターブの移調が追加され、譜表タイプ (ギタータブ譜) が変更され、歌詞がコピーされます。

W をもう一度押すとフルスコアに戻ります。**[Violin II]** 譜表の同じ小節は、キューが非表示になっているため、空として表示されます。

パート譜のレイアウト

一般的に、スコアを編集する場合には、まずパート譜ではなくフルスコアを作成し、その後、最終調整の過程で、パート譜中のさまざまなオブジェクトの位置やデザインを微調整します。

しかし、譜表を移動する、改行や改ページを調節する、音符の間隔を変えるとといったレイアウトの変更は、それぞれのパート譜で自由に行うことができます。これらの変更はオブジェクトの移動とは見なされません。スコアとパート譜でレイアウトが非常に異なったとしても問題にはならないためです。

Sibelius では、自動レイアウト機能を使って、パート譜を自動的にレイアウトすることができます。演奏者に便利な位置での改ページや、テンポ変更あるいはセクションの区切り場所での改行、基本的なオブジェクトの適切な配置などが、適切に処理されます。自動レイアウト機能は、**[レイアウト] ▶ [自動ブレイク]** から実行できます。また、自動レイアウトを適用させるレイアウト項目と適用させないレイアウト項目を任意に選択することもできます。自動レイアウトをまったく使用したくない場合は、すべてのレイアウト項目をオフにします。

詳しくは、『リファレンス』の  **8.4 自動ブレイク** を参照してください。

新規パートの作成

さまざまな楽器に合わせて楽譜を再アレンジする必要がある場合、既存の楽譜から新規パート譜を作成すれば、時間を大幅に短縮することができます。ここでは、チェロ譜表からファゴットのパート譜を作成してみましょう。**[パート]** ウィンドウが開いていることを確認してから、次の手順で行います。

- まず、パートウィンドウの **[新規パート]** ボタン () をクリックします。
- 表示されるダイアログで、新しいパート譜が含まれる譜表を選択します。
- 左側のリストから **[チェロ]** を選択し、**[パートに追加]** をクリックしてから **[OK]** をクリックします。
- **[チェロ]** と名前の付いた 2 つ目のパート譜がパートウィンドウに表示されます。このパート譜をダブルクリックして開きます。

これをファゴットのパート譜に変えるには、楽器の変更を追加する必要があります。楽器の変更は、スコアの一部に追加して楽器のダブリングを行ったり、楽譜はそのまま楽器を別の楽器へと交換するのに使用できます。

- **[作成] ▶ [その他] ▶ [楽器の変更]** (ショートカットは **Ctrl+Shift+Alt+I** または **⌘⇧⌘I**) を選択します。

- **[次から選択]** リストには、(**[作成]** ▶ **[楽器]** ダイアログと同じように) 適する楽器すべてが一覧表示されます。**[一般的な楽器]** を選択してから、**[木管楽器]** ファミリーの**[ファゴット]** を選択して **[OK]** をクリックします。
- マウスポインタが濃い青色に変化し、オブジェクトを入力できる状態であることが示されます。
- 最初の小節線の左側 (パート譜の楽譜の最初の大譜表が始まる直前) をクリックします。

パート譜がファゴットのパート譜に自動的に変化します。ページの左上隅に表示される楽器名と、パートウィンドウのパート名が更新されます。

ピアノリダクション (要約) の作成

Sibelius には、100 を超える便利なプラグイン (Sibelius の内蔵プログラム言語「ManuScript」で記述された特別機能) が付属しています。プラグインを使えば、普通なら非常に時間のかかる作業が自動で行われるため、繰り返しの多い作業をすばやく処理することができます。コード記号の追加、ハーモニーの追加、ハーブペダル変更の処理、楽譜の校正など、あらゆる種類の手順が自動化されています。また、独自のプラグインを記述することも可能です。

これらのプラグインの 1 つを使用して、エルガーの抜粋のピアノリダクションを作成してみましょう。

- **W** を押し、フルスコアを表示します。
- **[作成]** ▶ **[楽器]** (ショートカットは **I**) を選択し、**[ピアノ]** 楽器をスコアに追加します。
- **[Violin I]** 譜表をトリプルクリックして譜表全体をパッセージとして選択してから、**[Violin II]** 譜表を **Shift+** クリックして両譜表のすべての小節を選択します。
- **[プラグイン]** ▶ **[作曲ツール]** ▶ **[リダクション]** を選択します。
- 表示されるダイアログで、**[既存の譜表を移動先に使用]** を選択し、ドロップダウンリストから **[ピアノ]** を選択します。
- **[OK]** をクリックすると、**[リダクション]** プラグインにより、2 つのバイオリン譜表が右手用ピアノ譜表へと要約されます。
- **[Viola]** 譜表をトリプルクリックして譜表全体をパッセージとして選択してから、**[Violoncello]** 譜表を **Shift+** クリックして両譜表のすべての小節を選択します。
- **[プラグイン]** ▶ **[作曲ツール]** ▶ **[リダクション]** を再び選択します。
- 今回は、ダイアログのドロップダウンリストから **[ピアノ ~ (2)]** を選択します。
- **[OK]** をクリックすると、**[リダクション]** プラグインにより、**[Viola]** 譜表と **[Violoncello]** 譜表が左手用ピアノ譜表へと要約されます。

これまでに学んだスキルを使ってピアノのパート譜を修正したり、**[プラグイン]** ▶ **[記譜の簡略化]** ▶ **[パフォーマンスを再表記]** を使用してパッセージを修正してみてもよいでしょう。

両方のピアノ譜表を含む新規の **[Piano]** パート譜が作成されていることに注目してください。

2.7 エクスポート

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア **【プロジェクト 2】** を開き、**【7 エクスポート】** バージョンを **【現在のバージョン】** にする必要があります。これを行うには、**【ファイル】** ▶ **【バージョン】** ▶ **【バージョンを編集】** を選択し、このバージョンをリストから選択してから **【現在のバージョンにする】** をクリックします。

Sibelius では、ファイル、スコアのページ、ページ中の一部分を、PDF またはさまざまなグラフィックフォーマットでエクスポートすることができます。Sibelius からグラフィックを直接コピー & ペーストすることもできます。また、Sibelius では、他の人々が Sibelius の Scorch プラグインを使ってインターネット上で楽譜を閲覧、再生、移調、楽器変更、印刷できるよう、インターネットでの楽譜出版用に準備することもできます。

このセクションでは、Sibelius から別のプログラム（Microsoft Word など）へグラフィックをコピーしたり、SibeliusMusic.com に楽譜を出版する方法について説明します。

他のプログラムへのグラフィックのコピー

それでは、コピー & ペーストを使って音楽の断片をグラフィックとしてエクスポートする方法を説明します。

- 楽譜の最初の大譜表全体が含まれるようパッセージを選択します。
- **【編集】** ▶ **【選択】** ▶ **【グラフィックを選択】**（ショートカットは **Alt+G** または **⌘G**）を選択します。音楽の周りに、ハンドルの付いた点線の枠が表示されます。
- 必要に応じて、枠端のハンドルをドラッグして選択範囲を調節します。
- **【編集】** ▶ **【コピー】**（ショートカットは **Ctrl+C** または **⌘C**）を選択し、枠内の内容をクリップボードにコピーします。
- **Esc** キーを押して選択を解除します。
- ペースト先のアプリケーションソフト（Microsoft Word など）を開きます。
- **【編集】** ▶ **【貼り付け】**（ショートカットは **Ctrl+V** または **⌘V**）を選択します。

これで完了です。貼り付けたグラフィックが思ったより鮮明でなかった場合は、**【ファイル】** ▶ **【環境設定】**（Mac では **【Sibelius】** メニュー）の **【その他】** ページで **【画像解像度 (dpi)】** の設定を変更してから上記の操作をやり直してみてください。

Sibelius では、EPS、PNG、TIFF、BMP、EMF（Windows のみ）、PICT（Mac のみ）フォーマットのファイルとしてグラフィックをエクスポートすることができます。詳しくは、『リファレンス』の  **9.8** グラフィックのエクスポートを参照してください。

SibeliusMusic.com への楽譜出版

スコアが完成したら、保存されていることを確認します。それでは完成したスコアをオンライン出版してみましょう。

- **【ファイル】** ▶ **【SibeliusMusic.com に出版】** を選択します。
- ブラウザに表示されるウェブページに、スコアに関する情報を入力します。ユーザー名とパスワードを入力するか、アカウントを作成する必要がある場合があります（下を参照）。
- スコアに関する情報が入力できたら、**【Next】** をクリックします。
- 24 時間以内に、スコアが SibeliusMusic.com ウェブサイト上に表示されます。

2.7 エクスポート

SibeliusMusic.com のアカウントをお持ちでない場合、ウェブページ左上の **[Join]** をクリックしてアカウントを作成します。

SibeliusMusic.com では、スコアの販売、演奏録音データファイルのアップロードと再生、個人ページの作成、掲載されているスコアへの批評の投稿、ベストセラーリストの閲覧、独自のオンラインストアの作成なども行えます。詳しくは、『リファレンス』の  **5.19 SibeliusMusic.com** を参照してください。

プロジェクト 3

3.1 キーボードの楽譜

このプロジェクトでは、ジャズや商業音楽の作曲に便利な、いくつかの重要な機能について説明します。複雑なキーボード用の曲の入力、ギター用の記譜、[アイデア] ウィンドウを使った楽譜の断片の保存と再利用、テキストと MIDI 入力を使ったコード記号の作成、リピートの使用とホーンアレンジの作成、オーディオ録音に備えてスコアのサウンドをよりリアルにする方法などについて説明します。

このプロジェクトの最初のセクションでは、この『ハンドブック』のプロジェクト 1 で説明した音符の入力方法に基づいて進められます。Sibelius のフレキシタイム入力を使用して MIDI キーボードでより複雑な鍵盤音楽を入力する方法について説明します。

印刷されたスコア

はじめに、[ファイル] ▶ [開く] (ショートカットは **Ctrl+O** または **⌘O**) を選択し、[サンプルスコア] フォルダ内にある [プロジェクトファイル] フォルダの [プロジェクト 3] と名前の付いたサンプルスコアを見つけます。このスコアを開きます。「Urbane Filigree」と名前の付いたファンクチューンの完全なアレンジが表示されます。

このプロジェクトを通してこのアレンジのプリントアウトが必要となりますので、[ファイル] ▶ [印刷] (ショートカットは **Ctrl+P** または **⌘P**) を選択し、[OK] (Windows) または [印刷] (Mac) をクリックしてスコアを印刷します。

「Urbane Filigree」が印刷されます。印刷されたスコアは、これ以降のアレンジの編集で使用するもので、そのままお手元に置いておいてください。

[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択してから、リストから **[1 キーボードの楽譜]** バージョンを **[現在のバージョンにする]** を選択します。[はい] をクリックしてこれを現在のバージョンにしてから、[閉じる] をクリックします。[Electric Stage Piano] と [Electric Guitar] のパート譜にない楽譜アレンジが表示されます。

MIDI キーボードを使う

フレキシタイムを使用するには、ご使用のコンピュータに接続されている MIDI デバイスが必要です。Sibelius での入力と再生を設定するには、[ファイル] ▶ [環境設定] (Mac では [Sibelius] メニュー) を選択し、[入力デバイス] ページに進みます。

このセクションでは、MIDI キーボードを使用します。MIDI デバイスの入力と再生を設定する方法について、詳しくは『リファレンス』の  1.10 入力デバイスを参照してください。

フレキシタイムのオプション

ここでは、フレキシタイム入力を使用して、MIDI キーボードを使って複雑な楽曲を Sibelius で再生する方法について説明します。Sibelius にリアルタイムで音楽を録音したくない場合は、この『ハンドブック』のプロジェクト 1 で説明したでステップタイム入力を使用して音楽を入力することができます。MIDI キーボードをお持ちでない場合、97 ページの 3.2 ギターの楽譜に進んでください。

[Electric Stage Piano] パート譜の欠けている部分を録音していきましょう。最良の結果が得られるよう、[音符] ▶ [フレキシタイムのオプション] (ショートカットは **Ctrl+Shift+O** または **⌘⇧O**) を選択します。[テンポの柔軟性] ドロップダウンリストから **[なし (ルパートなし)]** を選択し、**[複数の声部に入力]** チェックボックスをオフにします。[OK] をクリックしてスコアに戻ります。録音しやすいようテンポを落としたい場合は、[再生] ウィンドウのテンポスライダーを左端へドラッグします。

両手によるフレキシタイム入力

[Electric Stage Piano] 譜表の楽譜がはっきりと読める位置にプリントアウトを置きます（プリントアウトの譜表の上のコード記号の後に続けて独自のパートを即興で演奏してもかまいません）。その後、スコア内の隣り合う 2 つの [Electric Stage Piano] 譜表の最初の小節を選択します。上の譜表をクリックしてから、下の譜表を **Shift+** クリックして両方の譜表を選択します。こうして、どこからどの楽器へ録音するのかを指定します。次のように行います。

- [再生] ウィンドウの赤色のボタンをクリックするか、[音符] ▶ [フレキシタイム]（ショートカットは **Ctrl+Shift+F** または **⌘⌘F**）を選択します。
- フレキシタイムでは、標準設定では少なくとも 1 小節分のカウントインが挿入されます。ですので、この場合は 1 小節と 3 拍分のカウントインがアウフタクト小節の前に挿入されます。
- カウントが終わったら、クリックのスピードに合わせて次の 2、3 小節分をスムーズに弾いてみましょう。演奏するに従い、画面に音符が表示されていきます。
- 上の譜表の小節 9 に到達したら、右手の演奏を止めます。
- 小節 17 で、[Electric Stage Piano] パート譜の右手の演奏を再開します。
- 録音を停止するには、[再生] ウィンドウの四角い停止ボタンをクリックするか、**スペースキー**または **Esc** キーを押します。

フレキシタイム入力の録音について、詳しくは『リファレンス』の  1.4 フレキシタイム™を参照してください。

記譜の簡略化プラグイン

フレキシタイムによる記譜が複雑すぎると感じる場合、記譜を単純化するには、以下の 2 つのプラグインが便利です。

- [プラグイン] ▶ [記譜の簡略化] ▶ [分割点の変更] では、キーボード譜表の右手と左手の譜表の間で音符が分割される位置を変更することができます。録音された入力にパッセージがあり、音符が別の譜表にある方が都合がよい場合は、両方の譜表の楽譜を選択してプラグインを実行します。
- [プラグイン] ▶ [記譜の簡略化] ▶ [パフォーマンスの再表記] では、必要のない休符、重複している音符、正確でない音符の長さを修正することができます。プロジェクト 1 で行ったように、両方の譜表でパッセージを選択してプラグインを実行することにより、フレキシタイム採譜を再計算し、リズムと見た目においてより簡単なバージョンを作成することができます。

間違いがあったら、これまでに学んできた編集テクニックを使って、音価や音高を修正しましょう。また、[プラグイン] ▶ [記譜の簡略化] メニューから他のプラグインを試してみることもできます。

プラグインについて、詳しくは『リファレンス』の  6. プラグインを参照してください。

3.2 ギターの楽譜

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア [プロジェクト 3] を開き、[2 ギター用の記譜] バージョンを [現在のバージョン] にする必要があります。これを行うには、[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択し、このバージョンをリストから選択してから [現在のバージョンにする] をクリックします。

Sibelius には、ギターの記譜が簡単に行えるようデザインされた数多くのツールと機能が搭載されています。そのひとつが、ギターのタブ譜を使用した記譜機能です。Sibelius には、タブ譜を使った記譜が可能な種類の弦楽器すべての情報が含まれており、一般的なギター、4/5/6 弦のベースギター、リュート、バスバラライカなど、楽器の種類に関わらず、記譜する楽器の正確な弦の数と適切なチューニングが表示されます。音符譜表からギタータブ譜表へ（またはその逆）とコピーすることができます。また、大譜表の途中で標準的な音符譜表からタブ譜表へと変更することもできます。

このセクションでは、標準的な記譜譜表として楽譜を Sibelius に記録してギタータブ譜へと変更したり、ギタータブを入力する方法について説明します。

(MIDI ギターをお持ちの場合、Sibelius への音符の入力に MIDI ギターを使用して、このセクションを進めてください。その他の場合、MIDI キーボードか、プロジェクト 1 で学んだアルファベット入力方法を使用することができます。)

MIDI ギターを使用する

このセクションで使用するコンピュータに接続されている MIDI ギター（またはディバイデッド・ピックアップとギター MIDI インターフェイス搭載のギター）をお持ちの場合、Sibelius での入力と再生を設定する必要があります。これを行うには、[ファイル] ▶ [環境設定] (Mac では [Sibelius] メニュー) を選択し、[入力デバイス] ページに進みます。

ページ最上部の表からご使用のデバイスの名前を探し、[使用] チェックボックスがオンになっていることを確認します。ドロップダウンリストメニューをクリックして [タイプ] 値を変更し、([キーボード] ではなく) [ギター] を選択してから、弦の数を選択する必要があります。

MIDI ギターの入力と再生を設定する方法について、詳しくは『リファレンス』の 1.10 入力デバイスを参照してください。

ギターパートの入力

印刷したスコアを参照しながら、楽譜を入力していきます。

ご使用のコンピュータに接続されている MIDI デバイスをお持ちの場合、フレキシタイム入力を使って小節 20 までのギターパートを記録します。譜表の最初の小節を選択し、[音符] ▶ [フレキシタイム入力] (ショートカットは **Ctrl+Shift+F** または **⌘⇧F**) を選択するか、[再生] ウィンドウの赤色のボタンをクリックします。

その他の場合、任意の音符入力の方法（マウス入力、アルファベット入力、ステップタイム入力、[キーボード] ウィンドウ、[フレットボード] ウィンドウ）を使用して、小節 20 までの楽譜を入力します。これらは、オンとオフを切り換える必要のある記譜モードではありません。入力方法はいつでも変更することができます。

ギターのパートを入力できたら、ミュートされている符頭（クロス符頭）を使用するために音符と和音を変更する必要があります。これを行うには、音符または和音（和音をダブルクリックするとその和音に含まれるすべての音符が選択できます）を選択し、**Shift+Alt+1** または **⌘⇧1** のショート

プロジェクト 3

カットを入力して符頭をクロス符頭に変更します。符頭の変更については、このプロジェクトでさらに説明しています。また、『リファレンス』の  2.25 符頭を参照してください。

タブ譜への変換

Sibelius では、楽器の変更を使って通常の楽譜をタブ譜へと簡単に変換することができます。

- [作成] ▶ [その他] ▶ [楽器の変更] (ショートカットは **Ctrl+Shift+Alt+I** または **⌘⇧⌘I**) を選択します。
- [セクション] リストから [一般的な楽器] を選びます。
- [ギター] ファミリーから [エレキギター、スタンダードチューニング [タブ]] を選択し、[OK] をクリックします。
- マウスポインタが濃い青色に変化し、オブジェクトを入力できる状態であることが示されます。
- 最初の大譜表の先頭の [Electric Guitar] 譜表の最初の小節線の左をクリックします。

音符譜表が 6 弦のタブ譜表に自動的に変更され、すべての楽譜がタブ譜に変わります。**Alt+** クリックまたは **⌘+** クリックを使用して、楽譜とこのタブ譜の間でコピーすることができます。Sibelius では、コピーされた楽譜が譜表タイプに合う記譜に変換されます。

タブ譜の記譜

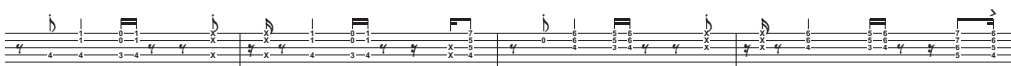
Sibelius で通常の音符譜表をタブ譜表に変換する方法について説明しました。ここでは、一から楽譜を入力してみましょう。

- ギター譜表の小節 21 の小節休符を選択します。
- **N**を押して音符の入力を開始します。テンキーの第1レイアウトが表示されていることを確認します (**F7** を押して確認します)。
- [**3 0**] を (テンキーで) タイプ入力し、8 分休符を入力します。
- **↑**キーを 1 回押し、第 4 弦へと移動して [**4**] を (今度はメインキーボードで) タイプ入力します。
- テンキーからスタッカートのアーティキュレーションを追加します。
- **→**キーをタイプ入力して次の位置へと進んでから、[**4**] を (テンキーで) タイプ入力して 4 分音符へ変更します。
- **↑**キーを 2 回押し、第 2 弦へと移動して [**1**] を (今度はメインキーボードで) タイプ入力します。
- 第 1 弦へと移動し、[**1**] をもう一度タイプ入力します。

次のように表示されます。



ここで、最後の 4 小節の覚え書きをタブ譜として入力します。次のように表示されます。



ギター譜表を通常の音符譜表へと戻してみましょう。楽器の変更を使用して、譜表を [エレキギター [記譜]] に戻します。

3.3 アイデアとドラムの楽譜

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア [プロジェクト 3] を開き、[3 アイデアとドラムの記譜] バージョンを [現在のバージョン] にする必要があります。これを行うには、[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択し、このバージョンをリストから選択してから [現在のバージョンにする] をクリックします。

このセクションでは、Sibelius の最も強力なクリエイティブツールである [アイデア] ウィンドウについて説明します。このウィンドウでは、「アイデア」と呼ばれる任意の長さの音楽の断片を保存し、後で検索して再使用できます。後で見つけやすくなるよう、アイデアごとに「タグ」(キーワード) を付けることができます。

Sibelius では、独自のクリエイティビティを簡単にキャプチャすることができるだけでなく、さまざまな楽器と音楽ジャンルを網羅した 1500 以上の内蔵のアイデアを活用することができます。インスピレーションや創造力を刺激する斬新な楽想を求めたりするときにぴったりのアイデアがすぐに見つかることでしょう。

ここまでキーボードとギター用の記譜を説明しましたが、このセクションでは、ドラム用の記譜方法について説明します。パーカッションの記譜を簡単にする [アイデア] ウィンドウを使用すれば、作業時間を大幅に短縮することができます。

ドラム譜表のスコアへの追加

これまで作業してきたスコアにはドラム譜表がありません。それではドラム譜表を加えていきましょう。

- [作成] ▶ [楽器] を選択するか、ショートカット I を押します。
- [セクション] リストから [一般的な楽器] を選択します。
- [パーカッションとドラム] ファミリーを選択してから、[ドラムセット (ロック)] を選択します。
- [スコアに追加] をクリックすると、[スコア内の譜表] リストに [ドラムセット (ロック)] が表示されます。これをクリックして選択します。
- [下へ] ボタンを使用して、[ドラムセット (ロック)] が [5 弦ベースギター] と [シンセサイザー] の間になるよう、順序を変更します。
- [OK] をクリックしてスコアに戻ります。

スコアに追加されたパーカッション譜表が表示され、ドラムパートを記譜することができます。

ドラムのアイデアの試聴

[ウィンドウ] ▶ [アイデア] (ショートカットは **Ctrl+Alt+I** または **⌘+I**) を選択して、[アイデア] ウィンドウを表示します。[アイデア] ウィンドウには、簡略表示と詳細表示の 2 つの表示方法があります。標準設定では簡略表示で開かれ、次のように表示されます。



[ライブラリー]、[スコア]、および [すべて] の間で切り替えてみてください。[ライブラリー] ボタンをオンにすると、あらかじめ用意されている 2000 以上ものアイデアにアクセスできます。リストを上下にスクロールしてみてください。

それぞれのアイデアには、楽譜やその他のオブジェクトの小さなプレビューが表示されます。通常、1 つの譜表の 2、3 小節分が表示されます (しかし、アイデアに含まれる小節や楽器の数には制限はありません)。重要なタグは表記プレビューの周囲の四隅に表示されます。左上にはアイデアの名前、右上には [L] の文字 (アイデアが現在のスコアでなくライブラリにある場合)、左下にはアイデアの拍子記号、右下にはアイデアのテンポがそれぞれ表示されます。

アイデアを聴くには、マウスボタンを押したままにします。マウスボタンを放すまで、アイデアがループ (繰り返し) 再生されます。

ウィンドウ上部にさまざまなタグをタイプ入力して、特定のスタイルやジャンルのアイデアを検索することができます。こうすれば、アイデアのリストから適切なアイデアをすばやく絞り込むことができます。

いくつかタグをタイプ入力し、幅広いスタイルとジャンルのアイデアがどれほど豊富に用意されているかどうか確認してみましょう。[**motown**]、[**funk**]、[**happy**]、[**melody**]、[**slow**] を入力します。ここで、作成したスコアに適したアイデアをいくつか使用してみましょう。ウィンドウ上部に入力したタグをクリアし、[スコア] ボタンをクリックします。リストの最上部近くに [**Urbane Funky Drum Loop 1**] が表示されています。

アイデアの貼り付け

それでは、このアイデアを使用してみましょう。まず、[アイデア] ウィンドウの [**Urbane Funky Drum Loop 1**] を選択します。このアイデアが枠で囲まれ、選択されていることが分かります。**Ctrl+C** または **⌘+C** を押すか、ウィンドウの下部の [**コピー**] ボタンを押し、これをクリップボードにコピーします。(右クリック (Windows) または **Control+** クリック (Mac) して、表示されたコンテキストメニューから [**コピー**] を選択することもできます。)

アイデアをスコアに貼り付ける作業は、他の種類の貼り付け作業と同じ方法で行います。アイデアを表示したい位置をスコア内で選択してから [**編集**] ▶ [**貼り付け**] (ショートカットは **Ctrl+V** または **⌘+V**) を選択するか、何も選択されていないことを確認してから [**編集**] ▶ [**貼り付け**] を選択し、アイデアを貼り付けたいスコア内の位置をクリックします。また、[アイデア] ウィンドウの一番下に

3.3 アイデアとドラムの楽譜

ある【貼り付け】 ボタンをクリックすることもできます。スコアの [Drum Set] 譜表の最初の完全小節を選択し、**Ctrl+V** または **⌘V** を押して貼り付けます。

貼り付けたアイデアは、印刷されたスコアのドラム譜表の（アウフタクト小節に続く）最初の 4 小節に一致しています。

同じ方法で [Urbane Funky Drums 2] アイデアを小節 5 に貼り付け、次の小節を追加することができます。

ドラム記譜の入力

パーカッション譜表へ入力する際は、これまでに学んだどの音符入力方法を使ってもかまいませんが、ドラムの記譜（異なる種類の符頭を使用します）には、ステップタイム入力やフレキシタイム入力を使うと、より入力が簡単になります。

ご使用のコンピュータに接続されている MIDI キーボードをお持ちの場合、（高音部譜表の）譜表上のラインまたはスペースに対応している音符を再生すると、自動的に正しい符頭が選択されます。（接続されている MIDI キーボードをお持ちでない場合、アルファベット入力を使用して音符を入力し、下の符頭の変更を参照して手動で変更します。）

小節 6 にドラムパターンを入力していきましょう。

- 小節 6 の小節休符を選択し、**N** を押して音符入力を開始します。
- テンキーの **3** を押し、8 分音符を選択します。
- MIDI キーボードで、譜表上の **G** を再生します。この音高は、クローズドハイハットに対応しています。
- 符頭がクロス符頭になります。



- 他 3 つの 8 分音符のハイハットを入力します。
- テンキーの **2** を押し、16 分音符を選択します。
- MIDI キーボードで **G** を 2 回再生し、16 分音符のハイハットを 2 つ入力します。

この方法で、小節内に残りのハイハットを入力していきます。オープンハイハットを示す○記号を追加するには、**F10** を押してテンキーの第 4 レイアウトを選択してから、（テンキーの）**[.]** を押します。この **[.]** キーは、**[ハーモニック / オープン]** ボタンに対応しています。**[.]** キーをもう一度押すと、○記号が削除されます。音符の入力を続ける前には、**F7** を押してテンキーの第 1 レイアウトに戻すことを忘れないようにしましょう。

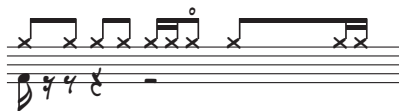
Sibelius では、4 つの個別の声部、つまり 4 パート分の音符または和音をひとつの譜表に書き込むことができます。声部はそれぞれ色分けされています。声部 1（これまで使用してきたもの）は濃い青、声部 2 は緑、声部 3 はオレンジ、声部 4 はピンクです。2 つ以上の声部を同時に使用する必要はほとんどありません。

バスドラムとスネアの符尾は常に下向きに、ハイハットは上向きになるよう、バスドラムとスネアのパターンを加えるために、声部 2 を使用します。

- まず、**Esc** キーを押し、何も選択されていない状態であることを確認します。
- 次に、**Alt+2** または **⇧2** を入力して声部を切り替えるか、テンキー最下部のボタン列の **[2]** をクリックします。

プロジェクト 3

- テンキーの **[2]** をクリックして 16 分音符を選択します。
- マウスポインタが緑色に変化し、声部 2 へオブジェクトを入力できる状態であることが示されます。
- 次に、小節 6 の先頭の F の位置（譜表上の一番下のスペース）にマウスポインタを置いてクリックします。



前回と同じように MIDI キーボードを使用して、小節 6 にバスドラムとスネアドラムのパターンを追加します。

声部について、詳しくは『リファレンス』の [図 2.36 声部](#) を参照してください。

符頭の変更

アルファベット入力を使用してパーカッション譜表に音符を入力する場合、Sibelius では符頭が自動的に変更されます。それでは、今度はコンピュータのキーボードを使用して同じパターンを小節 7 に入力してみましょう。

- 小節 7 の小節休符を選択し、**N** を押して音符入力を開始します。
- テンキーの **3** を押し、8 分音符を選択します。
- コンピュータのキーボードで **G** を入力します。譜表の上になるよう確認しましょう。
- **R** を押して、他 3 つの 8 分音符を入力します。
- テンキーの **2** を押し、16 分音符を選択します。
- コンピュータのキーボードで **G** を 2 回押し、16 分音符を 2 つ入力します。

ハイハットを追加できたら、バスドラムとスネアのパターンを声部 2 に入力します。



Sibelius では、選択対象をフィルターすることができます。「フィルター」とは、特定の 属性を持つオブジェクトだけを選び出す機能です。それでは試してみましょう。

- 小節 7 を選択します。小節が青色の枠で囲まれます。
- **[編集] ▶ [フィルター] ▶ [声部] ▶ [声部 1]**（ショートカットは **Ctrl+Shift+Alt+1** または **⌘⇧⌥1**）を選択します。
- 声部 1 の音符だけ（ハイハットなど）が複数選択されます。

これで、声部 1 内の選択されている音符にのみ編集が適用されるようになります。それでは、符頭を変更しましょう。

- **Shift+Alt+1** または **⌘⇧1** を押して、符頭を変更します。

3.3 アイデアとドラムの楽譜

- すべての音符がクロス符頭に変更されて表示されます。



また、[プロパティ] ウィンドウの[音符] パネルのメニューから符頭を選択することもできます。[プロパティ] ウィンドウが表示されていない場合、[ウィンドウ] ▶ [プロパティ] (ショートカットは **Ctrl+Alt+P** または **⌘P**) を選択してオンにすることができます。

符頭について、詳しくは『リファレンス』の 2.25 符頭を参照してください。

アイデアのキャプチャ

それではここで、新しいアイデアを作成してみましょう。[アイデア] ウィンドウ内にアイデアを置く操作を、アイデアの「キャプチャ」と呼びます。

- 小節7を選択します。小節が青色の枠で囲まれます。
- [編集] ▶ [アイデアをキャプチャ] (ショートカットは **Shift-I**) を選択するか、[アイデア] ウィンドウ下部の[アイデアをキャプチャ] ボタン () をクリックします。

選択した楽譜が[アイデア] ウィンドウにすぐさま表示され、後で再利用することができます。

アイデアの編集

アイデアは、楽譜とタグの両方を編集できます。

アイデアのタグを編集するには、[アイデア] ウィンドウからキャプチャしたアイデアを選択し、ウィンドウ最下部の[アイデア情報の編集] ボタン () をクリックします (または、リストのアイデアを右クリック (Windows) または **Control**+ クリック (Mac) し、表示されたコンテキストメニューから[アイデア情報の編集] を選択します)。ダイアログが表示されます。

- アイデアに新しい名前を付けます。[Urbane Funky Drums 1] と入力しましょう。
- [タグ] ボックスにタグをいくつか入力することもできます。タグの内容や字数に制限はありませんので、アイデアを探すときに見つけやすくなるようなキーワードを書き込んでおきましょう。
- [カラー] をクリックしてカラーピッカーを表示し、アイデアの新しい背景色を選択します。ここでも、アイデアを探すときに見つけやすくなるように配色しておきましょう。
- すべての選択が完了したら [OK] をクリックし、[アイデア情報の編集] ダイアログを閉じます。

アイデアの楽譜を編集するには、アイデアを[アイデア] ウィンドウから選択し、ウィンドウ最下部の[アイデアの編集] ボタン () をクリックします (または、コンテキストメニューの[アイデアの編集] を選択します)。新しいドキュメントウィンドウが別のスコアを開いたかのように表示されます。アイデアは、スコアのように編集することができます。音符 / 小節の追加 / 削除、テキスト / ライン / その他のマークの追加などの操作を行うことができます。アイデアの編集が完了したら、[ファイル] ▶ [保存] (ショートカットは **Ctrl+S** または **⌘S**) を選択して保存してから、[ファイル] ▶ [閉じる] (ショートカットは **Ctrl+W** または **⌘W**) を選択してウィンドウを閉じ、元のスコアに戻ります。

アイデアに保存されていない変更を破棄するには、[ファイル] ▶ [閉じる] を選択してから、変更の保存を確認するダイアログが表示されたら [いいえ] をクリックします。

ここで紹介したものは、アイデアに関する操作のほんの一部に過ぎません。詳しくは、『リファレンス』の 5.11 アイデアを参照してください。

リピート小節

ドラムや他のパーカッションのパートは、1 小節か 2 小節の長さで繰り返されるパターンによって構成されていることがよくあります。このような場合、編曲者は、小節を繰り返しコピーするのではなく、リピート小節記号を記入することが多いのです。こう表記することで、演奏者は、前の小節とまったく同じパターンを演奏するということを理解することができます。Sibelius では、演奏者が演奏するようにリピート小節が再生されます。

タンバリンのパートをスコアに加えて、どのように動作するのか見てみましょう。

- **[作成]** ▶ **[楽器]** を選択するか、ショートカット **I** を押します。
- **[セクション]** リストから **[一般的な楽器]** を選択します。
- **[パーカッションとドラム]** ファミリーを選択してから、**[タンバリン]** を選択します。
- **[スコアに追加]** をクリックします。
- **[スコア内の譜表]** リストから **[タンバリン]** を選択し、**[下へ]** ボタンを使って **[ドラムセット (ロック)]** と **[シンセサイザー (a)]** の間に表示されるよう順序を変更します。
- **[OK]** をクリックしてスコアに戻ります。

スコアに追加されたパーカッション譜表が表示され、ドラムパートを記譜することができます。次に、**[アイデア]** ウィンドウの **[スコア]** ボタンをクリックし、リストから **[Urbane Tambourine 1]** アイデアを見つけます。このアイデアを、小節 9 へコピー & ペーストします。

リピート小節記号を追加するには、タンバリン譜表の小節 10 を選択し、**F11** を押してテンキーの第 5 レイアウトを表示させます。ここで (テンキーの) **1** を押して、リピート小節を 1 つ追加します。小節 16 に到達するまで、**1** を何度か押します。

テンキーの第 5 レイアウトからは、2 小節および 4 小節のリピート小節も追加することができます。Sibelius では、さまざまな種類のリピートを再生することができます。

リピート小節について、詳しくは『リファレンス』の  **2.27 リピート小節** を参照してください。

パーカッションのパートの完了

印刷されたスコアを参考に、楽譜の **[Drum Set]** と **[Tambourine]** のパートに覚え書きを入力します。**[アイデア]** ウィンドウ、リピート小節、複数の声部を使用して、パーカッションのパートの入力を完了します。

3.4 コード記号

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア [プロジェクト 3] を開き、[4 コード記号] バージョンを [現在のバージョン] にする必要があります。これを行うには、[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択し、このバージョンをリストから選択してから [現在のバージョンにする] をクリックします。

Sibelius では、コード記号は、楽譜のその位置における和音を示す、コードテキストとコードダイアグラムの 2 部分から構成されています。コードダイアグラムは、演奏者がどの指でギターのどのフレットのどの弦を押さえるべきなのを示しており、ときにコードボックス、フレットボードグリッド、ギターフレームなどとも呼ばれます。

コード記号は、2 つの方法で入力することができます。スコアに直接入力するか、MIDI デバイスで和音の音符を演奏します。その後、コード記号の 2 部分の一方または両方を選択するかどうかを選択できます。

このセクションでは、コード記号をタイプ入力で入力・編集したり、MIDI コード記号入力を再生・修正したり、コード記号プラグインを使用する方法について説明します。コード記号について、詳しくは『リファレンス』の  2.10 コード記号を参照してください。

タイプ入力によるコード記号の作成

Sibelius では、タイプ入力するだけでコード記号をスコアに追加することができます。

- コード記号を置きたい音符または和音の上をクリックします。この例では、[Electric Stage Piano] 譜表の最初の完全小節を選択します。
- [作成] ▶ [コード記号] (ショートカットは **Ctrl+K** または **⌘K**) を選択します。
- 選択した音符の上に、点滅カーソルが表示されます。
- 表示させたい和音を英語でタイプ入力します。Sibelius では、コード記号が首尾一貫し読みやすいものになるよう、必要に応じて特殊な記号が自動作成されます。Ab13 (#11) を入力してみましょう。
- スペースキーを押して次の音符または拍へと進むか、**Tab** キーを押して次の小節の先頭へと移動します。

特殊なシャープとフラット記号および特殊文字を使って適切なコード記号が作成されます。この例では、Ab13(#11) と表示されます。

コード記号を入力する一番簡単な方法は、MIDI デバイスで和音を再生して Sibelius に読み取らせる方法です。

演奏によるコード記号の作成

Sibelius では、コードに含まれる音符から 600 以上のコードタイプを認識することができるため、MIDI キーボード (またはギター) を使用して、コード記号をスコアにすばやく入力することができます。

(和音を演奏して Sibelius に入力するには、ご使用のコンピュータに接続されている MIDI デバイスが必要です。接続されている MIDI デバイスをお持ちでない場合、上記の方法でコード記号をスコアへタイプ入力します。)

それでは入力してみましょう。

- [Electric Stage Piano] 譜表の 3 番目の完全小節を選択します。

- **【作成】▶【コード記号】**（ショートカットは **Ctrl+K** または **⌘K**）を選択します。
- 最初の音符の上に点滅カーソルが表示されます。
- MIDI キーボードで C メジャーを演奏します。
- C のコード記号が入力され、次の拍へと移動します。

シンプルな三和音から非常に複雑な拡張和音まで、さまざまな和音を演奏することができます。演奏した和音に対して最も適切なコード記号が、Sibelius により記譜されます。さまざまな組み合わせの音符を MIDI キーボードで演奏し、どのように記譜されるのか確認してみましょう。

標準設定では、コードのボイスニングにより、コードの種類だけではなくコードの記譜の方法も決まります。たとえば、このコードを転回形で再生すると、別のベース音を使用するコード記号（D/F# など）が作成されます。Sibelius の和音認識のカスタマイズについて、詳しくは『リファレンス』の **図 8.13 コード記号の編集**を参照してください。

先ほど作成したコード記号を **Ctrl** または **⌘** を押したまま選択して削除するか、**【元に戻す】** を使ってスコアから削除します。それでは、「Urbane Filigree」で使用されている和音のコード記号を入力していきましょう。これらの和音は非常に複雑です。対応するコード記号を書き込むために再生する必要のある音符は次のとおりです。

Ab13(#11) Db13(#11) Gb13(#11) A13(#11)

F7alt. Bbm7 Eb13(#11) Em9

Abø7 Db7alt. Gb/Ab Ab13(b9)

F#ø7 B7(#5) B13(b9) F13(#11)

E13(#11)

プロジェクト 3

印刷されたスコアを参考に、コード記号のスコアへの追加を完了させます。MIDI キーボードで和音を再生するか、和音名をタイプ入力するか、好みの方法で追加します。

同等のコードテキスト

Sibelius では、音高の組み合わせに対して最適なコード記号が自動的に選択されますが、別のコードタイプを表示させたい場合があるかもしれません。同じ音程のパターンで他にどのような和音があるのかどうかを確認するには、変更したいコード記号（1 つまたは複数）を選択してから **[編集] ▶ [コード記号] ▶ [同等のコードテキスト]**（ショートカットは **Ctrl+Shift+K** または **⇧⌘K**）を選択するか、右クリック（Windows）または **Control+** クリック（Mac）し、**[コード記号]** サブメニューから **[同等のコードテキスト]** を選択します。

たとえば $G^{#7}$ を A^{b7} へ変更する方法については、下のコード記号の異名同音を参照してください。

それでは操作してみましょう。

- **[Electric Stage Piano]** 譜表の最初の小節の和音 $A^{b13}(\sharp 11)$ を選択します。
- **Ctrl+Shift+K** または **⇧⌘K** を入力して、次の同等のコードテキストへと変更します。
- コードタイプが $D7(\frac{9}{b9})/G\sharp$ へと変更されます。
- **Ctrl+Shift+K** または **⇧⌘K** を入力して、次のコード記号へと変更します。
- コードタイプが $G^b\text{maj}13(\frac{\sharp 11}{\sharp 5}\text{sus}2)/A^b$ へと変更されます。
- この方法で、 $A^{b13}(\sharp 11)$ へと再び戻るまでコードテキストを変更していきます。

このように、Sibelius により好みのコードテキストが選択されなかった場合や、再生したボーシングにより別の種類の和音が推奨された場合にも、コード記号のコードテキストを簡単に変更することができます。

ここで、入力した和音がすべて正確に記譜されているかどうかを確認する必要があります。必要に応じて、**Ctrl+Shift+K** または **⇧⌘K** を入力して変更します。既存のコード記号を編集するには、コード記号をダブルクリックするか、変更したいコード記号を選択してから（メインキーボードの）**Return** キーを押します。その後、MIDI デバイスで和音を再生するか、正しいテキストを英語で入力します。

コード記号の異名同音

Sibelius では、直前の調号に従って和音が自動的に「表記」されますが、ときに、あるコード記号の異名同音のコードタイプを変更しないでコード記号のルートを変更したい場合があります。次のように行います。

- 異名同音に書き換えたいコード記号を選択します。
- 右クリックして **[コード記号] ▶ [コード記号の異名同音]** をコンテキストメニューから選択するか、**[編集] ▶ [コード記号] ▶ [コード記号の異名同音]** を選択します。
- コード記号のルート（および、スラッシュを付けて表記される和音の場合、いずれかの交互ベース音）が、異名同音で書き換えられます。

コード記号のコピー

ここまで、コード記号をキーボード譜表に表示する方法を見てきましたが、Sibelius では、コード記号を他の楽器にコピーすると、コードダイアグラムを表示するかどうかが判別され、移調するスコアに正確な移調が表示されるよう、コードダイアグラムが自動更新されます。

先ほど入力したコード記号をコピーしてみましょう。

- [Electric Stage Piano] の一番上の譜表をトリプルクリックし、スコア全体を通してこの譜表を選択します。
- [編集] ▶ [フィルター] ▶ [コード記号] を選択し、コード記号だけを選択します。
- [Electric Guitar] 譜表の最初の完全小節の先頭を **Alt+** クリックまたは **⌘+** クリックし、コード記号をギター譜表へとコピーします。
- [4-string Bass Guitar] 譜表の最初の完全小節の先頭を **Alt+** クリックまたは **⌘+** クリックし、コード記号をベースギター譜表へとコピーします。

標準設定では、ベースギター譜表にもコードダイアグラムが表示されます。コードダイアグラムがコード記号に表示されないようにするには、コピーした記号が選択されている状態で [編集] ▶ [コード記号] ▶ [コード記号を追加 / 削除] を選択します。

コード記号は、複数の譜表にわたって複数コピーすることができます。**Ctrl+C** または **⌘C** を押し、複製したいコード記号をクリップボードへコピーしてからコピー先の譜表を選択し、**Ctrl+V** または **⌘V** を押します。

コードダイアグラムのリボイス

Sibelius では、ギター譜表に表示されているコード記号のすべてにコードダイアグラムが自動的に割り当てられます。6弦ギターのスタンダードチューニングに対してあらかじめ用意されているコードダイアグラムから演奏しやすいものを選択されるか、和音に含まれる音符に合わせて自動計算されます。つまり、特殊なギターチューニングを使用する場合でも、Sibelius では特定のコードタイプに対する演奏可能なダイアグラムを幅広く選択できます。

標準設定で選択されるコードダイアグラムは、任意に変更できます。MIDI デバイスを演奏する際に選択されるコード記号も、同じように変更できます。これを行うには、変更したいコードダイアグラムのコード記号 (1 つまたは複数) を選択してから [編集] ▶ [コード記号] ▶ [コードダイアグラムをリボイス] (ショートカットは **Ctrl+Shift+Alt+K** または **⌘⇧⌘K**) を選択するか、右クリック (Windows) または **Control+** クリック (Mac) して [コード記号] サブメニューの [コードダイアグラムをリボイス] を選択します。

それでは操作してみましょう。

- [Electric Guitar] 譜表の最初の小節の和音 $A^{b13}(\sharp 11)$ を選択します。
- **Ctrl+Shift+Alt+K** または **⌘⇧⌘K** を押し、表示されているコードダイアグラムのボイスングを変更します。何度か繰り返し試してみて、どのようなボイスングが選択できるか確認してみましょう。

標準設定のコードタイプまたはコードダイアグラムを設定する方法、および、コード記号の見た目を変更する方法について、詳しくは『リファレンス』の  2.10 コード記号および  8.13 コード記号の編集を参照してください。

コード記号プラグイン

Sibelius には、コード記号を操作するのに非常に便利なプラグインがいくつか搭載されています。

既存のコード記号から簡単な伴奏を追加するには、[プラグイン] ▶ [コード記号] ▶ [コード記号の音符化] を動作させます。このプラグインは、スコア内のコード記号を使用して、さまざまなスタイルのピアノまたはギター伴奏を作成します。

コード記号を再生または入力することなく、既存の楽譜にコード記号を追加したい場合、[プラグイン] ▶ [コード記号] ▶ [コード記号の追加] を使用すると、曲の和声に合わせて楽譜のコード記号が選択されます。

3.5 リピートとコーダ

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア [プロジェクト 3] を開き、[5 リピートとコーダ] バージョンを [現在のバージョン] にする必要があります。これを行うには、[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択し、このバージョンをリストから選択してから [現在のバージョンにする] をクリックします。

このセクションでは、リピート小節線、1 番括弧、2 番括弧、コーダを使用して楽譜の表記を変更する方法について説明します。Sibelius では、スコアを再生すると、これらの一般的なリピート指示すべてが演奏者が演奏するとおりに再生されます。

リピート小節線

リピート小節線を使って、この楽曲の最初の 4 小節をリピートさせてみましょう。まずは、リピートされる部分の最後にリピート小節線を追加します。

- 小節 4 の最後の小節線をクリックします。紫色に変化し、選択されていることが示されます。
- [作成] ▶ [小節線] ▶ [リピート終了] を選択します。
- 小節線がリピート小節線に変化し、リピートされる部分の終了位置を示します。

この場合、演奏者はここからスコアの先頭へと戻り、繰り返して演奏します。リピートには、アフタクト小節も含まれます。リピートされる部分の開始位置を作成するには、別のリピート小節線を作成する必要があります。

- [作成] ▶ [小節線] ▶ [リピート開始] を選択します。
- マウスポインタが濃い青色に変化し、オブジェクトを入力できる状態であることが示されます。
- 最初の小節の先頭の小節線をクリックし、リピート開始小節線を配置します。
- **Esc** キーを押してすべての選択を解除してから **P** を押し、スコアを先頭から再生します。

これで、小節 4 まで再生されると、小節 1 へと戻って再生されるようになります。

1 番括弧と 2 番括弧

作曲家や編曲者は、より複雑なリピートには 1 番括弧と 2 番括弧を使用します。1 番括弧は 1 回目のリピート時のみ、2 番括弧は 2 回目のリピート時にのみ演奏されます。Sibelius では、1 番括弧と 2 番括弧のラインは大譜表ラインとなり、プロジェクト 2 で使用したテンポラインと同じように動作します。

1 番括弧と 2 番括弧を使ったリピートを作成してみましょう。1 回目のリピートの終止として使用するために、小節を 1 つ挿入する必要があります。

- 先ほど追加したリピート終了小節線を選択し、**Delete** キーを押して削除します。
- いずれかの譜表の小節 4 を **Ctrl**+クリックまたは **⌘**+クリックして大譜表を選択します。すべての譜表を囲む紫色の二重の枠が表示されます。
- [編集] ▶ [コピー] (ショートカットは **Ctrl**+**C** または **⌘**+**C**) を選択します。
- [Trumpets in B $\flat$] 譜表の小節 8 を選択します。この小節を、2 回目のリピートの終止として使用します。
- [編集] ▶ [貼り付け] (ショートカットは **Ctrl**+**V** または **⌘**+**V**) を選択し、コピーした小節をスコアへ貼り付けます。新しい小節が既存の小節の間に挿入され、小節 8 になります。

- この小節が選択されている状態で **L** を押し、**[作成] ▶ [ライン]** ダイアログを開きます。
- **[大譜表ライン]** の右側のリストの最初のラインを選択します。これが 1 番括弧です。
- **[OK]** をクリックして、ラインを小節 8 に追加します。



ラインはスコアの一番上に追加されましたが、それぞれのパートの小節 8 の上に表示されます。それでは、リピート終了小節線と 2 番括弧追加して、リピートを完成させましょう。

- 小節 8 の最後の小節線をクリックします。紫色に変化し、選択されていることが示されます。
- **[作成] ▶ [小節線] ▶ [リピート終了]** を選択します。
- 小節線がリピート小節線へと変化します。
- **[Trumpets in B $\flat$]** 小節 9 を選択します。
- **L** を押して **[作成] ▶ [ライン]** ダイアログを開きます。
- **[大譜表ライン]** の右側のリストの 3 番目のラインを選択します。これが 2 番括弧です。
- **[OK]** をクリックして、ラインを小節 8 に追加します。

ライン同士が重なり合わないよう縮めるには、マウスを使ってラインの端をドラッグするか、**←** または **→** キーを使用します（より大きなステップでドラッグするには、**Ctrl** キーまたは **⌘** キーを押しながら操作します）。



コーダとダルセーニョ (D.S.) のリピート

コーダとダルセーニョ (D.S.) を使ったリピートを作成してみましょう。小節 22-25 をコーダ部分に変化させます。

- 小節 22 の先頭の小節線を選択します。
- **[作成] ▶ [小節線] ▶ [複縦線]** を選択して複縦線を追加します。複縦線は、ある部分の終了位置を示します。
- **[レイアウト] ▶ [ブレイク] ▶ [大譜表の分割]** を選択し、複縦線の後に間隔を空けます。Sibelius により、音部記号、調号、括弧が自動的に再記述されます。
- **[Trumpets in B $\flat$]** 譜表の小節 22 の先頭の休符を選択します。
- **[作成] ▶ [テキスト] ▶ [テンポ]** (ショートカットは **Ctrl+Alt+T** または **⌘⌘T**) を選択します。
- 右クリック (Windows) または **Control+** クリック (Mac) して、用語メニューを表示します。

3.5 リピートとコーダ

- 推奨される用語と記号のリストから、2つのコーダ記号のうち最初の記号（♢）を選択します。
- **Coda** とタイプ入力し、**Esc** キーを押します。

それでは、ダルセーニョを追加しましょう。こうして、小節 21 の末尾に到達したら小節 14 へと戻ることを演奏者に指示します。

- 小節 21 の末尾の複縦線を選択します。
- **[作成] ▶ [テキスト] ▶ [その他の大譜表テキスト] ▶ [リピート (D.C./D.S./To Coda)]** を選択します。
- 右クリック (Windows) または **Control**+ クリック (Mac) して、用語メニューを表示します。
- 推奨される用語と記号のリストから、**D.S. al Coda** を選択します。
- **Esc** を押して選択を解除します。
- いずれかの譜表の小節 14 を **Ctrl**+ クリックまたは **⌘**+ クリックして大譜表を選択します。すべての譜表を囲む紫色の二重の枠が表示されます。
- **S** を押して **[作成] ▶ [シンボル]** ダイアログを開きます。
- ダイアログ最上部の **[リピート]** と記された列に表示されている 2 つのセーニョ記号のうち、最初の記号（※）を選択します。
- **[添付先]** オプションが **[大譜表]** に設定されていることを確認します。
- **[OK]** をクリックすると、スコアにシンボルが挿入されます。
- 譜表上のシンボルを、小節の末尾の適切な位置へとドラッグします。(シンボルと他のオブジェクトの違いは、シンボルでは Sibelius の配置ルールを無視してその位置を自由に変更することができる点です。)

スコアを再生すると、追加されたリピートに従って再生されます。リピートの使用について、詳しくは『リファレンス』の  **4.6 リピート** を参照してください。

3.6 アレンジと再生

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア【プロジェクト 3】を開き、【6 アレンジと再生】バージョンを【現在のバージョン】にする必要があります。これを行うには、【ファイル】▶【バージョン】▶【バージョンを編集】を選択し、このバージョンをリストから選択してから【現在のバージョンにする】をクリックします。

このセクションでは、Sibelius のアレンジツールについて説明します。アレンジ™ 機能は、別の楽器に対して楽譜を自動的に再アレンジする機能です。スコアの再生に使用されるサウンドを変更したり、エフェクトを追加したり、スコアからオーディオファイルを作成する方法についても説明します。

弦楽器の伴奏の追加

「Urbane Filigree」スコアの [Synthesizer] パートを使って、弦楽器の伴奏を作成してみましょう。

- 【作成】▶【楽器】（ショートカットは **I**）を選択し、弦楽器パートをスコアへ追加します。
- 【セクション】リストで【一般的な楽器】が選択されていることを確認してから、【ファミリー】リストで【弦楽器】を選択します。
- 【Violin 1】をクリックして選択してから、**Ctrl** または **⌘** を押したまま【Violin 2】、【Viola】、【Violincello】を選択します。
- 【スコアに追加】をクリックして、選択されているすべての楽器をスコアに追加します。
- 【OK】をクリックしてスコアに戻ります。

Sibelius のアレンジ機能は、編曲やオーケストレーションの手助けするために設計されており、多くの時間を節約することができます。この機能を使えば、どのような種類の音楽も素早く簡単に作曲できます。

- [Synthesizer] 譜表の小節 10 の空の部分をクリックして選択します。
- 次に、別の [Synthesizer] 譜表の最後の小節を **Shift+** クリックし、両方の譜表が青色の枠で囲まれるようにします。
- 【編集】▶【コピー】（ショートカットは **Ctrl+C** または **⌘C**）を選択し、楽譜をクリップボードにコピーします。
- [Violin 1] 譜表の小節 10 を、譜表の空の部分をクリックして選択します。
- [Violoncello] 譜表の小節 10 を **Shift+** クリックして、弦楽器譜表をすべて選択します。
- 【音符】▶【アレンジ】（ショートカットは **Ctrl+Shift+V** または **⌘⇧V**）を選択します。
- 表示されるダイアログで【標準アレンジ】を選択し、【OK】をクリックします。

スコア内の弦楽器譜表で楽譜がアレンジされ、パートが楽器に振り分けられます。

アレンジ機能を使えば、任意の数の譜表からなる音楽を、別の任意の数の譜表へとコピーすることができます。ピアノのパートを要約（ピアノリダクション）したり、和音を複数の譜表へと拡散（エクスプロード）させたりすることができます。なによりも、アレンジの優れた機能を使用すれば、さまざまなスタイルやアンサンブルのアレンジや楽器編成が簡単にできるようになります。

詳しくは、『リファレンス』の  5.1 アレンジ™を参照してください。

3.6 アレンジと再生

スコアのミキシング

プロジェクト 1 で説明したとおり、[ミキサー] ウィンドウは、スコアの再生をコントロールする非常にパワフルなツールです。スコア内の各楽器の再生に使用されるサウンドを変更したり、リバーブやコーラスなどのエフェクトを追加したり、特定のパラメータを編集して各楽器のサウンドやスコア全体のミックスを調整することができます。

ここではまず、先ほど弦楽器セクションのアレンジに使用し、もう必要のなくなった [Synthesizer] 譜表を、ミキサーを使ってミュートしてみましょう。

- **M** を押して [ミキサー] ウィンドウを開きます。
- **[Synthesizer (a)]** と **[Synthesizer (b)]** 譜表ストリップが表示されるまで、下へスクロールします。
- 両方のストリップの **[ミュート]** ボタン (**M**) を 2 回クリックします。1 回クリックすると、譜表が部分的にミュートされ、2 回クリックすると完全にミュートされます。



スコアを再生してみましょう。弦楽器のパートが [Synthesizer] サウンドに置きかわっているのが聞き取れるはずです。

譜表ストリップのボリュームを調整し、弦楽器の各パートのバランスを調整します。弦楽器セクション全体のボリュームを変更したい場合は、[ミキサー] ウィンドウの最上部のグループストリップ () をオンにします。こうすると、スコア内の各楽器ファミリーのグループストリップが表示されます。これらを調整すると、その楽器ファミリー全体の相対的なボリュームとパンを変更することができます。

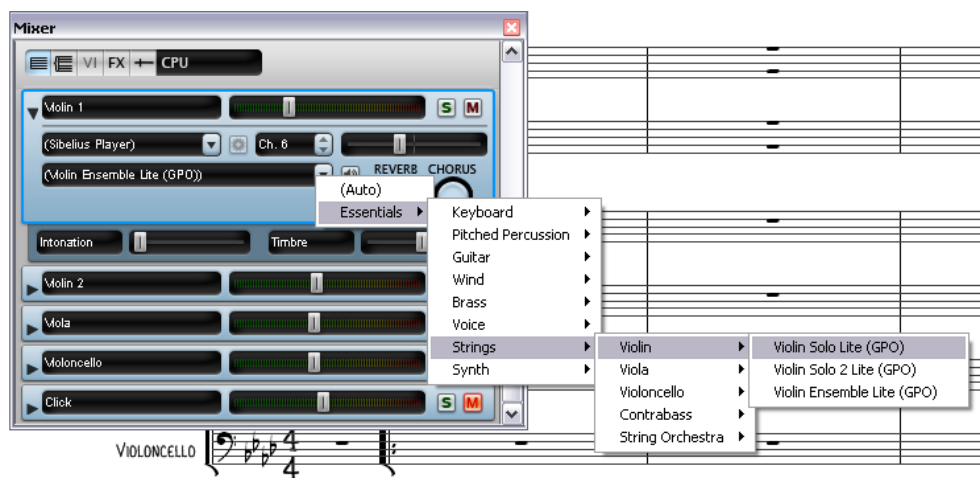
楽器のサウンドの変更

Sibelius でそれぞれの楽器を再生するのに、ご使用のコンピュータで使用可能なサウンドのうち、どのサウンドを使用するかを選択することができます。アンサンブルではなくソロ楽器を使用するよう、弦楽器のサウンドすべてを変更してみましょう。こうすることで、より小さなスコアとなり、くつろいだ雰囲気になります。

- **[Violin 1]** 譜表ストリップが表示されるまで、[ミキサー] ウィンドウを下へスクロールします。
- 楽器名の左の矢印をクリックし、譜表ストリップを拡大表示させます。
- 現在の表示 (**[Violin Ensemble Lite (GPO)]**) の隣の矢印をクリックします。
- 表示されるメニューには、Sibelius で使用可能な再生デバイスが表示されます。ここでは、Sibelius Sounds Essentials を使用しましょう。

プロジェクト 3

- **[Essentials]** ▶ **[Strings]** ▶ **[Violin]** ▶ **[Violin Solo Lite (GPO)]** を選択し、ソロバイオリンのサウンドへ変更します。



[Violin 2]、[Viola]、[Violoncello] 譜表を同じように変更します。それぞれ、**[Violin Solo 2 Lite (GPO)]**、**[Viola Solo Lite (GPO)]**、**[Cello Solo Lite (GPO)]** の各サウンドを使用します。[ミキサー] ウィンドウの譜表ストリップを閉じるには、楽器名の左の矢印をもう一度クリックします。

スコアを再生して違いを聴いてみましょう。新しいサウンドに合うよう、バランスを調整するとよいでしょう。

エフェクトのパラメーター

それぞれの楽器のサウンドには、最大 6 つのパラメーターがあります。パラメーターは、譜表ストリップを拡大表示すると表示されるフェーダーでコントロールします。



いずれかの楽器名の左の矢印を **Shift+** クリックすると、[ミキサー] ウィンドウのすべての譜表ストリップが拡大表示されます。

フェーダーを調整し、さまざまなエフェクトを変更して、Sibelius での再生がどのように変化するか聴いてみましょう。標準設定に戻すには、フェーダーをダブルクリックします。（この方法では、**[リバーブ]** および **[コーラス]** ノブを標準設定に戻すことはできません。水平方向に動かすフェーダーのみ戻すことができます。）

ミキサーを使って Sibelius の再生を変更する方法について、詳しくは『リファレンス』の **4.3 ミキサー** を参照してください。

オーディオファイルのエクスポート

Sibelius Sounds Essentials などの VST/AU バーチャルインストゥルメントを使えば、クリック 1 つでスコアをオーディオファイルとしてエクスポートすることができます。オーディオファイルは、CD に直接書き込んだり、MP3 などの他のフォーマットに変換することができます。これらを利用すれば、楽曲の雰囲気を伝えたり、練習時の伴奏として使用するために、指揮者や演奏者に録音物を提供することができます。



「Urbane Filigree」のオーディオファイルをエクスポートしてみましょう。

- **[再生] ▶ [再生ラインを先頭へ移動]** (ショートカットは **Ctrl+[** または **⌘[**) を選択するか、[再生] ウィンドウの対応するボタンをクリックします。
- **[ファイル] ▶ [エクスポート] ▶ [オーディオ]** を選択するか、ツールバーボタン (右上図) をクリックします。
- オーディオファイルの **[ファイル名]** を選択し、**[OK]** をクリックします。
- スコアがオーディオファイルとして録音され、スコアと同じフォルダ内に保存されます。

詳しくは、『リファレンス』の  **9.10 オーディオファイルのエクスポート** を参照してください。

プロジェクト 4

4.1 ワークシートの設定

このプロジェクトでは、Sibelius の教育機関用の機能の使用方法について説明します。この機能では、ワークシートや教材を作成し、Sibelius の教室での使用を管理することができます。

このプロジェクトの最初のセクションでは、Sibelius でワークシートを設定し、後で活用できるようにテンプレートとして保存します。スコア全体に使用されるテキストフォントを変更したり、さまざまな種類のテキストのプロパティを編集する方法についても説明します。

ワークシートクリエータ

広範な領域をカバーするワークシートクリエータ機能（『リファレンス』の 5.25 ワークシートクリエータ参照）では、あらゆるレベルの生徒用のワークシート、練習問題、ポスター、フラッシュカード、参考資料などの教材を作成することができます。ワークシートを作成する際は、用途に適したワークシートがワークシートクリエータにすでに用意されていないかどうか、作成を始める前に確認してください。

適したワークシートがない場合は、ワークシートクリエータのテンプレートを利用しましょう。さまざまなフォーマットのテンプレートが用意されており、空の小節に音符などを入力してだけでワークシートを作成することができます。これだけで大幅に作業時間を短縮できますので、適したテンプレートがある場合は、新しいワークシートをゼロから作成するのではなく、テンプレートを活用しましょう。

（テンプレートを使用するには、[ファイル] ▶ [ワークシートクリエータ] を選択すると表示されるダイアログで [テンプレート] を選択し、[次へ] をクリックします。使用可能なワークシートテンプレートのリストが左側に表示されます。ここでは独自のワークシートを作成していきますので、[キャンセル] をクリックしましょう。）

新規ワークシートの作成

テンプレートを使わずワークシートをゼロから作成したい場合、Sibelius で使用可能なレイアウトツールについて知っておく必要があります。レイアウトツールでは、主に譜表間隔、改行、改ページを調整します（これらについては、この『ハンドブック』のプロジェクト 2 で詳しく説明しています）。

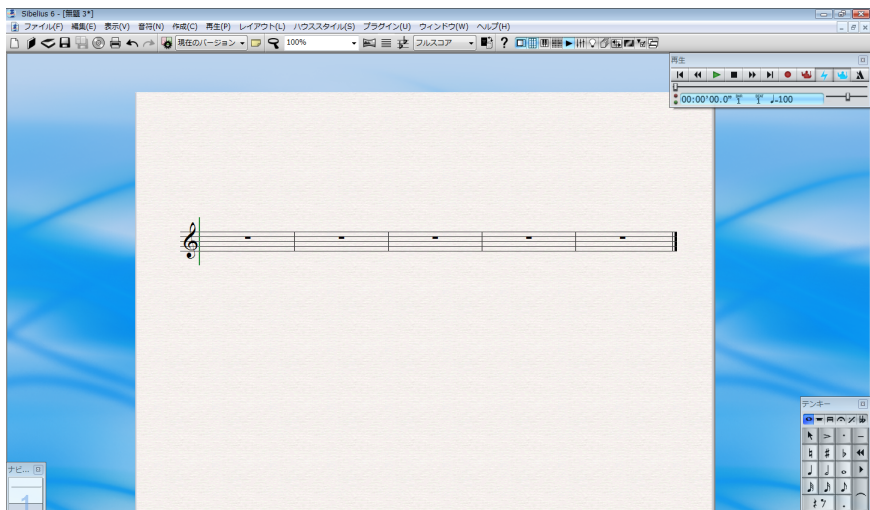
これまでに学んだスキルと、ここで新しく学ぶスキルを使って、ワークシートテンプレートのサンプルを作成し、ワークシートクリエータにテンプレートとして追加しましょう。

まず、新規スコアを設定します。

- [ファイル] ▶ [新規] を選択するか、ツールバーボタンをクリックします。
- [新規スコア] が表示されます。
- [空白] 譜面用紙を選択し、[楽器の変更] をクリックします。
- 表示されるダイアログで、[セクション] リストに [一般的な楽器] が選択されていることを確認します。
- [その他] ファミリーを選択し、使用可能な楽器のリストから [名前なし (高音部譜表)] を選択します。
- [スコアに追加] をクリックしてから [OK] をクリックします。
- [完了] をクリックして [新規スコア] ダイアログを閉じ、スコアを作成します。

プロジェクト 4

次のように表示されます。



それでは、小節をいくつか追加して、最初のページレイアウトを作成しましょう。

- **[作成] ▶ [小節] ▶ [その他]** (ショートカットは **Alt+B** または **⌘B**) を選択します。
- 表示されるダイアログで、**[小節数]** を **[43]** に設定し、**[OK]** をクリックします。
- マウスポインタが濃い青色に変化し、オブジェクトを入力できる状態であることが示されます。
- スコア内の任意の位置をクリックし、新しい小節を追加します。
- **Esc** キーを押し、すべての選択を解除します。
- **[レイアウト] ▶ [自動レイアウト]** を選択します。
- 表示されるダイアログで、**[自動改行を使用する]** をオンにし、**[改行の単位: 4 小節ごと]** を選択します。
- **[OK]** をクリックすると、スコアのレイアウトがすぐさま更新されます。

テンプレートを使って進める前に、**[ハウススタイル] ▶ [記譜ルール]** (ショートカットは **Ctrl+Shift+E** または **⌘⇧E**) を選択します。表示される **[記譜ルール]** ダイアログでは、スコア内の設定をさまざまに変更することができます。1つの音符またはオブジェクトに変更を加えると、スコア内にある同じ種類の音符またはオブジェクトすべてにその変更が適用されます。ここでは、2点を調整する必要があります。

- **[小節番号]** ページで、**[表示頻度]** を **[小節番号を付けない]** に設定します。こう設定すると、小節番号がワークシートに表示されなくなります。
- ダイアログの **[譜表]** ページで、**[ページが少なくとも全体の n% になったら譜表を整える]** を 100% に設定します。ページが埋まるとページ全体にわたって譜表が垂直方向に等間隔で自動配置されるため、このように設定すると、ワークシートのレイアウトを行う際、譜表の水平位置を完全にコントロールすることができます。

垂直位置の均等配置は、ここで行ったようなワークシート、試験用紙、その他の特殊な楽譜例を作成する場合にのみオフにしてください。その他の種類のスコアを作成する場合には、垂直位置の均等配置を常にオンにしておきましょう。詳しくは、『リファレンス』の **8.10 譜表間隔** を参照してください。

[OK] をクリックし、**[記譜ルール]** ダイアログを閉じます。

4.1 ワークシートの設定

すべての小節が 1 枚の A4 用紙に収まるよう、譜表のサイズを調整することもできます。

- **[レイアウト]** ▶ **[ドキュメントセットアップ]** (ショートカットは **Ctrl+D** または **⌘D**) を選択します。
- **[譜表サイズ]** の値を 6mm または 0.24 インチに変更します。
- **[OK]** をクリックしてスコアに戻ります。

テキストの追加

タイトルと、生徒が自分の名前を書き込むためのプレースホルダテキストを追加してみましょう。

- **[作成]** ▶ **[テキスト]** ▶ **[タイトル]** を選択します。
- マウスポインタが青色に変化し、オブジェクトを入力できる状態であることが示されます。
- 最初のページの最上部をクリックし、「スケールとアルペジオ」とタイプ入力します。
- **Esc** キーを 2 回押し、編集を終了してテキストの選択を解除します。
- **[作成]** ▶ **[テキスト]** ▶ **[サブタイトル]** を選択します。
- マウスポインタが青色に変化し、オブジェクトを入力できる状態であることが示されます。
- 最初のページの最上部をクリックし、「ワークシート 1」とタイプ入力します。
- **Esc** キーを 2 回押し、編集を終了してテキストの選択を解除します。
- **[作成]** ▶ **[テキスト]** ▶ **[特殊テキスト]** ▶ **[ワークシートのヘッダ (先頭ページ、右)]** を選択します。
- マウスポインタが青色に変化し、オブジェクトを入力できる状態であることが示されます。
- 最初のページの最上部をクリックし、「名前: _____」とタイプ入力し、**Return** キーを押して改行します。
- 「クラス: _____」とタイプ入力します。
- **Esc** キーを 2 回押し、編集を終了してテキストの選択を解除します。

次のように表示されます。

Name: _____
Class: _____

SCALES AND ARPEGGIOS
Worksheet 1



すべてのフォントを編集

分かりやすく読みやすいフォントが使用されるよう、このワークシートのテキストを変更しましょう。

- **[ハウススタイル]** ▶ **[すべてのフォントを編集]** を選択します。
- ドロップダウンリストから選択し、**[主なテキストフォント]** を認知のフォントに統一します。

テキスト表示がこのように変化します。

Name: _____

Class: _____

SCALES AND ARPEGGIOS

Worksheet 1



これ以降は、ワークシートに追加されるすべてのテキストに設定したフォントが使用されます。

テキストスタイルの編集

特定の種類のテキストのプロパティを変更したい場合、テキストスタイルを編集する必要があります。これにより、ある種類のテキストのフォント、サイズ、位置、その他の特性が特定されます。

これまで設定してきたワークシートの [タイトル] と [サブタイトル] のテキストスタイルを編集し、テキストがページの左に揃えられるようにします。

- タイトルをクリックして選択します。
- [ハウススタイル] ▶ [テキストスタイルの編集] (ショートカットは **Ctrl+Shift+Alt+T** または **⌘⇧⌘T**) を選択します。
- テキストスタイルの一覧で [タイトル] が選択されていることを確認してから [編集] をクリックします。
- [水平位置] ページで、[ページに揃える] から [左] を選択し、[OK] をクリックします。
- テキストスタイルの一覧から [サブタイトル] を選択し、[編集] をクリックします。
- [一般] ページで、[斜体] をオンにします。
- [水平位置] ページで、[ページに揃える] から [左] を選択し、[OK] をクリックします。
- [閉じる] をクリックしてスコアに戻ります。

Name: _____

Class: _____

SCALES AND ARPEGGIOS

Worksheet 1



ワークシートテンプレートへの追加

このスコアを、ワークシートクリエータのテンプレートに加えましょう。テンプレートに加えれば、後で使用することができ、テンプレートを準備する時間を短縮することができます。

- [ファイル] ▶ [ワークシートクリエータに追加] を選択します。
- [タイプ] オプションから [テンプレート] を選択し、ワークシートに名前 ([スケールとアルペジオ] など) を付けます。
- どのようなテンプレートなのか後でも分かりやすいよう、その他の情報を付け加えたい場合は、[説明 (教師用)] ボックスにタイプ入力します。

4.1 ワークシートの設定

- **[OK]** をクリックし、ワークシートをテンプレートリストに追加し、スコアに戻ります。

次回、**[ファイル] ▶ [ワークシートクリエイター]** を開き、テンプレートのリストを表示すると、作成した **[スケールとアルペジオ]** テンプレートがリスト内に表示されます。

4.2 スケールとアルペジオ

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア【プロジェクト 4】を開き、【2 スケールとアルペジオ】バージョンを【現在のバージョン】にする必要があります。これを行うには、【ファイル】▶【バージョン】▶【バージョンを編集】を選択し、このバージョンをリストから選択してから【現在のバージョンにする】をクリックします。

このセクションでは、プラグインを使用して、同じ種類のスケールを簡単に作成する方法について説明します。作成したスケールは、練習、校正、評価に使用できます。音高を G# から A $\flat$ へ異名同音に変更したり、音高を再入力してスケールの種類を変更する方法についても説明します。これらのツールすべてを使用することで、さまざまなスケールシートを簡単に作成することができます。

スケールの追加

Sibelius のパワフルなプラグインを使えば、ほんの数クリックであらゆる調のスケールシートを作成することができます。この作業は、このプロジェクトで作成するワークシート練習の基本となります。すべての調の長音階を追加してみましょう。

- 【プラグイン】▶【その他】▶【スケールとアルペジオ】を選択します。
- 表示されるダイアログで、【スケールとアルペジオを現在のスコアに追加】が選択されていることを確認してから【次へ】をクリックします。
- ドロップダウンメニューから【長音階】を選択し、【次へ】をクリックします。
- スコアに追加されるスケールのさまざまなオプションを選択するダイアログが表示されます。スケールの表示方法（上行または下行）、オクターブの幅、開始音、音符の長さなど、さまざまなオプションを選択することができます。
- 【スケールタイプ】が【長調】に設定されており、【調号を含む】オプションがオンになっていることを確認します。
- 【スケールまたはアルペジオの数】ドロップダウンリストから【すべてのオクターブを除く】を選択し、【開始音の音程】ドロップダウンリストから【半音階】を選択します。これで、C から B までのすべての音で開始する長音階が追加されます。
- 【完了】をクリックすると、スケールがスコアに追加されます。

長音階が上行と下行の 2 オクターブにわたって表示されます。枠で囲まれたテキストは各スケールを示しています。Sibelius により、各スケールの前に調号が追加されます。また、次のスケールは新たに別の大譜表の上に表示されます。

臨時記号の異名同音

臨時記号の異名同音は、音符（1 つまたは複数）を選択し、**Return** キー（メインキーボード）を押すことで、簡単に変更することができます。D# メジャーを Eb メジャーに変更してみましょう。

- D# メジャーの 4 小節を選択します。
- **Return** キーを押し、すべての臨時記号の異名同音を変更します。
- **Esc** を押して音符の選択を解除します。

調号が正しくありませんので、変更しましょう。

- **K** を押し、【作成】▶【調号】を開きます。
- 右のリストから Eb メジャーを選択し、【OK】をクリックします。

4.2 スケールとアルペジオ

- マウスポインタが青色に変化します。
- 新しい E $\flat$ メジャースケールの最初の小節の先頭をクリックし、そこに調号を作成します。
- 譜表の上のラベルをダブルクリックし(または選択してから **Return** キーを押し)、テキストを E $\flat$ メジャーに変更します。



前の大譜表の調号が変更されますが、作業中のワークシートには必要ありませんので、非表示に切り替えましょう。

- 前の大譜表の最後の小節にある調号の変更(複縦線の後)を選択すると、紫色に変化し、選択されていることが示されます。
- **Ctrl+Shift+H** または $\square \text{H}$ を押し、調号の変更を非表示にします。
- 音符と複縦線の間隔を元に戻すには、小節全体を選択し、[レイアウト] ▶ [音符間隔をリセット] (ショートカットは **Ctrl+Shift+N** または $\square \text{N}$) を選択します。

音符とその他のオブジェクトの表示と非表示について、詳しくは『リファレンス』の  5.9 オブジェクトの非表示を参照してください。

ここで、E $\sharp$ メジャースケールを F メジャーに書き換え (F $\flat$ の音高を E へ再び変更します)、A $\sharp$ メジャースケールを B $\flat$ メジャーに変更し、同じ方法で調号の変更を非表示にします。ラベルを変更することを忘れないようにしましょう。

スケールの変更

既存のスケールを別の種類のスケールに変更したい場合、Sibelius では2つの方法で簡単に行えます。同じリズムを使用しながら音高を再入力するか、別のプラグインを使用して行います。

E $\sharp$ メジャースケールを異名同音へ変更し、2つの F メジャースケールができあがりしました。音高を再入力して、2つ目の F メジャースケールを F $\sharp$ メジャースケールに変更しましょう。

- まず、調号を F $\sharp$ メジャーへ変更し、前のように調号の変更を非表示にします。
- F のスケールの最初の音符を選択します。
- [音符] ▶ [音高の再入力] (ショートカットは **Ctrl+Shift+I** または $\square \text{I}$) を選択します。
- 通常の直線ではなく、点線のカーソルが表示されます。これは、リズムではなく音高のみが書き換えられることを示しています。
- MIDIキーボードで上下2オクターブにわたって F $\sharp$ メジャーのスケールを再生するか、**F G A B C D E F G A B C** というふうにタイプ入力していきます(調号に従って、必要に応じて音符にシャープが自動的に付けられます)。
- 枠に囲まれたテキストを、F $\sharp$ メジャーに変更します。

次のように表示されます。



たとえばメジャーからハーモニックマイナーへスケールを変換したい場合、Sibelius では、便利なプラグインを使用することで簡単に行えます。

プロジェクト 4

- D メジャーの 4 小節を選択します。
- **[プラグイン] ▶ [変換] ▶ [スケールの変換]** を選択します。
- 表示されるダイアログで、**[現在のスケール]** を **[D イオニアン (長調)]** に設定されていることを確認します。
- **[新規のスケール]** ドロップダウンリストを **[F ハーモニックマイナー]** へと変更し、**[OK]** をクリックします。

音符は、全く異なる種類のスケールに変換されます（ただし、ラベルと調号を変更する必要があります）。



生徒がスケールについて学べるよう、譜表の下に音符名を追加することもできます。音符名を追加したい小節を選択し、**[プラグイン] ▶ [テキスト] ▶ [音符名の追加]**を選択すると、譜表の上または下に音符名が自動的に追加されます。

パワフルな Sibelius のプラグインについて、詳しくは『リファレンス』の 6. プラグインを参照してください。

4.3 レイアウトとフォーマット

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア [プロジェクト 4] を開き、[3 レイアウトとフォーマット] バージョンを [現在のバージョン] にする必要があります。これを行うには、[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択し、このバージョンをリストから選択してから [現在のバージョンにする] をクリックします。

このセクションでは、生徒が記入して完成させることのできる未完成のワークシートの作成に使用する、より複雑なレイアウトやフォーマットの操作方法について説明します。生徒がスケールを完成させ、異なる音部記号を持つ譜表へスケールをコピーし、スケールの種類を見分ける練習問題を設定する方法についても説明します。

別の譜表の追加

まず、アルト記号の付いたビオラ譜表を追加します。

- [作成] ▶ [楽器] を選択します。
- [弦楽器] ファミリーから、[ビオラ] を選択して [スコアに追加] をクリックします。
- 右側のリストから [ビオラ] を選択し、[下へ] ボタンを使って [名前なし (高音部譜表)] の下へと移動させます。
- [OK] をクリックしてスコアに戻ります。

譜表がページ上で混み合うので、ページを 3 分の 2 ほど下がったところの大譜表の最後の複縦線を選択して、[レイアウト] ▶ [ブレイク] ▶ [改ページ] を選択します。

各大譜表の先頭に表示されている楽器名を選択してから **Delete** キーを押して削除します。最初の大譜表に対してこれを 1 回、続く複数的大譜表に対してもう 1 回行います。

[Viola] 譜表の大譜表の最後に作成される注記の調号を非表示にしたい場合があります。これを行うには、大譜表の最後の調号を選択し、調号が紫色に変化したのを確認してから、**Ctrl+Shift+H** または **⇧⌘H** を押します。

不完全なスケール

生徒の手で完成させる、未完成のスケールの練習問題をいくつか作成しましょう。まず、高音部譜表をトリプルクリックしてすべて選択してから、ビオラ譜表を **Alt+** クリックまたは **Option+** クリックして譜表全体にわたってすべてのスケールをコピーしたら、**Ctrl+↓** キーまたは **⌘+↓** キーを押して 1 オクターブ下げます。これで、生徒の手で完成させるスケール部分の素材をスコアから削除することができます。

- [Viola] 譜表の F ハーモニクマイナースケールの最後の 3 小節を選択し、**Delete** キーを押して削除します。
- 小節が選択されている状態で、**Ctrl+Shift+H** または **⇧⌘H** を押して小節休符を非表示にします。(印刷物として生徒に配布するためのワークシートを作成している場合、音符を削除せず非表示に切り替えます。非表示にすれば、音符は印刷されません。また、こうすることで、生徒が正しい音符を書き込むための十分なスペースを確保することができます。)
- **Esc** キーを押し、すべての選択を解除します。

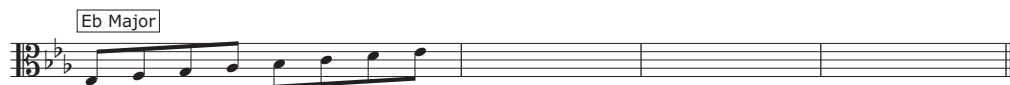
プロジェクト 4

高音部譜表には完全形の F ハーモニックマイナースケールが、またビオラ譜表には最初の 8 つの音符だけが表示されます。



それでは、Eb メジャースケールで同じ操作を行ってみましょう。今回は、高音部譜表全体を非表示にします。

- 上記と同じ手順で、Eb メジャースケールの不完全なビオラバージョンのレイアウトが完了したら、同じスケールの高音部譜表バージョンの 4 小節を選択します。
- **Delete** キーを押してすべての音符を削除します。
- **[レイアウト] ▶ [空の譜表を非表示]** (ショートカットは **Ctrl+Shift+Alt+H** または **⌘⇧⌥H**) を選択します。
- 高音部譜表が非表示となり、ビオラ譜表だけが表示されます。

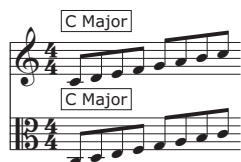


4.3 レイアウトとフォーマット

- 最初の小節線が、先に追加したタイトルの「と」の部分と同じ位置に並ぶように譜表をドラッグします。

SCALES AND ARPEGGIOS

Worksheet 1



同じように、C# メジャースケールの大譜表の先頭を同じ位置へドラッグします。

Name: _____

Class: _____

SCALES AND ARPEGGIOS

Worksheet 1

Musical notation for three scales. The first two are C Major and C# Major, each with treble and bass staves. The third is F Harmonic Minor, with a treble staff and an empty bass staff. The notation is labeled with the scale name in a box above each staff.

テキストを追加する前に、F ハーモニックマイナースケールの高音部譜表を下へドラッグし、この譜表とその上の譜表の間の間隔を空けます。これを行うには、譜表の空の部分をクリックしてドラッグします。

同じように、E♭ メジャースケールのピアノ譜表と E メジャースケールの高音部譜表をドラッグして、その上のスペースを広げます。

ワークシートへのテキストの追加

ワークシートへ追加するテキストにはさまざまな種類（問題、引用、例、説明など）がありますので、テキストの追加には Sibelius の単純テキストスタイルを使用することをおすすめします。

ワークシートに追加された単純テキストは、主なテキストフォント（前に Verdana に変更しました）で表示されます。特殊文字や特殊記号はありませんので、ワープロソフトを使って入力するときのように書き込むことができます。

先ほどインデントした最初の 2 つのスケール例の左に、説明を追加してみましょう。

- [作成] ▶ [テキスト] ▶ [その他の譜表テキスト] ▶ [単純テキスト] を選択します。
- マウスポインタが青色に変化します。
- テキストをクリックして配置すると、最初の譜表の一番上と同じ高さの位置にタイトルに沿って点滅するカーソルが表示されます。
- タイプ入力して（メインキーボードの）**Return** キーを押し、譜表に重なってテキストが開始する新しい行へと移動します。次のようにタイプ入力します。

長音階は、クラシック音楽において最も重要なスケールのひとつです。

このワークシート内の未完成のスケールをすべて完成させなさい。高音部譜表とアルト譜表の欠けている音符を書き込みなさい。

- **Esc** キーを 2 回押し、編集を終了してテキストの選択を解除します。

単純テキストを作成し、スケールの上に説明を追加しましょう。同じ方法で、F ハーモニックマイナースケールの上に次のようにタイプ入力します。

ハーモニックマイナースケールも、クラシック音楽および他の多くの伝統的音楽において非常に重要なスケールです。音符をアルト譜表へとコピーして、下の F ハーモニックマイナースケールを完成させなさい。

その後、E $\flat$ メジャースケールの上に次のようにタイプ入力します。

アルト譜表の E $\flat$ メジャースケールを完成させなさい。

最後に、次のようにタイプ入力します。

高音部譜表およびアルト譜表の E メジャースケールを完成させなさい。

単純テキストはマウスポインタの位置に表示されるため、ページ上のどこへでもテキストを配置することができ、さまざまな用途に使用することができます。

4.4 クラスルームコントロール

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア **【プロジェクト4】** を開き、**【4 クラスルームコントロール】** バージョンを **【現在のバージョン】** にする必要があります。これを行うには、**【ファイル】** ▶ **【バージョン】** ▶ **【バージョンを編集】** を選択し、このバージョンをリストから選択してから **【現在のバージョンにする】** をクリックします。

Sibelius ライセンスサーバー上で動作するネットワークライセンス版の Sibelius をお持ちの場合、Sibelius の教室での活用度を高める教師用の機能を使用できます。このセクションでは、生徒に課題を配布したり、生徒が作業したスコアを回収する方法について説明します。また、生徒の作業内容を解答用紙と比較する方法についても説明します。

Sibelius ライセンスサーバーを使用した課題の配布

クラスルームコントロール機能を使用するには、**【ファイル】** ▶ **【クラスルームコントロール】** を選択し、ライセンスサーバーパネルで設定した教師用のパスワードを入力します。表示されるダイアログに、ライセンスサーバーと現在作業中のスコアに接続されているコンピュータの一覧が表示されます。

これまでに作成してきたワークシートをクラスルームの生徒全員に送信してみましょう。

- **【すべて選択】** をクリックし、リストされている生徒全員を選択します。
- **【現在のスコアを送る】** をクリックします。

Sibelius により、ネットワークに接続しているコンピュータすべてにスコアが配布されます。

この方法で、教室全体にスコアを送信することができます（別のスコアを送信する場合は **【他のスコアを送る】** をクリックします）。特定の生徒に対して個別に送信したい場合は、リストから生徒の名前を選択し、**【現在のスコアを送る】** / **【他のスコアを送る】** をクリックします。

Sibelius ライセンスサーバーを使用した課題の回収

ネットワークを経由して課題を配布する場合と同じように、ボタンクリックひとつで生徒のスコアを回収することができます。作業の終わったワークシートを生徒全員から回収してみましょう。

- **【すべて選択】** をクリックし、リストされている生徒全員を選択します。
- ダイアログ右側の **【回収したスコアを保存して開く】** ラジオボタンが選択されていることを確認します。
- **【スコアを取得する】** をクリックします。

ネットワークに接続されている各コンピュータからスコアが回収されます。回収されたスコアは教師用コンピュータに保存され、個別に開かれます。

スコアを見るには、**【スコア】** フォルダを開きます。**【生徒のスコア】** フォルダには、生徒ごとにフォルダが作成されており、フォルダ内には各生徒のスコアが保存されています。

リストから生徒の名前を選択してから **【スコアを取得する】** をクリックし、特定の生徒から個別にスコアを回収することもできます。

詳しくは、『リファレンス』の  5.3 クラスルームコントロールを参照してください。

スコアの切り替え

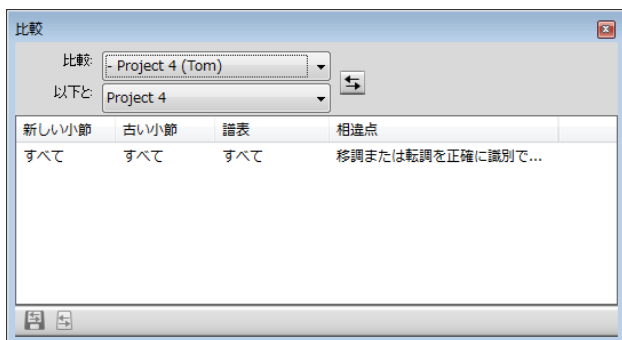
生徒全員のスコアを開くと、どれがどの生徒のスコアなのかが分かりにくく感じられることがあります。Sibelius では、生徒のユーザー名がスコアのファイル名の末尾に追加されるため、[ウィンドウ] メニューをクリックして開かれているスコアの最下部に表示されているファイル名を確認すれば、どれが誰のスコアであるかをひと目で判別することができます。

開かれているスコアをすばやく切り替えるには、キーボードショートカットを使用すると便利です。開かれているスコアの表示を順に切り替えるには、**Ctrl+Tab** または $\text{⌘} + \text{Tab}$ を押します。前のスコアへと切り替えるには、**Ctrl+Shift+Tab** または $\text{⌘} + \text{Shift} + \text{Tab}$ を押します。

作業済みワークシートの比較

Sibelius の [比較] ウィンドウを使えば、生徒による作業の完了した ワークシートと解答用紙の差異を表示させることができます。

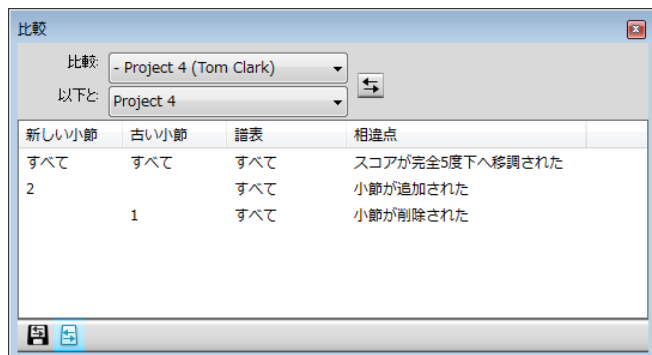
[比較] ウィンドウが表示されていない場合、[ウィンドウ] ▶ [比較] (ショートカットは **Ctrl+Alt+C** または $\text{⌘} + \text{⌘} + \text{C}$) を選択してオンにします。



生徒のスコアと解答を比較してみましょう。(生徒のスコアを回収していない場合、ご自身でワークシートを完成させてもかまいません。その場合、相違を確認できるよう、誤答をいくつか含めておきましょう。)

- [プロジェクト 4] サンプルスコアを開きます。
- [比較] ウィンドウの [比較] ドロップダウンリストから、生徒が完成させたワークシートを選択します。
- [以下と] ドロップダウンリストから、[プロジェクト 4] ファイルの [完了したワークシート] バージョンを選択します。
- [比較] ボタン ($\text{⌘} + \text{⌘} + \text{C}$) をクリックします。
- 両方のスコアが並んで表示され、相違の概要が表示されます。相違から、生徒が正確にワークシートを完成させたかどうかを確認することができます。

- [閉じる] をクリックしてスコアに戻ります。[比較] ウィンドウに、2つのワークシート間の相違が一覧表示されます。



相違をダブルクリックすると、対応する小節が両方のスコア内に表示されます。また、オブジェクトの背景がその状態に応じて色づけされ、追加されているものは緑色、移動されているものは赤色、変更されているものはオレンジ色で表示されます。

このパワフルなツールを使えば、練習問題を答えることができなかった生徒をすばやく確認することができ、ご使用のワープロソフトで開くことのできるスクリーンショットやスコアを用いた詳細なレポートを作成することができます。バージョンとスコアの比較について、詳しくは『リファレンス』の 5.22 ページョンを参照してください。

プロジェクト 5

5.1 ビデオの使用

Sibelius では、スコアにビデオを追加して同期再生させたり、ビデオ用にスコアを書いたりすることができます。SMPTE、LTC、ストリッピングなどの難解な同期再生に関する技術に気にする必要はありません。学校、自宅、スタジオなど、ロケーションに関係なく、コンピュータさえあればどこでも操作が行えます。

このプロジェクトでは、プラグインを使ったヒットポイントの作成、タイムコードのスコア上への表示、音楽とビデオの合わせ方など、Sibelius でのビデオの使用方法について説明します。また、Pinnacle Studio などの動画編集ソフトウェアで動画用サウンドトラックとして使用するオーディオを Sibelius からエクスポートする方法についても説明します。

このプロジェクトの最初のセクションでは、ビデオを既存のスコアへ添付する方法について説明します。

Sibelius でのビデオ再生には、Windows では Windows Media Player または QuickTime（インストールされている場合）が、Mac では QuickTime が使用されます。したがって、ご使用のオペレーティングシステムで再生できるビデオはすべて、Sibelius でも再生できます。ご使用のオペレーティングシステムが対応しているフォーマットの一覧については、『リファレンス』の  4.10 ビデオを参照してください。

まず、[ファイル] ▶ [開く]（ショートカットは **Ctrl+O** または **⌘O**）を選択し、[サンプルスコア] フォルダ内にある [プロジェクトファイル] フォルダの [プロジェクト 5] と名前の付いたサンプルスコアを見つけます。このスコアを開きます。

このスコアは、有名なコメディ・キャラクターである Mr. ビーンが登場する TV アニメシリーズの抜粋に対して書かれた、ハワード・グッドオール作曲のオリジナルスコアです。

このスコアにビデオファイルを追加する前に、[1 ビデオ機能を使う] バージョンを [現在のバージョン] にする必要があります。[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択し、リストからこのバージョンを選択してから [現在のバージョンにする] をクリックします。

スコアへのビデオの追加

スコアにビデオを追加するには、次のように操作します。

- [再生] ▶ [ビデオと時間] ▶ [ビデオを追加] を選択します。
- [Mr. Bean] ビデオファイルは、[プロジェクト 5] スコアと同じフォルダ内にあります。このファイルを選択し、[開く] をクリックします。

Sibelius の [ビデオ] ウィンドウが開き、緑色の再生ラインが現在置かれている位置のフレームが表示されます。

ビデオを添付した状態で、**スペースキー**を押すと再生が開始されます。このプロジェクトの後半では、音楽をキャラクターの動きに合わせる操作を行いますので、このスコアと [Mr. Bean] クリップがどのようなものか、ここでよく確認しておきましょう。

テンポスライダーをドラッグして再生スピードを変えても、ビデオとスコアは常に同期再生されます。また、[再生] ウィンドウのタイムラインスライダーを動かしても、同期再生がとぎれることはありません。

[ビデオ] ウィンドウ

[ビデオ] ウィンドウの表示と非表示を切り替えるには、[ウィンドウ] ▶ [ビデオ] を選択するか、ショートカット **Ctrl+Alt+V** または **⌘+V** を使用します。ツールバーボタン (右図) をクリックするしてもかまいません。



ビデオには会話が含まれていますが、スコアのボリュームに合うよう、会話のボリュームを設定することができます。設定には、[ビデオ] ウィンドウのボリュームスライダーを使用します。ボリュームスライダーを左端へ動かすと、ビデオサウンドトラックのボリュームはゼロになります。

[ビデオ] ウィンドウの表示サイズは、[ビデオ] ウィンドウのボリュームスライダーの左にある 4 つのボタンから選択することができます。オリジナルサイズの 50%、100%、200%、全画面表示から選択できます。また、[再生] ▶ [ビデオと時間] サブメニューのメニュー項目を使って選択することもできます。

ビデオを探す

作曲対象となるビデオを探すなら、インターネットが便利です。映画の広告や予告編がダウンロードできるウェブサイトが多数ありますので、生徒用の作曲課題素材として利用するとよいでしょう。

ご自身で制作されたビデオに対して作曲することもできます。このプロジェクトの後半では、Sibelius のスコアを使って、動画編集ソフトウェアのサウンドトラックを作成する方法について説明します。

5.2 映像に合わせた作曲

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア [プロジェクト 5] を開き、[2 映像に合わせた作曲] バージョンを [現在のバージョン] にする必要があります。これを行うには、[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択し、このバージョンをリストから選択してから [現在のバージョンにする] をクリックします。

このバージョンにビデオを追加するには、[再生] ▶ [ビデオと時間] ▶ [ビデオを追加] を選択し、[プロジェクト 5] スコアと同じフォルダから [Mr. Bean] ビデオファイルを選択します。

Sibelius の [ビデオ] ウィンドウが開き、緑色の再生ラインが現在置かれている位置のフレームが表示されます。

このセクションでは、タイムコードツール、ヒットポイントツール、プラグインを使用して音楽を映像に合わせる方法について説明します。

タイムコードとデュレーションの追加

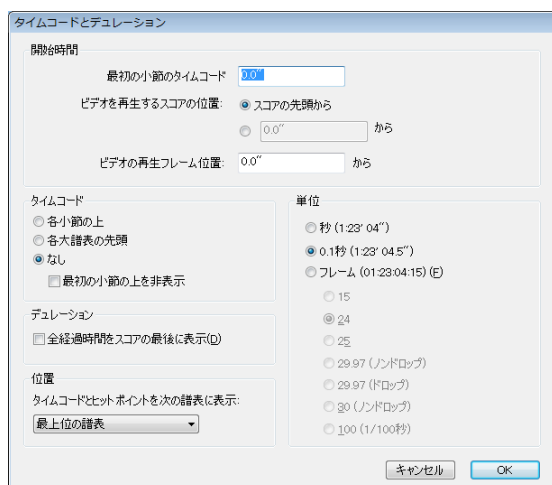
タイムコードとは、スコアやビデオ内の位置を経過時間で表したものです。通常、スコアの先頭から計測していきます。映画やテレビ用の音楽では、リールの先頭やその他の任意の位置から計測します。スコアを再生すると、現在のテンポ（単位は BPM（1 分あたりの拍数））とともにタイムコードの値が [再生] ウィンドウに表示されます（『リファレンス』の  4.1 再生参照）。

ヒットポイントとは、スコア内の時間の参照符で、映画やビデオ内の重要なイベントの位置を示しています。こうすることで、これらの位置に合わせてより簡単に作曲することができます。

Sibelius では、テキストとしてタイムコードがスコア内に自動表示されます。その位置までの小節数、小節の長さ、メトロノーム記号に基づいて、小節線の時間位置が算出されます。タイムコードは、音楽の特定のパッセージの正確なタイミングを取る場合や、音楽のイベントとヒットポイント（映画のイベント）を同期させる場合に特に便利です。

スコア内のすべての大譜表の上に表示されるタイムコードと、算出されたデュレーションを示すマーカーを追加していきましょう。

- [再生] ▶ [ビデオと時間] ▶ [タイムコードとデュレーション] を選択します。



- [各大譜表の先頭] ラジオボタンを選択し、各大譜表にタイムコードが表示されるようにします。

- [全経過時間をスコアの最後に表示] をオンにします。
- [単位] で [フレーム (01:23:04:15)] を選択し、1 秒あたりのフレーム数単位でタイムコードが算出されるようにします。(映画 / テレビ用の作曲の標準フォーマットです。)
- 1 秒あたりのフレーム数が [24] に設定されていることを確認したら、[OK] をクリックしてスコアに戻ります。

スコアの各大譜表の上にタイムコード値が表示されます。テンポを変更したり、小節を削除したり、小節の長さを変更したりすると、タイムコードが再計算されます。

ヒットポイントの追加

スコアにヒットポイントを追加すると、再生ラインが置かれている位置に追加されます。ヒットポイントを追加するには、[ビデオ] ウィンドウの [ヒットポイントを追加] ボタン (📍) をクリックするか、[作成] ▶ [その他] ▶ [ヒットポイント] を選択します。ヒットポイントがスコア内のその位置に追加されます。タイムコード同様、テンポを変更したり、小節を追加または削除したり、小節の長さを変更したりすると、ヒットポイントの位置が再計算されます。

[Mr. Bean] クリップ内の特定のポイントを指定していきましょう。作業員がピアノを落とすシーンで、ピアノを落とすたびに動作と音楽を合わせる必要があります。

- 再生ラインがスコアの先頭にあることを確認したら、**スペースキー**を押して再生を開始します。
- [Mr. Bean] クリップで作業員がピアノを落とすたびに、[ヒットポイントを追加] ボタンをクリックします。

スコアを通して、合計 5 つのヒットポイントを作成します。ヒットポイントはほぼ次の位置になります。

- ヒット 01 – 00:00:27:00
- ヒット 02 – 00:00:40:01
- ヒット 03 – 00:00:50:12
- ヒット 04 – 00:01:00:19
- ヒット 05 – 00:01:07:23

追加したヒットポイントが上記の位置ちょうどになかったり、ヒットポイントが多すぎたりしても、気にする必要はありません。ヒットポイントの調整や削除については、この後で説明しています。

ヒットポイントの編集

先ほどスコアに追加したヒットポイントを編集していきましょう。[再生] ▶ [ビデオと時間] ▶ [ヒットポイント] (ショートカットは **Shift+Alt+P** または **⌘+P**) を選択します。

- 表示されたダイアログには、先ほど追加したヒットポイントのリストが表示されています。
- ヒットポイントのタイムコードを変更するには、[タイムコード] 値を 1 回クリックして選択してから、もう 1 回クリックして上記の値をタイプ入力します。
- **Return** キー (メインキーボード) を押し、変更を確定します。

ヒットポイントの名前も同じ方法で編集することができます。[ヒット 01] を [Piano Drop 01] へというふうにすべてのヒットポイント名を変更してみましょう。

また、ヒットポイントを選択してから **Delete** キーを押してヒットポイントを削除したり、[新規] をクリックして新しいヒットポイントを作成することもできます。編集が完了したら、[OK] を押してスコアに戻ります。

5.2 映像に合わせた作曲

詳しくは、『リファレンス』の  4.11 タイムコードとヒットポイントを参照してください。

既存の音楽を映像に合わせる

スコアのテンポを変更することで、ビデオクリップ内のシーンに音楽を合わせることができますが、これにはプラグインを使うと便利です。

- ・ [ファゴット] 譜表の小節 8 の先頭から小節 12 の最初の音符までのパッセージを選択します。
- ・ [プラグイン] ▶ [作曲ツール] ▶ [選択部分を時間に合わせる] を選択します。
- ・ [選択部分の終わりを設定] オプションを [選択したヒットポイントの時間] に変更します。
- ・ ドロップダウンリストから [Piano Drop 01] を選択し、[OK] をクリックします。
- ・ 音楽中の間隔にヒットポイントを合わせるために必要なテンポの変更が計算され、なされた変更の概要が表示されます。[閉じる] をクリックしてスコアに戻ります。
- ・ スコアを再生すると、小節 12 の 2 拍目で作業員がピアノを落として以降、ビデオとサウンドが完全に同期再生されます。
- ・ 同じように、小節 12 の 2 拍目から小節 16 の 3 拍目までのパッセージを作成してから、[Piano Drop 02] ヒットポイントに合うように [選択部分の終わりを設定] オプションを変更します。

最後の 3 つのヒットポイントにも同じように行います。

- ・ [Piano Drop 03] を小節 20 の 2 拍目に
- ・ [Piano Drop 04] 小節 23 の最後の拍の前の 8 分休符に
- ・ [Piano Drop 05] 小節 26 の 2 拍目の前の 8 分休符に

最後に、Mr. Bean が笑うとエンディングが始まるようにします。

- ・ 小節 26 の 8 分休符から小節 29 の最初の拍までのパッセージを選択します。
- ・ [プラグイン] ▶ [作曲ツール] ▶ [選択部分を時間に合わせる] を選択します。
- ・ [選択部分の終わりを設定] オプションを [新規の終了時間] に変更します。
- ・ [0 時間 1 分 17 秒] を入力し、[OK] をクリックします。

スコア全体を再生し、結果を確認します。

5.3 サウンドトラックのビデオへの追加

プロジェクトのこのセクションから開始する場合、サンプルスコア [プロジェクト 3] を開き、[3 サウンドトラックのビデオへの追加] バージョンを [現在のバージョン] にする必要があります。これを行うには、[ファイル] ▶ [バージョン] ▶ [バージョンを編集] を選択し、このバージョンをリストから選択してから [現在のバージョンにする] をクリックします。

このバージョンにビデオを追加するには、[再生] ▶ [ビデオと時間] ▶ [ビデオを追加] を選択し、[プロジェクト 5] スコアと同じフォルダから [Mr. Bean] ビデオファイルを選択します。

このセクションでは、Sibelius からスコアをオーディオファイルとしてエクスポートする方法について説明します。エクスポートしたオーディオファイルは、動画編集プログラムを使用することでサウンドトラックとしてビデオに追加できます。

オーディオファイルのエクスポート

Sibelius Sounds Essentials などのバーチャルインストルメントを使用すれば、クリック操作ひとつでスコアをオーディオファイルとしてエクスポートすることができます。オーディオファイルは、CD に直接書き込んだり、MP3 などの他のフォーマットに変換することができます。これらを利用すれば、楽曲の雰囲気を変えたり、練習時の伴奏として使用するために、指揮者や演奏者に録音物を提供することができます。



Mr.Bean のサウンドトラックのオーディオファイルをエクスポートしてみましょう。

- [再生] ▶ [再生ラインを先頭へ移動] (ショートカットは **Ctrl+[** または **⌘[**) を選択するか、[再生] ウィンドウのボタンをクリックします。
- [ファイル] ▶ [エクスポート] ▶ [オーディオ] を選択するか、ツールバーボタン (右上図) をクリックします。
- オーディオファイルの [ファイル名] を選択し、[OK] をクリックします。
- スコアがオーディオファイルとして録音され、スコアと同じフォルダ内に保存されます。

詳しくは、『リファレンス』の  9.10 オーディオファイルのエクスポートを参照してください。

動画編集プログラムでムービーを開く

動画編集ソフトウェアを起動します。ここでは、Pinnacle Studio (Windows のみ) を使用したビデオ編集方法を見ていきますが、iMovie、Windows Movie Maker などの他のプログラムを使用することもできます。

サウンドトラックを追加するムービーを開きます。

サウンドトラックを Pinnacle Studio に追加します。

[2 編集] タブをクリックします。

音楽を追加するには、ビデオアルバムの左側の高音部記号アイコン (6 番目のタブ) をクリックします。Sibelius からエクスポートしたオーディオファイルをブラウズして参照し、(高音部記号の付いた) タイムライン上の対応するトラックへとオーディオファイルをドラッグします。

Pinnacle Studio のムービーを完了します。

[3 ムービー出力] タブをクリックします。

5.3 サウンドトラックのビデオへの追加

ウェブサイト、メール、プレゼンなどで使用するために、ムービーをハードディスクに保存するには、ファイルタイプとして、**[AVI]**、**[MPEG]**、**[ストリーム]**のいずれかを選択します。**[ファイルの作成]** をクリックし、ムービーを保存したい場所を選択します。

DVD に記録するには、書き込み可能な DVD を挿入し **[ディスク]** タブをクリックします。**[ディスク作成]** をクリックしてムービーを DVD に書き込みます。

索引

この索引は『ハンドブック』用です。『リファレンス』では、より詳しく Sibelius の機能を説明しています。この索引で見つからない項目は、『リファレンス』をご参照ください。

数字

1 番括弧と 2 番括弧	111
3 連符	79

A

ASIO	63
------------	----

D

D.S.	112
DirectSound	63

I

Inkpen2 フォント	73
--------------------	----

M

MIDI インターフェース	28, 31
MIDI ギター	99
MIDI 入力	52, 57
コード記号の	107
MIDI の設定	27, 30

O

Opus フォント	73
-----------------	----

P

PhotoScore Lite	75
Pinnacle Studio	144

R

Reprise フォント	73
--------------------	----

S

Scorch	92
Sibelius Player	62
Sibelius Sounds Essentials	62
SibeliusMusic.com	92
Sibelius のアンインストール	
Mac	20
Windows	16
Sibelius の別コンピュータへの移動	25
Sibelius ライセンスサーバー	133
Sibelius リファレンス	8

あ

アーティキュレーション	47, 83
アイデアウィンドウ	102
アイデアのキャプチャ	105
アウフタクト小節	74
アッチェレランド	82
アルファベット入力	56
アレンジ	114
アンサンブル	72

い

移調	
スコア	58
オクターブ単位で	56
楽器	58
異名同音の変更	126
印刷	41
インストール	
Sibelius	
Mac	17
Windows	12
インターネット出版	92

う

ウィンドウメニュー	
アイデア	102
キーボード	45
ツールウィンドウを非表示	40
テンキー	40, 43
ナビゲーター	38
パート譜	89
ビデオ	140
フルスコアに切り替え	60
プロパティ	64
ミキサー	61
再生	54, 61
比較	84, 134

え

エクササイズ	スケール、アルペジオを参照
エクスポート	92
オーディオトラック	117, 144
グラフィック	92
エフェクト	116
演奏テクニック	66

お

オーディオエンジンのオプション	63
オーディオトラック	117, 144
大きな譜表	86
音楽フォント	73
音高	
記譜音 (トランスポーズピッチ)	58
実音 (コンサートピッチ)	58
音高の再入力	127
音節	64

索引

音符

アーティキュレーション	83
コピー	50
移調	45, 56
異名同音	126
大きくする	86
音符名の追加	128
間隔をリセット	127
削除	49
タブ譜への変換	100
小さくする	87
入力	56
非表示	129
符頭の種類の変更	104
編集	44
連音符	79
音部記号	78
音符メニュー	
アレンジ	114
スコアを移調する	58
フレキシタイムオプション	97
フレキシタイムのオプション	53
フレキシタイム入力	54
音高の再入力	127
音符の入力	56

か

カーソル	46
カーソル	再生、入力、テキストを参照
改ページ	129
歌詞	64
テキストファイルからインポート	65
ハイフン	64
ライン	64
長音線	64

楽器

移調	58
音部記号	78
作成	72
追加	129
変更	90, 100
楽器のパート譜	59, 89
楽器編成	72
楽器名	67
間隔	
譜表の	87
環境設定	43

き

キーボード (MIDI)	
USB	27
キーボードウィンドウ	45
キーボードショートカット	9, 43
キーボードリダクション	91
記号	113
ギター	99
ギターフレーム	コード記号を参照
記譜音	58
キュー	89
キューとして貼り付け	90

休符

削除	49
非表示	129
強弱記号	65, 80
ヘアピン	65

く

空白ページ	88
クォンタイズ	再表記、フレキシタイムを参照
グラフィック	
エクスポート	92
フォーマット	92
繰り返し	45
クリック	54
クレッシェンド	65, 82

こ

コーダ	111
コード記号	107
コードダイアグラムのリボイス	110
コピー	109
異名同音	109
コード記号を追加 / 削除	110
再生による作成	107
タイプ入力で作成	107
同等のコードテキスト	109
コードボックス	コード記号を参照
ご意見	10
向上	10
コピー	50
アイデア	102
グラフィックを Word へ	92
テキスト	80
マウスで	50
コンサートピッチ	58
コンテキストメニュー	80

さ

再インストール	25
Mac	20, 21
Windows	16
サイズ	
ページの	86
再生	61
トラブルシューティング	63
ボリューム	61
ライン	61
開始	61
楽器のサウンドの変更	115
設定	63
停止	61
早送り	61
巻き戻し	61
再生ウィンドウ	54, 61
再生メニュー	
再生デバイス	63
再生ラインを先頭へ移動	117
ビデオと時間サブメニュー	
タイムコードとデュレーション	141
ヒットポイント	142

ビデオを追加	139
サイトライセンス	11
再表記	55, 91
サウンドトラック	144
削除	49
タイトルページ	88
小節	50
作成	
パート	90
楽器	72, 129
小節	122
作成メニュー	
コード記号	107
シンボル	113
タイトルページ	88
テキストサブメニュー	
サブタイトル	123
タイトル	123
テクニク	67
テンポ	66, 112
リピート (D.C./D.S./To Coda)	113
発想記号	65, 80
ライン	81, 112
音部記号	78
楽器	73, 129
調号	79
連音符	79
テキストサブメニュー	
歌詞サブメニュー	64
その他の譜表テキストサブメニュー	
ブレンテキスト	132
小節サブメニュー	
その他	122
小節線サブメニュー	
リピート開始	111
リピート終了	111
その他サブメニュー	
ヒットポイント	142
楽器の変更	90, 100
サブタイトルテキスト	123

し

実音	58
弱起小節	74
小節	
アウフタクト	74
コピー	50
リピート	106
削除	50
作成	122
小節線	
リピート	111
小節番号	122
衝突防止	67

す

ズーム	40
スキャニング	75
スコア	

バックアップ	44
スコアの比較	84
スコア情報	74
ステップタイム入力	57
ステレオ位置	62
ストリップ	ミキサーウィンドウを参照
すべてのフォントを編集	123
スラー	82

せ

声部	104
全経過時間をスコアの最後に表示	141
選択	
パッセージ	48
大譜表パッセージ	49
複数	48
選択対象	
グラフィック	92

た

タイトルテキスト	123
タイトルページ	74, 88
ダイナミックパート	59, 89
大譜表	
ブレーク	86
パッセージの選択	49
分割	112
タイムコード	141
縦置き	86
タブラチュア	99
ダルセーニョ	112

ち

注記	
調号	127
調号	74, 79
非表示	127

つ

ツールウィンドウ	40
----------------	----

て

ディミヌエンド	65, 82
テキスト	64
コピー	80
テクニクテキスト	66, 81
テンポ	66
テンポテキスト	81
フォント	64
ブレン	132
テキストスタイルの編集	124
テクニクテキスト	66, 81
テンキーウィンドウ	43
テンポ	73, 81
テンポテキスト	112

と

登録	22
ドキュメントセットアップ	123
ドラムセット	101

索引

トランスポーズピッチ 58

な

ナビゲーター 38

に

入力

ステップタイムで 57

2つの譜表に 98

音高のみ 127

ギタータブ譜 100

コード記号 107

ドラムセットの記譜 103

リアルタイムで MIDI 経由 52

和音 57

の

ノートパソコン 43

は

パーカッション 101

バージョン 40

パート 59, 89

レイアウト 90

パートウィンドウ 89

ハウススタイル 73

ハウススタイルメニュー

すべてのフォントを編集 64, 123

テキストスタイルの編集 124

記譜ルール 87, 122

バックアップ 44

パッセージの選択 48

発想記号テキスト 65, 80

パノラマ 39

早送り 61

バランス 61

パン位置 62

ハンドル 130

ひ

ピアノ

キーボード 45

リダクション 91

比較ウィンドウ 84, 134

ヒットポイント 141, 142

ビデオ 139

ウィンドウ 140

サウンドトラック 144

非表示

音符と休符 129

記入済みの譜表 41

調号 127

譜表 130

表示

パート 60

拍子記号 73

表示メニュー

ズームサブメニュー 40

パノラマ 39

ハンドル 130

レイアウト記号 88

非表示オブジェクト 49

譜表にフォーカス 41

ふ

ファイル スコアを参照

ファイルメニュー

SibeliusMusic.com に出版 92

エクスポートサブメニュー

オーディオ 117, 144

クイックスタート 37

バージョンサブメニュー

バージョンの編集 41

バージョンを保存 44

ワークシートクリエータ 121

ワークシートクリエータに追加 124

印刷 41

開く 8, 37

環境設定 43, 50, 53, 92

教室のコントロール 133

新規 71

保存 44

名前を付けて保存 44

フィルター 104

フォーマット 85, 129

複数コピー 80

複数選択 48

符頭 104

譜表

インデント 130

ミュート 115

間隔の変更 87, 122

間隔をリセット 88

再生サウンドの変更 115

作成 72

小さくする 87

追加 129

非表示 41, 130

譜表サイズ 86, 123

譜表のインデント 130

譜面用紙 72

ブライバシーに関する方針 25

プラグインメニュー

テキストサブメニュー

音符名の追加 128

ブレーク 86

フレーズマーク スラーを参照

ブレイクテキスト 132

フレキシタイム 52

オプション 53

フレットボードグリッド コード記号を参照

プロパティウィンドウ

テキストパネル 64

へ

ペースト コピーを参照

ヘアピン 65, 81

ヘルプ トラブルシューティングを参照

ヘルプメニュー

Sibelius リファレンス 8

編集	
テキスト	67
編集メニュー	
アイデアをキャプチャ	105
キューとして貼り付け	90
コピー	51
フィルターサブメニュー	
コード記号	110
リピート	51
繰り返し	45
元に戻す	45
削除	49
小節の削除	50
切り取り	50
貼り付け	50, 51
コード記号サブメニュー	
コードダイアグラムをリボイス	110
コード記号を追加 / 削除	110
同等のコードテキスト	109
選択サブメニュー	
グラフィックを選択	92
すべて選択	49
変則リズム	79
ほ	
ボリューム	61
強弱記号を参照	
ミュート	115
ま	
マウスホイール	38
巻き戻し	61
マグネティックレイアウト	67, 85
み	
ミキサーウィンドウ	61, 115
緑色の線	61
ミュート	115
め	
メトロノームのクリック音	54
も	
元に戻す	45

よ	
用語	9
用語メニュー	80, 113
用紙サイズ	86
横置き	86

ら	
ライセンスサーバー	133
ライン	
ヘアピン	81
リタルダンド / アッチェレランド	82
ラップトップ	43
ラレンタンド	82

り	
リダクション	91
リダクションプラグイン	91
リタルダンド	82
リバーブ	62
リピート	111
リピート (D.C./D.S./To Coda) テキスト	113
リピート小節	106
リファレンス	8

れ	
レイアウト	85, 129
レイアウトメニュー	
ドキュメントセットアップ	86, 123
ブレイクサブメニュー	
改ページ	129
改行	86
大譜表の分割	112
音符間隔をリセット	127
空の譜表を非表示	130
自動ブレイク	90, 122
譜表の間隔を最適化	87
譜表下部スペースをリセット	88
譜表上部スペースをリセット	88
レイアウト記号	88
連音符	79

わ	
ワークシート	121

